STUDIA TIBETICA No. 4

西蔵仏教宗義研究

第二巻

—トゥカン『一切宗義』シチェ派の章—

ཨཱ། ། ཐུན་ལྷག་གྲུབ་མཐའ་ཞི་བྱེད་པའི་སྒྲབས། །

西岡祖秀著

東京
東洋文庫
1978

STUDIA TIBETICA No4

A STUDY OF THE GRUB MTHAḤ OF TIBETAN BUDDHISM

Volume 2

—On the chapter on the Shi byed pa of Thuḥu bkwan's Grub mthaḥ—

Soshu Nishioka

TOKYO
THE TOYO BUNKO
1978

ま　え　が　き

これは東洋文庫において 1961 年以来行われている「チベット人との協同によるチベットの言葉・歴史・宗教・社会の総合的研究」の成果の一部である。筆者が東洋文庫の夏季チベット語講習会に出席したのは昭和 44 年のことであった。以来チベット仏教に興味をもち，3 年前東京大学に『一切宗義』のシチェ派の章をテーマにした修士論文を提出した。本書はその論文を要約・修正したものである。

その間，山口瑞鳳先生の懇切な御指導を受けたが，浅学非才と生来の怠慢のゆえに当初に企てた程のものを加えることが出来なかった。従って，上梓するにはいかにも貧しい成果ではあるが，ともかくも『一切宗義』シチェ派の章の訳註をそえ，その概略を述べることが出来たのは著者の望外の喜びである。最後に機会を与えて下さった東洋文庫当局に深く感謝したい。

昭和５３年３月

西　岡　祖　秀

目　　次

略語表

第一部　序　論

Ⅰ　トゥカン・ロサンチューキニマ『一切宗義』について …… 1

1.　テキストと著者 …… 1

2.　『一切宗義』シチェ派の章の構成 …… 2

Ⅱ　従来の研究 …… 3

Ⅲ　断境説の由来 …… 5

1.　『一切宗義』に見える歴史 …… 5

2.　『シチェ派仏教史』に見える歴史 …… 8

Ⅳ　断境説の思想 …… 12

1.　『一切宗義』に叙述された断境説 …… 12

2.　『般若波羅蜜多の行境における獅子の遊戯』に叙述された断境説 …… 13

3.　『パクサムジョンサン』に叙述された断境説 …… 15

4.　『殊勝の八章』に叙述された断境説 …… 18

序論註 …… 20

第二部　訳　註

Ⅰ　『一切宗義』シチェ派の章訳註

序 …… 26

＜1＞　シチェ派の宗義の形成過程 …… 26

＜1・1＞　宗派名の由来 …… 26

＜1・2＞　宗祖パ・タムパ・サンゲ …… 26

＜1・3＞　シチェ派の初期・中期・後期の伝統 …… 27

＜1・3・1＞　シチェ派の初期の伝統 …… 28

＜1・3・2＞　シチェ派の中期の伝統 …… 28

＜1・3・2＞　シチェ派の後期の伝統 …… 28

＜1・4＞　シチェ派三期の伝統の教誡 …… 28

＜1・4・1＞　初期の伝統の教誡 …… 28

＜1・4・2＞　中期の伝統の教誡 …… 29

＜1・4・2・1＞　マ・チューキシェラップの教誡 …… 29

＜1・4・2・2＞　ソチュン・ゲドゥンバルの教誡 …… 29

＜1・4・2・3＞　カム・イェシェゲルツェンの教誡 …… 30

＜1・4・2・4＞　中期の小伝統とその教誡 …… 31

＜1・4・2・5＞　中期の雑多の伝統とその教誡 …… 31

＜1・4・3＞　後期の伝統の教誡 …… 32

＜1・4・3・1＞　一般の教義部分 …… 33

＜1・4・3・2＞　特別の教義部分 …… 33

＜1・5＞　シチェ派の教誡の本質 …… 34

＜2＞　その一支派であるチュ派の〔宗義の〕形成過程 …… 35

＜2・1＞　支派名の由来 …… 35

＜2・2＞　チュ派の教誡の伝統 …… 35

＜2・3＞　マチグ・ラプドゥンマとその弟子 …… 36

＜2・4＞　「断」の教誡の本質 …… 37

結　語 …… 38

奥書き …… 39

訳　註 …… 40

Ⅱ　『般若波羅蜜多の行境における獅子の遊戯』訳註

序 …… 51

＜1＞　「断」の教誡の伝統 …… 51

＜2＞　「断」の教誡の真髄 …… 52

＜2・1＞　金剛禅定 …… 52

＜2・2＞　虚幻禅定 …… 54

＜2・3＞　勇行禅定 …… 55

＜2・3・1＞　断 …… 55

＜2・3・2＞　勃　発 …… 55

＜2・3・3＞ 退治の成果 …… 55
＜2・3・4＞ 退転の克服 …… 55
＜2・3・4・1＞ 疾病を断つこと …… 56
＜2・3・4・2＞ 鬼魔を断つこと …… 56
＜2・3・4・3＞ 恐怖を断つこと …… 56
＜2・3・4・4＞ 死体〔に対する恐怖〕を断つこと …… 56
＜2・3・4・5＞ 不浄なるものを断つこと …… 57
結　語 …… 57

訳　註 …… 58

第三部　テ キ ス ト

Ⅰ 『一切宗義』シチェ派の章テキスト …… 61
Ⅱ 『般若波羅蜜多の行境における獅子の遊戯』テキスト …… 72

略　語　表

BA	G.N.Roerich : Blue Annals, Calcutta, 1949—1953.
CDP	Rig ḥdzin rta mgrin mgon po : gCod dbaṅ mdor bsdus rin po cheḥi phreṅ ba, 15 fols.（東洋文庫西蔵蔵外文献 No. 49—738）.
CTB	Z.Yamaguchi : Catalogue of the Toyo Bunko Collection of Tibetan Works on History, Tokyo, 1970.
CTZ	Kon sprul Yon tan rgya mtsho : gCod yul rgya mtshoḥi sñiṅ po stan thog gcig tu ñams su len paḥi tshul zab moḥi yaṅ shun, 6 fols.（東洋文庫所蔵 Kon sprul Yon tan rgya mtshoḥi gsuṅ ḥbum, Vol. Ja, No. 45）.
DTN	ḥGos lo tshâ ba gShon nu dpal : Deb ther sṅon po, 1476—1478.（CTB, No. 346A—2563～2577）.
DZL	Y.V.Wylie : The Geography of Tibet according to the 'DZAM - GLING - RGYAS - BSHAD, Rome, 1962.
GHP	A.Ferrari : Mkʼyen brtseʼs Guide to the Holy Places of Central Tibet, Roma, 1958.
KLG	Ma cig jo mo : Khyad par gyi le lag brgyad pa, 8 fols.（東洋文庫西蔵蔵外文献 No. 50—764(3)）.
PSJZ	Sum pa mkhan po Ye çes dpal ḥbyor : Pag Sam Jon Zang, 1748, Part Ⅰ, Ⅱ, Ed. by S.Ch. Das, Calcutta, 1908.
RM	Reḥu Mig. Dpag bsam ljon bzaṅ, Part Ⅲ. Ed. by L.Chandra, New Delhi, 1959.
SCR	Chos kyi seṅ ge : Shi byed daṅ gcod yul gyi chos ḥbyuṅ rin po cheḥi phreṅ ba thar paḥi rgyan, 94 fols.（CTB, No. 47—724）.
SDY	Chos kyi seṅ ge : gShi lam ḥbras bu gsum gyi dam tshig ñer gcig gi khrid rim ye çes mkhaḥ ḥgroḥi shal luṅ ḥphrin las ñi maḥi sñiṅ po, 127 fols.（東洋文庫西蔵蔵外文献 No. 47—725）.

TCP　Tibetan Chronicle of Padma-dkar-po, SATA-PIṬAKA SERIES, Vol. 75, Ed. by L. Chandra, New Delhi, 1968.

Tōhoku　A Complete Catalogue of the Tibetan Buddhist Canons, Sendai, 1934.

TPS　G. Tucci : Tibetan Painted Scrolls, Roma, 1949.

TTP　Tibetan Tripitaka, the Peking Edition. Suzuki Foundation, 1955—1961.

YPT　Chos kyi seṅ ge : Ye çes mkhaḥ ḥgroḥi shal luṅ gsaṅ ba mṅon du phyuṅ ba spros pa ñer shi brtul shugs lam loṅs daṅ bcas pa, 161 fols.（東洋文庫西蔵蔵外文献 No. 47—726）.

ZMN　Chos kyi seṅ ge : Zab don gcod kyi man ṅag bsdus don leḥu ñer gcig pa ñi zla kha sbyor, 25 fols.（東洋文庫西蔵蔵外文献 No. 47—731）.

東大目録　東京大学所蔵チベット文献目録，東京大学文学部印度哲学印度文学研究室，1965.

第　一　部

序　論

I　トゥカン・ロサンチューキニマ『一切宗義』について

1. テキストと著者

トゥカン・ラマとその著書『一切宗義』については，既に A. I. Vostrikov, Tibetan Historical Literature, Calcutta, 1970, pp. 156－158；立川武蔵『西蔵仏教宗義研究』第一巻，東洋文庫，1975，pp. 8－10；『仏典解題事典』第二版，春秋社，1977，pp. 379－380（山口瑞鳳執筆）などに詳しい解説がなされている。ここでは上記のものによってその概要を述べるにとどめる。

『一切宗義』――正式の名称は『一切宗義綱要正説水晶鏡』（Grub mthaḥ thams cad kyi khuṅs daṅ ḥdod tshul ston pa legs bçad çel gyi me loṅ. 一切の宗義の根元と主張とを示す正説水晶鏡）――はゲールク派の学僧トゥカン・ロサンチューキニマ Thuḥu bkvan bLo bzaṅ chos kyi ñi ma（1737―1802）により1801年に著作された。本書は，インドの外道と仏教に始りチベット，中国，蒙古，コータン，シャンバラの仏教にまで及ぶ一大概説書であり，全12章から成る。本書における和訳のテキストとして用いたものは東京大学所蔵のグンルン dGon luṅ 版[1]であるが，これによって各章の表題をあげると，目録（2枚）の他は次のとおりである。

(1) インドにおける外道と仏教の各派.（29枚）
(2) チベットにおける前期，後期伝播の仏教（bstan pa sṅa phyi）とニンマ派（rÑiṅ ma）.（21枚）
(3) カーダム派（bKaḥ gdams pa）.（17枚）
(4) カーギュ派（bKaḥ brgyud pa）.（34枚）
(5) シチェ派（Shi byed pa）.（11枚）
(6) サキャ派（Sa skya pa）.（24枚）
(7) チョナン派（Jo naṅ pa）.（15枚）
(8) ゲデン派（dGe ldan pa）.（87枚）
(9) ボン教（Bon po）.（8枚）
(10) 中国における儒教（Rig byed）と道教（Bon）.（15枚）
(11) 中国における仏教諸派.（16枚）
(12) 蒙古，コータン，シャンバラにおける仏教諸派.（19枚）

2. 『一切宗義』シチェ派の章の構成

シチェ派の章の構成を，本章の訳（第二部Ⅰ）中の主な節の表題をあげることにより示せば，以下の通りである。

＜1＞ シチェ派の宗義の形成過程

＜1・1＞ 宗派名の由来

＜1・2＞ 宗祖パ・タムパ・サンゲ

＜1・3＞ シチェ派の初期・中期・後期の伝統

＜1・4＞ シチェ派三期の伝統の教誡

＜1・5＞ シチェ派の教誡の本質

＜2＞ シチェ派の一支派であるチュ派の形成過程

＜2・1＞ 支派名の由来

＜2・2＞ チュ派の教誡の伝統

＜2・3＞ マチグ・ラブドゥンマとその弟子

＜2・4＞ 断の教誡の本質

以上のように『一切宗義』第5章は，シチェ Shi byed 派の歴史（＜1・1＞～＜1・3＞）と教義（＜1・4＞～＜1・5＞）と，シチェ派の一支派とされるチュ gCod 派の歴史（＜2・1＞～＜2・3＞）と教義（＜2・4＞）に関する記述から成っている。全編を通じて歴史的記述が多くの部分を占め，教義的記述は貧弱である。従って，『一切宗義』がその題名によって特徴的に示している「教義解説書」という性格は，このシチェ派の章における限りではあまり現れていない。しかも本章の歴史的，教義的記述はいずれも，主として『テプテルグンボ』（1476－1477年）の第12章（Vol. Na，シチェ派に関する章，50 fols.）と第13章（Vol. Pa，本章の前半が断境説に関する記述，9 fols.）の記述を基礎資料として用いたものであって，ある場合にはその原文をそのまま引用し，またある場合にはその要約を述べるなど『テプテルグンボ』の見解を踏襲するに止まっている。従って，『一切宗義』独自の見解はほとんど打ち出されていないということが出来る。

Ⅱ 従来の研究

従来『一切宗義』のシチェ派の章に関する研究はなく，またシチェ派を主テーマとして取り扱った論文も拙稿[2]以外に発表されているものを知らない。ただ，シチェ派について解説，言及したものの中から，主なものを紹介すると以下のようである。

G. Tucci は，その著 Tibetan Painted Scrolls, Rome, 1949, pp. 92 において「我々は南インドの行者，タムパ・サンゲ（Dam pa Sans rgyas）の弟子たちについても別に考えてみなければならない。彼はチベットにチュ（gcod）とシチェ（ži byed）といわれる独特の二流派を伝えたが，『般若経』の一章より着想を得て，墓場や死体の散乱する場所において複雑な瞑想過程を通じて成就を得たのである。すなわち自分自身の意識の根源から諸尊の像を現わし出し，現われた一切のものは，たとえそれが神であろうとも，それらは我々の執着の所産であり幻影であるとして，そのことを悟るためにそれらをすべて再び吸収する。その結果，あらゆるものは無実体であるので，そこから究極的真理が直接経験により悟られることとなる。タムパは，チベットだけでなく中国にも行ったことがあると思われているが，そこで12年間を過ごし，1097年弟子たちと共に，今日もこの派の中心地であるディンリ Diṅ ri の寺に居を定めた。そして21年後の1117年に当地で亡くなった。彼の教義の主たる解釈者の一人は，タムパの密教修行の女性パートナー（mudrā）であったマチグ・ラブキドゥンマ（Ma gcig lab kyi sgron ma）である。」と述べている。

ここで留意すべきはマチグをタムパの mudrā（phyag rgya ma）としていることである。A. Ferrari もこの説を継承しているが[3]，『一切宗義』はもとより『テプテルグンボ』『パクサムジョンサン』にもそのような記述は全く見られない。T. V. Wylie はマチグ・ラブキドゥンマ Ma gcig Lab kyi sgron ma とマチグ・シャマ Ma cig Sha ma とを混同した上で[4] Tucci と同様に前者を mudrā としてしまっている。マチグ・ラブキドゥンマとマチグ・シャマとはほぼ生存年代を同じくしており，『パクサムジョンサン』の年表[5]によれば，前者の生年は rab byuṅ 第一の乙未（1055年）で，没年は rab byuṅ 第二の癸亥（1143年）である。後者の生年は rab byuṅ 第一の壬寅（1062年）で没年は rab byuṅ 第三の己巳（1149年）になる。また『テプテルグンボ』には，マチグ・ラブキドゥンマは95才で没したと述べられている（DTN, Pa, 30, 1－2 ; BA. p. 984）。生年については明らかにされていないので，上記の1055年説に従えば没年はマチグ・シャマと同年の1149年になる。このマチグ・シャマはサキャ派の中心教理である道果説の伝承者として知られている。『テプテルグンボ』[6]によれば，

14 才で結婚させられたが，まもなく夫と離別し，17 才から 22 才までラマ・マ bLa ma rMa の密教修行の女性パートナーを務め，その後各地を巡って修行を積み成就を得た。しかし 31 才から 3 年間，毎日豆ほどの分泌物が出るのをはじめ 7 種の災難に襲われ，種々の治療を試みたが効果がなかった。そこで彼女は弟と共にディンリのタムパを訪ねたところ，これらの災難の原因として，師の許可なくして他の者の密教修行のパートナーを務めたことをはじめ 7 つの罪があることをタムパより指摘された。そこでタムパの指導によって全快し，88 才で亡くなるまで大いに衆生の教化につとめたという。このようにその修行が性的実践により特徴づけられたマチグ・シャマが，同時代人であったこととタムパとの交流という共通点によってマチグ・ラプキドゥンマとの混同がおこり，その結果，マチグ・ラプキドゥンマをタムパの mudrā とみなしたものと思われる。

次に山口瑞鳳氏によれば[7]，シチェ派は後期に伝播した諸派の中で伝統的教説を反省再検討した人々による一派である。すなわち彼らは中国仏教系の思想を伝えるテルカ（gter kha）により自らの教説を発展させた。この種のテルカを発掘して示した学匠（gter ston）の一人として，後期仏教の初頭を飾ったダパ・ゴンシェチェン・シェラブゲルワ（Grva pa mṄon çes can Çes rab rgyal ba, 1012—50）が挙げられる。その弟子がマチグ・ラプキドゥンマであり，シチェパと称する支派を開いた。彼女の教を母系（Ma brgyud）と呼び，インド人パ・タムパサンゲ（Pha dam pa sans rgyas, 1080—1117 在チベット）の所説を父系（Pha brgyud）と称し，合わせてこの派の体系とする。その教義内容は「恐怖」の究極的体験を通して「無分別」の境を得るところにある。そして最後には自分の身体を他の動物の「食物にかえる」（gzan hgyur）ことをねがうとし，祖師パダムパサンゲの五台山滞在説の捏造と考え合わせて，五台山の仏教とくに牛頭禅の教義をテルカにより発展させたものとする。

しかし，上記の「食物にかえる」は「食物として布施する（捨施）」（gzan bskyur）が正しい形であり，改められねばならない。また，牛頭禅との関係はまだ確認されていないことにも注意したい。

また羽田野伯猷氏によれば[8]，シィチェ派はインド僧サンゲータムパによって興起した宗派である。彼は無上瑜伽密教の Yogin であったが，その特質は単なる Yogin ではなく，波羅蜜，顕教を秘密真言に随順して行じることであった。例えば彼は『宝徳蔵般若』に説かれた四因の中に，密教に随順すべき行としての理解を導入し，それを修法の根本とする。すなわち四因の一つ〈有情を捨棄せざること〉に対しては，鬼魅をして有情に危害を加えしめず，大慈によって菩提に導引すると説く。〈空に住す〉とは煩悩を断ずるのが空であり，非如理作意によっておこる煩悩に対して，如理作意としての密教のヨーガが究極的な方便としての役割を担うわけであり，それは Bdud - kyi gcod - yul（魔なる境を断ずる）の教えとして信奉されていたらしい。そしてシィチェ派，断境派では，女性が大きな役割をはたし，Mo - gcod 派は女性による派であり，男性の Pho - gcod 派により隆盛であったとする。

以上のように羽田野氏は，タンパ・サンゲの創始したシチェ派の主要教理を Bdud - kyi gcod-yulの教え，即ち，筆者のいう「断境説」にあたるものとし，その信奉者たちのうち女性による Mo - gcod 派と男性による Pho - gcod 派があったとする。しかし，後に述べるように断境説はシチェ派の教説そのものと区別されるべきで，マチグ・ラプキドゥンマによって創始されたものである。この断境説にインド仏教としての正統性を付与するために，シチェ派のタムパ・サンゲに由来するとして Pho - gcod（男の断）説なるものが仮構され，本来のマチグによる断境説が Mo - gcod（女の断）説と呼ばれるに至ったものである。また，「女性が大きな役割を果たした断境」説なるものはどこにも認められない。従って，そのような意味で Mo - gcod 派というのは正しくない。

III 断境説の由来

1. 『一切宗義』に見える歴史

シチェ派の代表的教説であるとされる断境説の創始者については，資料によってその所説が大きく異なっている。そこでまず『一切宗義』に説かれた歴史の梗概を述べることにする。ただ『一切宗義』ではタンパの五度の入蔵とシチェ派の「初期・中期・後期の伝統」との関係が明らかにされていないため，『テプテルグンボ』の記述を参考にして示す。

シチェ派の開祖はインド僧のタムパ・サンゲである。彼は南インドに生まれ，ヴィクラマシーラ寺で顕密を学び諸聖地で修行したのち，チベットを五度訪れて「苦を鎮める」（sdug bsṅal shi byed）シチェの法を，多種多様に大勢の弟子に授けた。一度目はディンタン ḥBrin thaṅ を通ってツァリ Tsha ri に至り，更に低地の三地方を巡ったが，この折には教法を授けるに足る人物がいなかった。二度目はカシミールを発ってガリー mṄaḥ ris に来たが，カシミールのジュニャーヤグフヤ Jñānaguhya に法を授け，それをオンポ・ローツァーワ Oṅ po lo tsā ba がチベット語に翻訳した。これをシチェ派の「初期の伝統」という。三度目はネパールを発ち，ツァン gTsaṅ でキョトゥン・ソナムラマ sKyo ston bSod nams bla ma とマラ・セルポ sMa ra ser po に「断」の教誡を授けた。キョト

ゥン・ソナムラマはマチグ・ラブキドゥンマに教誡を授けた。彼女より伝えられた「断」説は「女の断」(Mo gcod)といわれる。一方マラ・セルポより順次，ニュンパ・ペロ sMyon pa Pe ro，ツェトゥン Tse ston，スムトゥン Sum ston に伝えられた「断」説は「男の断」(Pho gcod)といわれる。四度目はウ dBus を訪れて，マ・チューキシェラップ rMa Chos kyi çes rab，ソチュン・ゲドゥンパル So chuṅ dGe ḥdun ḥbar，カム・イェシェゲルツェン sKam Ye çes rgyal mtshan の三人に法を授けた。これをシチェ派の「中期の伝統」という。この外にもダパ・グンシェチェン Grva pa mÑon çes can とチェ・チャンドラキルティ lCe Cantrakirti とジャン・カーダムパ lJaṅ bKaḥ gdams pa の三人に法を授けたが，これを「中期の小伝統」という。更にドゴム ḥBro Sgom をはじめ16人に様々の法を授けたが，これは「中期の雑多の伝統」といわれる。その中で特にマチグ・ラブキドゥンマには「断」の教誡を授けた。五度目は12年間の中国滞在のあと1097年にディンリを訪れた。そして1117年に当地で亡くなるまで21年間にわたり，チャルチェン Phyar chen，チャルチュン Phyar chuṅ，ヴァジュラクローダ Vajrakrodha，クンガー Kuṅ dgaḥ などに法を授けた。これをシチェ派の「後期の伝統」という。

これによるとタムパ・サンゲはチベットに「断」の教誡を二度伝えたことになる。すなわち

(1) 三度目のチベット訪問の際に，キョトゥン・ソナムラマとマラ・セルポに「断」説を授けた(8b，2－4)。その後，キョトゥン・ソナムラマからマチグ・ラブキドゥンマへと伝えられ彼女より伝承された「断」説は「女の断」説と呼ばれ，マラ・セルポ→ニュンパ・ペロ→ツェトゥン→スムトゥンへと伝えられた「断」説は「男の断」説と称された。

(2) 四度目のチベット訪問の際に，マチグ・ラブキドゥンマに「断」説を与えた(5b，4－5)。

これはシチェ派の「中期の雑多の伝統」の一つにしか数えられていない。

ただ「男の断」説・「女の断」説に関して，『テプテルグンボ』[9]と『バクサムジョンサン』[10]は上記の『一切宗義』の所説とは異なった見解を取っている。上記のものによれば，タムパはキョ・シャーキャイェシェ sKyo Çākya ye çes とキョの二人の弟子とマラ・セルポに「断」の教誡を与えた。キョは系統が断絶するのを恐れて，ソナムラマに教教を伝え，ソナムラマはマチグに「断」の四教義(Brul tsho bshi)を授けた。一方マラ・セルポから順次にニュンパ・ベレ sMyon pa Be re，プグトゥン Phug ston，ログ・シェラップウー Rog Çes rab ḥod，スムトゥン・レーパ Sum ston ras pa，ニェントゥン gÑan ston，ケルデン sKal ldan などへと伝えられたが，これらが「男の断」説である。そしてタムパが直接マチグに与え，彼女から伝ったものが「女の断」説であるとする。

いずれにせよこれらの資料は，(1)タムパを「男の断」説・「女の断」説の創始者とすることと，(2)タムパはマチグに直接に教誡を授けたとするという二点において一致している。そこで，マチグがタムパからどのような教義を与えられたかを考察したい。

『テプテルグンボ』の二箇所には次のように述べられている。

(1) マチグ・ラブキドゥンマは読経に長けた尼僧であったため，善知識ダパ〔のもと〕で『般若経』を読誦する供養僧であった。その頃ヤルルンのログバサ[11]でタムパと会い「断」の教誡を授けられたことにより解脱し，大いに利他行をなさった。そして今日に至るまで「断」〔の教誡〕は広くゆきわたっているのである(DTN，Kha，15b，1－2)[12]。

(2) その(断境の)教誡もまたタムパより伝えられたのである。そしてキョ・ソナムラマとヤルルンのマンラ・セルポから伝えられたものを「男の断」といい，マチグから伝承されたものなどを「女の断」というのである。さてタムパ・サンゲのお言葉によると，〔タムパは〕ヤルルンのログバサで供養僧のマジョ(マチグ)[13]に誠意ある三句の助言を与えたところ，女はそれによって解脱したと仰ったように，彼女自身はそれによって解脱したのではあるが，この女性は生来のヨーガ行者であったため，即席の教誡が数多く〔彼女より〕生じたのである(DTN，Pa，2a，4－6)[14]。

すなわちマチグがタムパから授けられた「断」の教誡とは，「断」に関するわずか三句の助言であり，それはマチグがダパの供養僧を務めていた際，ヤルルンのログバサで与えられたものであることが知られる。この三句は第二部Ⅱで訳出したパドマ・カルポの著『般若波羅蜜多の行境における獅子の遊戯』の中に見い出すことが出来る。すなわち，

界と知を融合するならば金剛の如くになる。蘊を食物として布施するならば虚幻の界において清浄となる。能取所取の執着の縄を断つならば勇者の如く進み行く。　タムパ・ギャガルワが私に説かれたことはこの三句だけである。これ(この三句)によって私は一切如来の行境にすっかり入ったのである。(2a，1－2)

とあり，マチグは界と知を融合するならば金剛の如くになるという第一句から界と知を融合する金剛禅定(rdo rje lta buḥi tiṅ ṅe ḥdzin)を，蘊を食物として布施するならば虚幻の界において清浄となるという第二句から蘊を食物として布施する虚幻禅定(sgyu ma lta buḥi tiṅ ṅe ḥdzin)を，能取所取の執着の縄を断つならば勇者の如く進み行くという第三句から能取所取の執着の縄を断つ勇行禅定(dpaḥ bar ḥgro baḥi tiṅ ṅe ḥdzin)を案出して断境説の実践としたのであるとする。

この三禅定については後で考察するが，『般若波羅蜜多の行境における獅子の遊戯』による限り断境説はマチグによって形成されたものと考えられ，タムパを断境説の創始者とする『一切宗義』『テプテルグンボ』の説に疑念をさしはさまざるを得ない。

2. 『シチェ派仏教史』に見える歴史

『一切宗義』『テプテルグンボ』と対照的な歴史を述べるのが『シチェ派仏教史』[15]—— 正式の名称は『宝珠にして解脱の飾りといわれるシチェと断境の仏教史』（Shi byed daṅ gcod yul gyi chos ḥbyun rin po cheḥi phreṅ ba thar paḥi rgyan.）—— である。著者はチューキセンゲ Chos kyi seṅ ge（19世紀後半から20世紀前半）[16]で，断境説に関する厖大な著作[17]を残しており，G. Tucci も「断」に関する代表的テキストとして彼の二著を挙げている[18]。

さて『シチェ派仏教史』の第一の主張は，断境説の創始者をマチグ・ラブキドゥンマであるとすることである。『テプテルグンボ』はマチグがダパ・グンシェチェンの供養僧であった時代に，タムパより「断」に関する誠意ある三句の助言を得たとして，ここに断境説の起源を求めるのに対し，『シチェ派仏教史』ではダパ・グンシェチェンのもとで供養僧を務めていたマチグについて，次のように述べている。

〔アマ・チョモ（＝マチグ）が〕御年二十七歳程になられたとき，尊師（ダパ・グンシェチェン）が「〔第一に〕面授の伝承は中断することなく，加持の霧は消えていない。第二に近伝（ñe baḥi brgyud pa）に関していえば，アマ・チョモ以前には一般の教法（遠伝）の伝承はあるが，「断境」として知られている法はない」と言われた（24 a，4－5）[19]。

ここにいう「近伝」—— 詳しくは「近伝埋蔵本説」という —— とは「加持や啓示によって時間と空間を越えて，伝法の伝授があった伝統」のことであり，「嫡々連綿とした師資相承による法の伝授が行われた伝統」を指す「遠伝仏説」とは対立する用語であり，古派やシチェ派で用いられるとされる[20]。つまり，上記の説は「断境」説に関して「遠伝仏説」の形跡がなく，マチグの時に「加持や啓示によって時間と空間を超えて」この「断境」説が突然伝えられたことをいうのであって，別の表現をすれば，「断境」の法はマチグが創始したことになる。

『シチェ派仏教史』には，マチグの「断境」の法を四つの範疇から考察している箇所があるが，これにより「近伝」の意味はより明確になると思われる。第一の範疇については本文に，

インドの法（rgya chos）とチベットの法（bod chos）のいずれに弁別されるかに関して〔いえば〕，一般にすべての法はインドからチベットに広がったものであるが，チベットの法がインドへ広がったこともあると〔アマ・チョモが〕仰った。（SCR，28 b，6－29 a，1）[21]

として，マチグの「断境」の法を「チベットの法」であると規定し，さらにそれぞれがインドへ伝えられた逸話を述べている。第二以下の範疇に関する原文は次の通りである。

〔第二に〕地の法（sa chos）と天の法（gnam chos）とを弁別すれば，インドで雨と

降った法の伝承，すなわち四部の法輪とタントラのすべての伝承が天の法である。地の法とはすべての「テルマ」（gter ma・「埋蔵本」）であり，それは菩薩たちが衆生利益のために埋蔵したものである。〔第三に〕「カーマ」（bkaḥ ma・仏説）と「テルマ」とを弁別するならば，釈迦牟尼が説かれた御言葉によって解脱したならば〔それは〕「カーマ」である。地下に埋蔵されていないものでも，マチグが心の法界から自ら解脱したならば〔それは〕正真のテルマである。〔第四に〕「男の断」（Pho gcod）と「女の断」（Mo gcod）とを弁別するならば，標幟・父タントラより伝承されたものが「男の断」（「遠伝仏説」）である。ユムの御心の化身であるマチグ・ラブドゥンの現前に，すべてのダーキニーが姿を現わして〔マチグの〕お耳に入れた〔教え〕が「女の断」である。（SCR，33 b，6－34 a，4）[22]

以上の説明によれば，「断境」の法はマチグが「テルマ」によって得た法である。この「テルマ」には二種があり，第一は現実に地下に埋蔵されている「地の法」としての「テルマ（埋蔵本）」であり，第二はマチグが心の法界において得る対象としての「テルマ」である。後者の「テルマ」は一般に「ゴンテル」（dgoṅs gter・精神の宝庫）[23]といわれるものであり，それは瞑想を通して見たり聞いたりするところのいわゆる啓示であって，潜在的な思想の発現に他ならない。

すなわちマチグは瞑想体験のうちで女神のダーキーから教えを聞くことにより，すなわち，「ゴンテル」によって「断境」の法を創出したのである。

このように本来「近伝埋蔵説」であったマチグの「断境」の法に，インド仏教の伝統をうけつぐ「遠伝仏説」の伝統が導入されたとするのが『シチェ派仏教史』の第二の主張である。すなわち，

〔かくして〕瞻部州において「正法・魔の断境」は広がり，チョモの教法は夜明けに太陽が昇るごとくになっていったのである。それからマチグは〔次のように〕お考えになった。すなわちインドの金剛座はこの瞻部州の中央であるから一切の法がインドから興ったのであり，自分のこの法の伝統はチベットの中央であるサンリ・カルマル〔に興ったのであるから，ここ〕からインドに広めなければならないとお考えになって，般若波羅蜜多の本義を実践する方便である「正法・魔の断境」を信じさせるために，第一に標幟・父タントラの伝統を，第二に般若・母タントラの伝統を，第三に精髄たる本義の伝統を，第四に仏言を通じて解脱する実践の伝統，以上の四つに要約した。父タントラとは方便を主として説き，母タントラとは般若を主として説き，精髄たる本義の伝統とは無二の真実なる大楽を主として説いたものである。仏言を通じて解脱する実践の伝統とは，アマ・チョモが瞑想体験〔によって〕心に生じた真理の現前したものであり，それは仏言と矛盾せずに解脱するやり方である。さてア

マ・チョモの伝統にも遠伝（ riṅ brgyud ）と近伝（ ñe brgyud ）の二つがあり，そのうち遠伝に関していえば，ユムチェンモ（般若経）を般若波羅蜜多女が大金剛持者に伝え，彼が等正覚を得た釈迦牟尼仏に伝え，彼が文殊師利に説き，彼が尊者ターラーに，彼がアーリヤデーヴァに，彼がタムパ・ギャガルに，彼がソナムラマに，彼がマチグに，彼女が三人の子息にお説きになった。これはインドの法がチベットに翻訳されたものである。（ SCR，33 a，1－33 b，3[24]）

以上の記述によれば，マチグがチベットの法である「正法・魔の断境」をインドで広めるために，これを標幟・父タントラの伝統（ pha rgyud brdaḥi brgyud pa ）と，般若・母タントラの伝統（ ma brgyud çes rab kyi brgyud pa ）と，精髄たる本義の伝統（ sñiṅ po don gyi brgyud pa ）と，仏言を通じて解脱する実践の伝統（ bkaḥ thog nas grol ba ñams kyi brgyud pa ）の四伝統に要約した訳である。

他に『パクサムジョンサン』[25]でも断境の法に関する四伝統が説かれているが，やや異なる。各伝統の名称とその師資相承の系譜を示せば次の通りである。

(1) 男伝（ pho brgyud，thabs）：釈迦 ― 文殊 ― 竜樹の弟子のアーリヤデーヴァ ― バラモンのアーリヤデーヴァ ― タムパ・サンゲ。

(2) 子伝（ sras brgyud，gsaṅ sṅags ？）：釈迦 ― 弥勒 ― 無着 ― 世親 ― アーリヤデーヴァ。

(3) 女伝（ mo brgyud，çes rab）：ユムチェンモ ― ターラー ― スカシッディ ― マチグ。

(4) 義伝（ don brgyud）：パグハ，デウェグドゥブ ― タムパ・サンゲ ― キョチェン・イェシェラマ ― キョチュン・ソナムラマ ― マチグ・ラブドゥン ― ゲルワ・トゥンドゥブ ― トゥニュン。

この四伝統と『シチェ派仏教史』に説かれた四伝統とは必ずしも完全な対応関係を示していないが，関連がうかがわれる。『シチェ派仏教史』に示されたマチグの遠伝の系譜（般若波羅蜜多女 ― 大金剛持者 ― 釈迦牟尼仏 ― 文殊師利 ― ターラー ― アーリヤデーヴァ ― タムパ・ギャガル ― ソナムラマ ― マチグ ― マチグの三子息）のうち，大金剛持者とマチグの一子息を除く全てが上記の四伝統のいずれかに見い出されることは，『パクサムジョンサン』と『シチェ派仏教史』の両「四伝統」間にあった関係を示すとともに，この遠伝の系譜が『シチェ派仏教史』の四伝統の系譜を総括したものであることを示していると思われる。

すなわち『シチェ派仏教史』では，断境説はマチグ・ラブキドゥンマが自己の瞑想体験または，埋蔵本により創造したマチグ独自の「近伝」の教説であるが，マチグがこの断境の法をインドに広めるために，この法と結びつける「遠伝」の伝統として「標幟・父タントラの伝統」

と「般若・母タントラの伝統」と「精髄たる本義の伝統」と「仏言を通じて解脱する実践の伝統」の四伝統を設けることにより，すなわち「断境」の法に仏教としての正当性を付与し，「断境」の法がインド仏教に由来するものであるという権威づけを行ったとするのである。このように「遠伝」導入の理由がマチグによる断境説のインドへの布教の為とされているが，それは当時の仏教事情からは考えられないことであり，シチェ派興起時代を含めてチベット仏教がタントラ仏教を究極のものとする傾向にあったため，それに迎合してチベット国内に普及させる為であったと考えられる。この点については今後更に検討されねばならないであろう。

前後するが，最後に『シチェ派仏教史』に説かれた「男の断」説と「女の断」説について考察する。

第一部Ⅲ1で述べたように『一切宗義』と『デブテルグンポ』の両資料では断境説の伝承の系譜をやや異にするが，ともに「男の断」説と「女の断」説の創始者をタムパとしている。これに対し『シチェ派仏教史』では次のように述べる。

「男の断」（ Pho gcod ）と「女の断」（ Mo gcod ）とを弁別すれば，標幟・父タントラより伝承されたものが「男の断」である。ユムの御心の化身であるマチグ・ラブドゥンの現前に，すべてのダーキニーが姿を現わして〔マチグの〕お耳に入れた〔教え〕が「女の断」である。（ SCR，34 a，3－4[26]）

ここに標幟・父タントラとは，すでに述べたようにマチグが「断境」の法をインドに流布させるために「遠伝」として導入した四伝統の一つであるから，これによって伝えられたとされる「男の断」説は，マチグの法の権威づけのためにつくられたものということができる。今，この標幟・父タントラの伝統を，『パクサムジョンサン』に述べられた「男伝」に相当すると考えれば，その伝統の系譜は釈迦 ― 文殊 ― 竜樹の弟子のアリヤデーヴァ ― タムパ・サンゲとなり，タムパ・サンゲを通じて伝えられた断境説は，すべて「男の断」説ということになる。これに対し「女の断」とは，タムパ・サンゲと関係なくマチグ・ラブドゥンが瞑想により女神のダーキニーと会って授けられたものであると区別しうる。すなわち断境説は本来マチグにより独創された教説であるが，後にこの教説をインド仏教と結びつける必要から，タムパに由来する「男の断」説なるものがつくられ，これに対してマチグ本来の断境説が逆に「女の断」説と呼称されるようになったものと考えられる。既に見たように，「男の断」説はタムパ・サンゲ三度目の入蔵に際して伝統が始ったと『一切宗義』や『デブテルグンポ』に伝えられているが，このことはシチェ派の伝統の中には全くうかがわれない。これに対して，タムパ・サンゲ四度目の入蔵に由来する「女の断」はシチェ派の「中期の雑多の伝統」のうちにともかく認められる。これらを凝視すると，「男の断」がにわかに仮構の色を帯び，シチェ派そのものが「女の断」の正統性をいうために利用されたのではないかとの感が否めなくなるのである。

Ⅳ 断境説の思想

1. 『一切宗義』に叙述された断境説

断境説の内容は，『一切宗義』中に＜2・1＞支派名の由来（8a，5－8b，2）と＜2・4＞「断」の教誡の本質（9a，5－10a，5）の箇所に極く簡単に述べられているにすぎない。それによると，断境説が展開される根拠は『仏母宝徳蔵般若波羅蜜多経』の次の一節にあるとされる。

四種の因により
善巧と勇猛を具えた菩薩は
四魔により危害をうけ難く
動揺させられることがない。
〔すなわち〕空に住することと，
有情を捨棄しないことと，
そのように言われる通りに行うことと
善逝により加持される〔こととである〕。

すなわち，ここに述べられる菩薩は，空に住すること（第一因），有情を捨棄しないこと（第二因），そのように言われる通りに行うこと（第三因），善逝により加持されること（第四因）によって，四魔により危害をうけ難くなり，動揺させられることがない。このような菩薩の境地を究極のものとして目指し，上記の四種の因に独特の解釈を施した実践体系により，究極的に四魔を断つのが断境説の基本的教義である。すなわち下記のように『仏母宝徳蔵般若波羅蜜多経』に説かれた四因のそれぞれに，独自の行法をあてて断境説の実践体系とするのである。

(1) 実践のための準備（sṅon ḥgro）
- 道の根本である善知識に依止すること（第三因）
- 帰依を重ね七支や曼荼羅を捧げること（第四因）

(2) 中核の実践（dṅos gshi）
- 空性の見解を瞑想すること（第一因）
- 慈悲心と菩提心とを瞑想すること（第二因）

さらに，この実践方法の中には『ヘーヴァジュラタントラ』に，

「一樹の下や墓場や鬼魔の棲家や夜間に，あるいは寂静なる郊外で瞑想することは良いことだと讃えられるべきである」
「身体の布施をして，その後にこの上なき清浄な行為が行われる」
「実際に眼前に，インドラのごとき阿修羅が現われたとしても，それを恐れることなく獅子のように遊行する」

等と説かれたタントラの行法と相応するものが含まれるとされる。

2. 『般若波羅蜜多の行境における獅子の遊戯』に叙述された断境説

『般若波羅蜜多の行境における獅子の遊戯』[27]（Çes rab kyi pha rol tu phyin paḥi spyod yul du seṅ ge rnam par rtse ba.）――以下『獅子の遊戯』と略記――は，カーギュ派の分派であるドゥク派のパドマ・カルポ Padma dkar po（1527－1592）[28]によって著わされたものである。全4葉からなる小著であるが，断境説を後述のような金剛禅定・虚幻禅定・勇行禅定の三禅定によって体系的に述べたものである。

この『獅子の遊戯』と同様に，断境説を上記の三禅定によって説いたものに，コントゥル・ユンテンギャムツォ Kon sprul Yon tan rgya mtsho（1813－1899）[29]の『断境の大海の精髄を坐上で実践する法・甚深の熔液』[30]（gCod yul rgya mtshoḥi sñiṅ po stan thog gcig tu ñams su len paḥi tshul zab moḥi yaṅ shun）――以下『甚深の熔液』と略記――がある。三禅定の内容もほぼ『獅子の遊戯』のそれに等しく同系統の文献と思われる。ただ本書の場合は冒頭に，『仏母宝徳蔵般若経』に説かれた四因と断境説と三禅定の関係が明確に示されていて興味深い。すなわち，

『仏母宝徳蔵般若経』に「四種の因により善巧と勇猛とを具えた菩薩は，四魔により危害をうけ難く，動揺させられることがない。〔すなわち〕空に住することと，有情を捨棄しないことと，そのように言われる通りに行うことと，善逝により加持される〔ことである〕」と述べられた。特に優れた四義の教誡を実践〔方法〕として整理した般若波羅蜜の真髄，すなわち「正法・魔の断境」といわれる大海の如き教誡も，三禅定と相応する見解・瞑想・実践の三つにより道の功徳をこの上なく増すものであるから・・・・。（1b，1－4）[31]

と述べられている。本書では，『仏母宝徳蔵般若波羅蜜多経』に説かれた四因のそれぞれに，次のような独自の行法をあてて断境説の実践体系とする。

(1) 準備の法 ― 善逝の加護を自己の内に入れること（第四因）┬ 帰　依
（sṅon ḥgroḥi chos）　　└ 発　心

(2) 中核の実践 ― 空に住し（第一因）衆生利益を成就すること（第二因）┬ 金剛禅定
（dṅos gshiḥi ñams len）　　├ 虚幻禅定
└ 勇行禅定

(3) 結びの行 ―そのように誓ったことと矛盾しないように行じること（第三因）
（rjes kyi bya ba）

『獅子の遊戯』によれば，断境説は金剛禅定と虚幻禅定と勇行禅定の三禅定から成り立っている。第一の金剛禅定は三禅定の基本となるもので，「界」（dbyiṅs）と「知」（rig pa）とを融合する禅定である。『獅子の遊戯』の記述には意味不明の箇所もあるが，他の資料を参考にして，金剛禅定の行法を略述すれば次のとおりである。[32]

修行者は立ち上って合掌し三宝に帰依する。次に身体の真中に中央動脈（rtsa dba ma）があり，両足の底に白と赤の二種の「滴」（thig le）が生じたと思念し，「断境」の法の伝承者であるラマたちが自分の頭頂に連なっていると思念し供養をなす。各ラマに加持を祈願し，加持を得たことの信として，ラマたちが白い甘露として体内に溶け込み，身口意の一切の罪悪・障碍などが清められたと思念する。次に「息」（rluṅ）を上下させることにより，両足の底の「滴」が上昇し下腹部で合体する。更に腹部・胸部・喉部・頭部へと上昇し，頭頂部の穴から空界に出る。そこで「パッ」（phaṭaḥ）という呪句を唱えることにより，「滴」は「界」（空界）と混然一体となる。「滴」は「知」あるいは「心」とも表現される一種の精神生理学的原理である。すなわちこの禅定は，心を身体から分離し，「天の扉を開いて」心を空界と融合させるものであるから，「天の扉を開く」実践ともいわれる。

さて金剛禅定によって心の抜け出た後の身体，すなわち単なる蘊となったものを食物として布施（gzan bskyur）するのが第二の虚幻禅定である。瞑想の上で種々の客を招き，三宝をはじめとする敬うべき客には，その身をこの上なき供物と思念して与えるほか，八部鬼衆にも肉・骨・血・脂肪などを与えるのである。なお『甚深の熔液』では，この虚幻禅定を「白放捨」（dkar ḥgyed）と「赤放捨」（dmar ḥgyed）という術語によって説明している。「白放捨」とは，自己の心そのものである禅定女（rnal ḥbyor ma）を現出し，その禅定女によって身体を切りきざみ，それを甘露に変えて，ラマ・三宝などに与えることであり，「赤放捨」とは，自己の心そのものである忿怒母（khros ma）を現出し，その忿怒母によって身体の皮を剝ぎ，感覚器官・内臓・肉・血・骨などを，鬼魔などに与えることであるとされる。

金剛禅定と虚幻禅定とはいずれも瞑想上での行法にとどまるので，それを実践行と結びつけ

るのが，第三の勇行禅定である。すなわち鬼魔の出没する危険な場所において，「天の扉を開く」実践（金剛禅定）を行なう。このように行じるものに，夢の勃発と異変の勃発と病の勃発という鬼魔による障碍があらわれる。異変が起きれば，まさにその場所において「天の扉を開く」実践を行い，異変を鎮めるのである。

3. 『パクサムジョンサン』に叙述された断境説

『獅子の遊戯』，『甚深の熔液』は断境説を三禅定によって説くが，『パクサムジョンサン』にも断境説に関する記述はあるが，三禅定によっていない。全文をあげれば以下の通りである。

この（断境説の）実践段階に関して〔いえば〕，準備段階として，〔実践に〕行くことに関する四規矩に従って適切な場所に赴く。〔次に実践の〕中核として，最初に出離・帰依・発心・尊師のヨーガ〔をなすこと〕と，中間に「白放捨」・「赤放捨」・「種々放捨」とそのの廻向をなすことと，最後に，成就のしるしとして順次に「起」・「変」・「終」が現われ，その果〔として〕はじめて空性を悟るのである。[33]（PSJZ，p. 376）

以上の内容を図示すれば，次のとおりである。

Ⅰ）準備段階：実践に行くことに関する四規矩

Ⅱ）実践の中核
- ① 出　離 ―― 帰　依 ―― 発　心 ―― 尊師のヨーガ
（ñes byuṅ）（skyabs）（sems）（bla maḥi rnal ḥbyor）
- ② 「白放捨」―「赤放捨」――「種々放捨」―― 廻　向
（dkar ḥgyad）（dmar ḥgyad）（sna tshogs ḥgyad）（bsṅo ba）
- ③ 「起」―「変」――「終」
（sloṅ）（cho ḥphrul）（tshar tshad）

Ⅲ）実践の果：空　性

なおチューキセンゲ Chos kyi seṅ ge の『智空行〔母〕の顕われたる密なる御教誡・戯論を鎮める禁戒にして道起を伴えるもの』[34]（Ye çes mkhaḥ ḥgrohi shal luṅ gsaṅ ba mṅon du phyuṅ ba spros pa ñer shi brtul shugs lam loṅs daṅ bcas pa）― 以下『空行母教誡』と略記 ― は断境説に関する一大綱要書であり，『パクサムジョンサン』に述べられた断境設を理解する上で重要な書である。『空行母教誡』中には準備段階としての「（実践に）行くことに関する四規矩」について，

それ（「断」）については四つの特異〔な方法〕によって〔実践に〕赴くべきである。すなわち，どこへ行くかという場所の特異性，いつ行くかという時刻の特異性，どこへ行くか行く人の特異性，行って何をするかという教誡の特異性である。（150 a，1－2）[35]

として以下に説明されるが，ここにはその要約を述べるに止める。すなわち「実践に行くことに関する四つの規矩」とは，第一に恐怖や戦慄をおぼえるような恐ろしい墓場や房屋に行くこと，第二に恐怖をおぼえた時に，特に夜などに友人や武器など何ものにも頼らず一人で行くこと，第三に灌頂により器としてふさわしいとされ，伝授により一切の現象は心の現われに外ならないと決択し，教誡により内外の疑問を断った人が行くこと，第四に以上の三つの規矩に従って適切な場所に行き，「魔の断境」を実践することである。

次に上記『パクサムジョンサン』からの引用本文に「〔次に実践の〕中核として，最初に出離・発心・尊師のヨーガ〔をなすこと〕」とあるのは本格的な「断境」の実践に入る前の準備であり，ここに尊師のヨーガとは，「断境」の法の伝承者である尊師を瞑想し加持を祈願することであると考えられる。

次に同上本文では「中間に「白放捨」・「赤放捨」・「種々放捨」とそののち廻向をなすこと」と述べて，『甚深の熔液』に述べられた虚幻禅定に比すべき行法を挙げているが，『空行母教誡』では，「白放捨」の前段階として金剛禅定に比すべき心身分離の修法を述べ[36]，また，「種々放捨」の代りに，「斑放捨」（khra ḥgyed）と「黒放捨」（nag ḥgyed）を挙げる。なお「放捨」の原語は『パクサムジョンサン』では ḥgyad，『空行母教誡』および『甚深の熔液』では ḥgyed である。

『空行母教誡』に述べられた心身分離の修法の内容を要約すれば，次の通りである。

自分の身体を美しい如意宝の如くであると思念し，パッと呪句を唱えることにより，右足の底に父より得た精液（khams dkar po）が輝き，左足の底に母より得た血液（rakta）が輝いていると思念する。パッと呪句を唱えることにより，その二つは上昇して下腹部で合体して若鶏の卵程のものとなり，順次に腹部・胸部・喉部・頭頂部へと移り，頭頂から強者によって放たれた矢の如く空界に移る。

「白放捨」[37]「赤放捨」[38]については既にふれたのでここでは述べない。「種々放捨」とは『空行母教誡』にとかれた「斑放捨」と「黒放捨」とを合わせ称したものと思われる。「斑放捨」[39]とは，『空行母教誡』によれば自己の心そのものである忿怒母（khros ma）が身体の皮を剝いで肉と血と骨とに切る。それは本質は肉や血であるが，五種の肉・五甘露・五欲といった神・人間の享受するすべてのものが具わっていると思念して，輪廻と涅槃の一切の客に献じる修法であり，「白放捨」と「赤放捨」とを一つにまとめたものであるとされる。また「黒放捨」[40]とは，面前のマチグの身体から流れ出た甘露が，自分の頭頂から体内に入ることにより，一切の病・障碍・罪障が足の底と肛門から黒々と押し出され，三千世界が満ちた頭蓋骨の中に入る。そこに三字が生ずることにより，すべて光に溶けて無垢の甘露の大海となり，それを神鬼が飲んで非常に喜ぶと思念することであるという。このように一切の「放捨」を行ったのち，「衆

生の苦が我において熟し，我が楽が残らず彼等において熟さんことを」[41]と廻向するのである。

実践の中核の最終段階を『パクサムジョンサン』中の上記本文では「最後に，成就のしるしとして順次に「起」（sloṅ／lhoṅs）・「変」（cho ḥphrul）・「終」（tshar tshad）が現われ，その果〔として〕はじめて空性を悟るのである。」と述べている。『空行母教誡』には「起」・「変」・「終」のほか更に「断」（chod tshad）が説かれており[42]，その要約を示せば以下の通りである。

「起」とは，ヨーガ行者が鬼魔のいる非常に危険な場所で禅定を実践すると，その行者の法性の威力に鬼魔が耐えきれず騒いで集まり出す。この時に行者の心身にわずかの不快感が起ることを「起」（lhoṅs・勃発）という。

それから鬼魔はそれぞれの能力に応じて種々に化身して，行者の禅定に障害をなそうとする。その時，鬼魔そのもの（dṅos），あるいは心的経験（ñams snaṅ），あるいは威圧（gzi byin），あるいは夢（rmi lam）によって行者に種々の不快な兆候が起ることを「変」（cho ḥphrul・異変）という。

種々の異変を示しても行者に危害を加えることが出来ず，行者の法性の威力に抗し切れず，行者を崇めるようになった鬼魔を奴僕のように駆使する。その時，行者に功徳が生じる前兆として喜びが起きることを「終」（tshar tshad・退治の成果）という。

更に行者の言葉を聞いて以後，鬼魔が衆生に害をなさず，正法を成就した人々を援助し，鬼魔自身も解脱道に入って善業に精進して，菩薩地を得る確かな兆候があれば，その時行者には善悪を分別する一切の執着心が根本から切れて無我の真理が現前し，自利として法身を成就し，利他として鬼魔をはじめとする多くの衆生を解脱の位におくことのできる円満な力，それを具えることを「断」（chod tshad・断の成果）という。

以上『一切宗義』，『獅子の遊戯』，『パクサムジョンサン』を中心に断境説を考察してきたが，最後に断境説の創始者であるマチグ・ラブキドゥンマの著書に述べられた断境説について考察したい。マチグの著書に関して，『パクサムジョンサン』には「その（断境説の）根本聖典に関して，マチグが著わされた bKaḥ tshom の類など手を加えていないものと・・・」[43]と述べられ，また『空行母教誡』（148b，6）には (1) Leḥu lag. (2) bKaḥ tshom. (3) Yaṅ tshom. (4) rNam bçad chen mo. (5) Zab don thugs sñiṅ. の五著があげられている。『パクサムジョンサン』に述べられた bKaḥ tshom の類というのは，(2)を含む上記五著作等がそれに相当すると思われる。上記のうち，(1)と(2)と(3)は東洋文庫西蔵蔵外文献中に見出される。

(1) Leḥu lag
- a. Thun moṅ gi le lag brgyad pa. No. 50－764 (1)
- b. Thun moṅ ma yin paḥi leḥu lag brgyad pa. No.50—764 (2)
- c. Khyad par le lag brgyad pa. No. 50－764 (3)

(2) Çes rab kyi pha rol tu phyiṅ pa zab mo gcod kyi man ṅag gi gshuṅ bkaḥ tshom chen mo. No. 50－757.

(3) Çes rab kyi pha rol tu phyui paḥi man ṅag yaṅ tshom shus lan ma. No. 50－762.

上記五著作以外にマチグの作として，次の二著作が所蔵されている。

(4) Çes rab kyi pha rol tu phyin paḥi man ṅag bdud kyi gcod yul ñin tshom. No. 50－763.

(5) Çes rab kyi pha rol tu phyin paḥi man ṅag gcod kyi gshuṅ çes rab skra rtseḥi sa gshuṅ spel ba rin po cheḥi gter mdzod. No. 50—766.

これらのうち筆者は(1)－cの Khyad par le lag brgyad pa.（『殊勝の八章』）を下に取り上げて見たい。

4. 『殊勝の八章』に叙述される断境説

本書は八章から成るが，実質的な断境説の説明は次に挙げる前部五章によってなされている。

(1) 帰依と発心による入門

(2) 身と心を分離する加持

(3) 無念にして無作意なる瞑想

(4) 蘊を食物として布施する実践

(5) 魔の行境にとられない見解

このうち，断境説の中核をなすものは，蘊を食物として布施する実践であり，これによって貪・瞋・痴の三毒の退治と六波羅蜜の完成がなされるとする。すなわちこの実践の準備として，鬼魔をはじめ一切衆生を哀れみ自分の身体を布施しなければならないと瞑想し，鬼魔などが自分の前に現われたと瞑想することが瞋恚の対治となり，つぎに身体を食物として布施することが貪欲の対治となり，身体を布施したのち心をあるがままに置くことが愚痴の対治となるとする。

さらに身体を食物として布施することは「布施の完成であり，それは衆生のために与えるの

であるから持戒〔の完成〕であり，怒らずに与えるのであるから忍辱〔の完成〕であり，繰り返し与えるのであるから精進〔の完成〕であり，〔心を〕散乱させずに与えるから禅定〔の完成〕であり，その後に〔心を〕あるがままに空性の境界に置くから智慧の完成である（KLG, 49 b, 6－50 a, 2）[44]」と述べ，単なる蘊とした身体を食物として布施する断境説の基本的実践が六波羅蜜を具えたものになるとしている。ただここに説かれた身体の布施は，単に身体を瞑想の上で切り，肉・血・骨・内臓などを鬼魔に布施するものであって，『パクサムジョンサン』，『甚深の熔液』，『空行母教誡』などに説かれた「白放捨」や「赤放捨」といった複雑な瞑想過程を通しての布施が考えられている訳ではない。

また「魔の行境にとられない見解」の解説の中で，身体の布施を実践するものにあらわれる鬼魔の障碍として，姿を現わす「変」と，音をたてる「変」と，鬼魔に威圧される「変」と，夢の「変」という四種の「変」のみが説かれるのに対し，『獅子の遊戯』と『甚深の熔液』では「起」と「終」が，『パクサムジョンサン』では「起」・「変」・「終」が，『空行母教誡』では「起」・「変」・「終」・「断」が説かれ，時代を下る著作ほどより精緻な教理体系をもつに至ったことがうかがわれる。

ただ身心分離の修法については，『殊勝の八章』に既に説かれており，これがマチグの真作であり，『パクサムジョンサン』にいわれるように後代の手が加わっていないものであるとすれば，後世に付加されたものとは考えがたい。

身心分離の修法は既に見たとおり，タントラ仏教の特徴的修法と類似の発想によっているが，タントラ仏教の修法とは明かに異っている。これもマチグの時に考案された修法であるとするならば，当時のタントラ仏教を至上とする時代的要請を敏感にとらえて，その教学に組みこんだものと考えられてよいであろう。

序　論　註

1) 『東大目録』の No. 90 から No. 111 まで。なお第5章のシチェ派の章は No. 105。

2) 「シチェ派研究序説」『日本西蔵学会報』第22号, pp. 13－16.

3) GHP, p. 121, Note 198.

4) DZL, p. 171, Note 518.

5) マチグ・ラプキドゥンマの生没年は RM, p. 9, p. 15, マチグ・シャマの生没年は RM, p. 9, p. 16 参照。

6) DTN, Ṅa, 8 a－10 b ; BA, pp. 220－226。および立川武蔵『西蔵仏教宗義研究』第一巻, pp. 31－32 参照。

7) 山口瑞鳳「チベット仏教」『講座　東洋思想』5, 東京大学出版会, 1967, p. 264, p. 269.

8) 羽田野伯猷「チベット仏教受容の条件と変容の原理の一側面」『東北大・日本文化研究所研究報告』4, 1968, pp. 67－68.

9) DTN, Pa, 2 a, 8 a－9 b ; BA, p. 982, pp. 996－999.

10) PSJZ, p. 375 : dam pa saṅs rgyas kyis skyo çākya ye çes dpon slob gsum daṅ yar kluṅ gi sma ra ser po sogs la gsuṅ pa las brgyud pa la pho gcod ces pa ḥbrul tsho drug daṅ ṅo sprod shal gdams daṅ bcas pa ste gdams pa de sma ra ser po nas rim par be ro smyon pa daṅ ri khrod shig po phug stoṅ daṅ rog çes rab hod daṅ sum ston ras pa daṅ gñan ston sogs las rim par daṅ／dam pa nas ma cig las brgyud pa la mo gcod ces bya ba gñis byuṅ no //

タムパ・サンゲがキョ・シャーキャイェシェ師資三人とヤルルンのマラ・セルボなどに説かれたものから伝えられた「男の断」といわれるもの――六教義と口述による秘義であり, この教誡はマラ・セルボから順次にペロ・ニェンパ, リトゥ・シグポ, ブグトゥン, ログ・シェラップウー, スムトゥン・レーパ, ニェントゥンなどを通じて〔伝えられた〕――と, タムパからマチグを通じて伝えられた「女の断」といわれるものの二が生じたのである。

11) GHP, p. 129, Note. 286.

12) ma gcig labs kyi sgron ma btsun ma klog mkhas pa shig pas／dge bçes gra paḥi çes rab kyi pha rol tu phyin pa gsuṅ sgrog paḥi mchod gnas ma yin ste／skabs çed du yar kluṅs rog pa sar dam pa

daṅ mjal nas gcod kyi gdams pa gnaṅ bas raṅ grol shiṅ／gshan don rgya chen po mdzad de／deṅ saṅ gi bar du gcod legs par dar ba yin／;　BA. p. 97.

13) SCR, 23 b, 1 以下ではマチグは A ma jo mo と呼ばれており, ここにいう Ma jo はその省略形と思われる。

14) deḥi gdams ṅag kyaṅ dam pa las brgyud pa ste／skyo bsod nams bla ma daṅ／yar kluṅs kyi rmaṅ ra ser po las brgyud pa la pho gcod ces bya la／ma gcig las brgyud pa rnams la ni mo gcod ces byaḥo // dam pa saṅs rgyas kyi gsuṅ gis yar kluṅs rog pa sar ma jo mchod gnas ma la sñiṅ gtam tshig gsum byas pas mo des grol // shes gsuṅs pa ltar raṅ ñid des grol ba yin mod kyi／ḥdi raṅ bshin gyi rnal ḥbyor ma yin pas ḥphral gyi gdams pa ḥaṅ maṅ du byuṅ ba yin no // ; BA. p. 982.

15) CTB, No. 47－724.

16) その生没年は不明であるが, ḥJam dbyaṅs mkhen rtseḥi dbaṅ po (1820－1892) から法を受けている (SCR, 89 a, 2 ; 91 b, 1) ことから推定。

17) 東洋文庫所蔵の西蔵蔵外文献中に収められているものを挙げれば次の通りである。

① Dam chos bdud kyi gcod yul las／gShi lam ḥbras bu gsum gyi dam tshig ñer gcig gi khrid rim ye çes mkhaḥ ḥgroḥi luṅ ḥphrin las ñi maḥi sñiṅ po, 127 fols, No. 47－725.

② Dam chos bdud kyi gcod yul las／Ye çes mkhaḥ ḥgroḥi shal luṅ gsaṅ ba mṅon du byuṅ ba spros ñer shi brtul shugs lam loṅs daṅ bcas pa, 161 fols, No. 47－726.

③ Byaṅ chub don du gñer baḥi gcod yul ba rnams la mkho baḥi ri chos rtsibs stoṅ ḥkhor lo, 60 fols, No. 47－727.

④ rTsa gsum rab ḥbyams rgya mtshor mchod paḥi tshogs kyi ḥkhor loḥi rnam bçad bde chen rab ḥbar, 35 fols, No. 47－730.

⑤ Zab don gcod kyi man ṅag bsdus don leḥu ñer gcig pa ñi zla kha sbyor, 25 fols, No. 47－731.

⑥ gSaṅ ba chen poḥi gtam／ḥJig med chos kyi seṅ geḥi ṅa ro ñer lṅa, 21 fols, No. 47－732.

⑦ Sems daṅ rig pa dbye ba ye çes rdo rjeḥi mtshon cha srid pa

mthar byed, 7 fols, No. 47—733.

⑧ Man ṅag bdud kyi gcod yul las / Tshogs gñis lam bzaṅ bsod nams lhun po, 5 fols, No. 47—734.

⑨ rje Raṅ byuṅ rdo rjes mdzad paḥi gcod kyi tshogs las rin po cheḥi phreṅ ba ḥdon bsgrigs bltas chog tu bkod pa gcod kyi lugs sor bshag, 94 fols, No. 49—741.

18) G. Tucci は PTS, p. 257, Note. 164 で, 注17)の②③(東洋文庫西蔵蔵外文献 No. 47—726, No. 47—727)に相当する二著を挙げている。

19) dguṅ lo ni çu tsa bdun lon tsa na bla ma rin po cheḥi shal nas / ṅo sprod kyi brgyud pa bar ma chad cin byin rlabs kyi na bun ma yal ba yin gsuṅs / gñis pa ñe baḥi brgyud pa ni / a ma jo mo yan chad du chos spyiḥi brgyud pa ni yod la / gcod yul du grags pa ni med gsuṅs /

20) 山口瑞鳳「チベット」『史学雑誌』第84編第5号, p. 243 ; 羽田野伯猷「ヂニャーナ・シュリー・パドラ著聖入楞伽経註おぼえがき」『まなさろわろ』一, 仙台, 1927, p. 27 参照。

21) rgya chos daṅ bod chos kyi ṅos bzuṅ ba ni / spyir chos thams cad rgya gar nas bod du dar ba yin mod kyaṅ / bod chos rgya gar dar ba yaṅ yod gsuṅs /

22) sa chos daṅ gnam chos gñis kyi ṅos bzuṅ ba ni / chos kyi rgyud rgya gar du char du babs / tsa ka ra sde bshi daṅ gsaṅ sṅags kyi rgyud thams cad gnam chos yin / sa chos gter ma thams cad yin te / byaṅ chub sems dpaḥ rnams kyis ḥgro baḥi don du sbas pa yin no // bkaḥ ma daṅ gter ma gñis kyi ṅos bzuṅ ba ni / rgyal baḥi çākya thub paḥi bkaḥ nas gsuṅs paḥi bkaḥ thog tu grol bas na bkaḥ ma yin / sa ḥog tu sbas paḥi gter ma min kyaṅ ma cig gi thugs chos kyi dbyiṅs nas raṅ grol tu byuṅ bas na gter ma yaṅ dag paḥo // pho gcod mo gcod gñis kyi ṅos bzuṅ ba ni / pha rgyud brdaḥ las brgyud pa ni pho gcod daṅ / yum gyi thugs sprul ma cig lab sgron la mkhaḥ ḥgro thams cad kyis shal mṅon sum du bstan ciṅ sñan du bstims pa rnams mo gcod yin no //

23) スタン『チベットの文化』(山口・定方訳) 岩波書店, 1972, p. 312 参照。

24) ḥdzam buḥi gliṅ du dam chos bdud kyi gcod yul dar bas / jo moḥi bstan pa nam laṅs ñi ma çar ba bshin du gyur to // de nas maḥi dgoṅs pa la / rgya gar rdo rje gdan ḥdi ḥdzam buḥi gliṅ gi dbus yin pas chos thams cad rgya gar nas byuṅ bas / lab sgron maḥi chos brgyud ḥdi bod yul gyi dbus zaṅs ri mkhar dmar nas / rgya gar du bod kyi chos ḥdi dar ba cig bya dgos dgoṅs te çes rab kyi pha rol tu phyin paḥi don ñams su len paḥi thabs / dam chos bdud kyi gcod yul ḥdi la yid ches par bya baḥi phyir du / pha rgyud brdaḥi brgyud pa daṅ gcig / ma rgyud çes rab kyi brgyud pa daṅ gñis / sñiṅ po don gyi brgyud pa daṅ gsum / bkaḥ thog nas grol ba ñams kyi brgyud pa daṅ bshi ru bsdus / de la pha rgyud ni thabs gtso cher ston / ma rgyud ni çes rab gtso cher ston / sñiṅ po don gyi brgyud pa ni gñis med don gyi bde ba chen po gtso cher ston / bkaḥ thog nas grol ba ñams kyi brgyud pa ni / a ma jo mo ñams myoṅ rgyud la skyes paḥi don mṅon du gyur te / bkaḥ daṅ mi ḥgal bar grol lugs so // a ma jo moḥi brgyud pa yaṅ / riṅ brgyud daṅ ñe brgyud gñis las / riṅ brgyud kyi dbaṅ du byas na / yum chen mo çes rab kyi pha rol tu phyin mas rdo rje ḥchaṅ chen por brgyud / des yaṅ dag par rdzogs paḥi saṅs rgyas çākya thub pa la brgyud / des ḥjam dpal smra baḥi seṅ ge la bçad / des rje btsun sgrol ma la / des ārya de wa la / des dam pa rgya gar la / des bsod nams bla ma la / des ma cig la / des sras gsum la bçad par mdzad / de ni rgya chos bod la bsgyur baḥo //

25) PSJZ, p. 376 ; deḥi brgyud pa la pho brgyud sras brgyud mo brgyud don brgyud bshi las daṅ po ni / ston pa ḥjam dbyaṅs smra seṅ klu sgrub kyi slob ma ārya de ba bram ze ārya de ba dam pa saṅs rgyas daṅ / gñis pa ni / ston pa byams mgon thogs med dbyig gñen ārya de ba zer / gsum pa ni / yum chen mo sgrol ma su kha siddhi (gru ḥdzin nas chos grags las man ṅag ñan nas grol ba) ma cig ste ḥdi gsum la çes rab thabs gsaṅ sṅags rgyud kyaṅ zer / bshi pa ni / ḥphags lha daṅ bde baḥi dṅos grub gñis las dam pa saṅs rgyas daṅ de nas skyo chen ye çes bla ma skyo chuṅ bsod

nams bla ma ma cig lab sgron rgyal ba don grub daṅ thod smyon sogs las brgyud zer ／

26) 注 24）参照。

27) 東洋文庫西蔵蔵外文献 No. 34 .

28) TCP, Foreword 参照。

29) The Autobiography of 'JAM-MGON KON-SPRUL BLO-GROS-MTHA'-YAS, by KANDO, Tibetan Khampa Industrial Society, India 1973, Preface 参照。

30) 東洋文庫所蔵 Kon sprul Yon tan rgya mtshoḥi gsuṅ ḥbum, Vol.Ja, No. 45 .

31) de ḥaṅ yon tan rin po che sdud las ／ rgyu rnam bshi yis byaṅ chud sems dpaḥ mkhas stobs ldan ／ bdud bshis thub par dkaḥ shiṅ skyod par mi nus te ／ stoṅ par gnas daṅ sems can yoṅs su mi gtoṅ daṅ ／ ji skad smras bshiṅ byed daṅ bde gçegs byin rlabs can ／ ces khyad par can gyi don bshiḥi gdams ṅag lag len tu bstar ba çes rab kyi pha rol tu phyin pahi man ṅag gi sñiṅ po dam chos bdud kyi gcod yul du grags paḥi gdams ṅag rgya mtsho lta bu ḥaṅ tiṅ ṅe ḥdzin gsum daṅ mthun paḥi lta sgom spyod gsum gyis lam gyi yon tan goṅ du spel ba yin pas...

32) 第二部Ⅱ訳註 9), 16）参照。

33) deḥi ñams len rim pa ni ／ sṅon ḥgro la ḥgro lugs bshis gnas gaṅ ḥos su soṅ nas dṅos gshi la thog mar ṅes ḥbyuṅ skyabs sems bla maḥi rnal ḥbyor daṅ bar du dkar ḥgyad dmar ḥgyad sna tshogs ḥgyad daṅ mjug bsṅo ba bya ba daṅ phyis su grub rtags la rim par sloṅ cho ḥphrul tshar tshad byuṅ shiṅ ḥbras bu thog ma stoṅ ñid rtogs paḥo //

34) 東洋文庫西蔵蔵外文献 No. 47—726 .

35) de la khyad par bshi daṅ ldan pas ḥgro ba bya ste ／ gaṅ du ḥgro ba gnas kyi khyad par ／ nam ḥgro ba dus kyi khyad par ／ gaṅ ḥgro ba gaṅ zag gi khyad par ／ phyin nas gaṅ ñams su len pa gdams ṅag gi khyad par par ro //

36) YPT, 99 b, 3—100 a, 2.

37) YPT, 101 a, 3—106 a, 3.

38) YPT, 106 a, 3—108 b, 1.

39) YPT, 108 b, 1—3.

40) YPT, 108 b, 3—5.

41) YPT, 118 b, 5—6.

42) YPT, 78 a, 3—79 b, 1.

43) PSJZ, p. 376 : deḥi gshuṅ ni ma gcig gis mdzad paḥi bkaḥ tshom skor sogs lhad med daṅ ／ ・・・

44) ・・・ sbyin paḥi pha rol tu phyin pa ／ de sems can gyi don du gtoṅ bas tshul khrims ／ khroṅ? khro med par gtoṅ bas bzod pa ／ yaṅ daṅ yaṅ du gtoṅ bas brtson ḥgrus ／ ma yeṅs par gtoṅ bas bsam gtan ／ rjes gnas lugs stoṅ pa ñid kyi ṅaṅ du ḥjog pas çes rab kyi pha rol tu phyin paḥo //

第　二　部

訳　註

凡　　例

＊　＜　＞内の数字及び各節の表題は訳者の付したものである。

＊＊　ガ°は〔ŋa〕，グ°は〔ŋu〕，ゲ°は〔ŋe〕，ゴ°は〔ŋo〕の音を表わす。

I　『一切宗義』シチェ派の章訳

〔序〕

【1b】タムパ・ギャガル[1] Dam pa rGya gar がチベットをお哀れみになって，苦を鎮めるために三度降らせた大雨[2]を，一つに集めた教誡の海，〔すなわち〕シチェと呼ばれる宗義のあらわれを説こう。

〔『一切宗義』の〕第四章[3]・シチェ派の宗義の形成を述べるにあたり，

＜1＞〔シチェ派の宗義の形成過程〕そのものと

＜2＞その一支派であるチェ派の〔宗義の〕形成過程の二〔章を設けよう〕。

＜1＞　シチェ派の宗義の形成過程

＜1・1＞　宗派名の由来

昔の人達がシチェ（shi byed，鎮める）の語の意味を，「正法ドゥッゲ°ル・シチェ（Dam chos sdug bsñal shi byed，苦を鎮める正法）」という教義名によって名付けたのであり，〔それは〕この教義によって，前生の業力のために今生で身【2a】を下賤に落している者や，病気にかかっている者や，貧しい者や，悪魔に苦しめられている人達の諸々の苦を直ちに鎮めてヨーガを実践させるのであるから「正法ドゥッゲ°ル・シチェ」と言われるのであるという。

しかしながら，それだけととるべきではない。すなわち般若波羅蜜多（智慧の完成）の実践によって輪廻と涅槃の一切の苦を鎮めるのであって，この教誡（gdams pa）の真髄もまた般若波羅蜜多の実践であるということから，そのように名付けられたのであるが，目前の災難だけを鎮めるだけであるならば，優れた教誡【2b】とならないのである。

それはまた，一切の苦を充分に鎮める呪（sñags）いうことによって，そのように名付けられたと理解される。

＜1・2＞　宗祖パ・タムパ・サンゲ

〔さてこのシチェ派は〕誰より起ったか，その宗祖はパ・タムパ・サンゲ Pha Dam pa

Saṅs rgyas[4] である。彼は南インドのチャラシムハ Tsa ra seṅ ge（Carasiṃha[5]）地方のクーパドヴィーパ Khron paḥi gliṅ（Kūpadvīpa[6]）でお生まれになった[7]。七度目の転生であったため，罪の汚れがなく，本性から善を好む人であった。幼い頃より文法学など一切の学問に関して学者になるまで勉学した。ヴィクラマシーラ寺で戒師クシェーマデーヴァ dGe baḥi lha（Kṣemadeva[8]）について出家し，尊師ダルマキールティ gSer gliṅ pa（Dharmakīrti[9]）により〔菩提〕心を起し，多くの尊師から灌頂を受けたことにより三戒を具足した。〔それから〕顕教と文法学の尊師十一人[10]，調息〔を説く〕父タントラ（pha rgyud[11]）の尊師十一人[12]，楽の心的体験〔を説く〕母タントラ（ma rgyud）の尊師十一人[13]，大印契の標幟〔を説く〕尊師十一人[14]，心伝授の尊師十一人[15]，男女の成就者（grub thob）五十四人について一切の教誡を受けた。

これらの尊師を教え上げると，インドラブーティ Indra bhu ti（Indrabhūti[16]）やナーガールジュナ kLu grub（Nāgārjuna[17]）などずっと以前に現われた人と，後代に現われた人とが幾人か教えられているが，このことは，時代が一致しないように思われる点について〔いえば〕，タムパが非常に長い生涯を過されたからではないかと考えられる[18]。また，タムパが尊者ナーガールジュナの弟子である【3 a】ということが中国のある史書にも見られるから本当らしい，と一切智者である私の尊師が言われた[19]。

〔さて〕タムパは六十五年間にわたって諸国で観想したことにより[20]，十二の加持神[21]など数えきれない〔程の神〕と，不可思議なるダーキニーの尊師三十六人の御姿を御覧になった。〔また，地下の宝を捜し出す〕眼薬[22]，〔一日に百由旬を駆けることの出来る〕俊足，〔魔法の〕丸薬，地下〔を通り抜ける能力〕，ヤクシー〔を召使いのように使う力〕，〔身を〕刀〔にかえる魔術〕，天を駆けるなどの〔通常の〕成就を得，〔さらに〕最高の成就（mchog gi dṅos grub）である大見道の智慧を獲得した[23]。〔そして〕二十四ケ国などの諸聖地で行を行じられたため，成就者であるとの評判により名前も種々に呼ばれたのである[24]。

チベットには五度来られたが[25]，そのうち五度目の際にはチベットから中国へもおいでになり[26]，当地においても名声が大きかった。

＜1・3＞ シチェ派の初期・中期・後期の伝統

〔タムパは〕チベットで無数の弟子を成熟されたが，中でも評判の高いのはシチェ派の初期と中期と後期〔の伝統〕である。

＜1・3・1＞ シチェ派の初期の伝統

初期〔の伝統[27]〕は〔タムパが〕カシミールのジュニャーナグフヤ Dzñā na gu hya（Jñānaguhya）に〔伝へ，さらに〕それをオンボ・ローツァーワ Oṅ bo lo tshā ba が翻訳したものについていう。

＜1・3・2＞ シチェ派の中期の伝統

中期の伝統[28]は〔タムパが〕マ・チューキシェラップ rMa Chos kyi çes rab[29] とソチュン・ゲドゥンバル So chuṅ dGe ḥdun ḥbar[30] とカム・イェシェゲルツェン sKam Ye çes rgyal mtshan[31] の三人に教誡を与えられて発展したものをいう。

＜1・3・3＞ シチェ派の後期の伝統

後期の伝統[32]はタムパがディンリ Diṅ ri のランコル gLaṅ skor【3b】に来られ〔説法されたものをいう〕。優れた弟子としてはタムパ・チャルチェン Dam pa Phyar chen，チャルチュン Phyar chuṅ，ヴァジュラクローダ Badzra kro dha（Vajrakrodha）クンガー Kun dgaḥ[33] の四人であるが，なかでもタムパ・クンガー Dam pa Kun dgaḥ[34] が上席である。〔クンガーは〕五度の生涯にわたって，タムパ・サンゲに後押し（指導）されてきた。〔そして〕現世においてタムパの教誡の宝庫となったため，弟子としてパツァブ・ゴムパ Pa tshab sgom pa[35]，ゲルワ・テネー rGyal ba Te ne[36]，ログ・シェラップセンゲー Rog Çes rab seṅ ge[37]，シグポ・ニマセンゲー Shig po Ñi ma seṅ ge[38] などの後継者が多数輩出してシチェ派を発展させたのである。

＜1・4＞ シチェ派三期の伝統の教誡

この三〔期の〕伝統の教誡の名称だけを述べるならば

＜1・4・1＞ 初期の伝統の教誡

初期の伝統〔の教誡[39]〕は，シチェのターラー（sgrol ma）に関する法が三つと，ヤマーンタカ（gçin rje gçed）などの成就法である。

＜1・4・2＞ 中期の伝統の教誡

中期の伝統は，マ〔・チューキシェラップ〕とソ〔チュン・ゲドゥンバル〕とカム〔・イェシェゲルツェン〕の三〔人の伝統〕と小〔伝統と雑多の伝統〕である。

＜1・4・2・1＞ マ・チューキシェラップの教誡

マの法類[40]に関して〔いえば〕，句伝（tshig brgyud）と義伝（don brgyud）の二〔種〕がある。

そのうち義の教え（義伝）とは十六種の実践的な手引である。

〔つぎに〕句伝とは発心〔経〕と概論と雑録と批難書と汎論などである。

＜1・4・2・2＞ ソチュン・ゲドゥンバルの教誡

ソ派 So lugs の教法[41]の部門に関して〔いえば〕,句伝（tshig brgyud）と義伝（don brgyud）の二〔種〕がある。

そのうち句伝にも大伝統と小伝統の二〔種〕がある。大〔伝統〕には，聖人〔に由来する〕大の五十四部と中の三十二部と小の十七部があり，それ（それぞれの部）にはそれぞれの成就者（grub pa thob pa）の伝記と教誡の本質と弟子を導く方法すべてがそれぞれある【4a】ので〔大の部は〕五十四の伝統になり，〔全部で〕百三の伝統となるから大伝統と言われるのである。

小伝統に関して〔いえば〕，「五義類」（Don skor lṅa ma）・「四次第」（Rim pa bshi ma）・「禅定の大小の座」（bSam gtan gyi thun che chuṅ）・『ダクパゲー』Grags pa brgyad・「三父子」（Yab sras gsum ma）・『キュンチェン』sKyon can・『キュンメー』sKyon med など三十二の法類がある。

〔つぎに〕義伝には，偏ったもの（Phyogs su lhuṅ ba）と偏よらないもの（〔Phyogs su〕ma lhuṅ ba）の二〔種〕がある。

そのうち最初のもの（偏ったもの）に関して〔いえば〕，男女五十四人のヨーガ行者に関する五十四の義伝と，三十二人の尊師に関する三十二の義伝と，十七人の聖人に関する十七の義伝がある。

偏よらないものには，開眼の〔法〕類とダーキニーの〔法〕類がある。そのうち最初のもの（開眼の法類）には四子と母の五がある。すなわち〔母とは〕『開眼の隠されたテキスト』

gShuṅ spas pa mig ḥbyed であり，〔四子とは〕その支分としての「時に関する教誡」（Dus daṅ dus phran la gdams pa）と，「百十六の面授」（Ṅo sprod brgya rtsa drug pa）と，「不滅の清浄」（Ma ḥgag rnam dag）と，「金剛大士の秘密道」（rDo rje sems dpaḥi gsaṅ lam）である。

ダーキニーの〔法〕類には，ソ〔チュン〕の四大〔法〕類がある。すなわち最高の成就に関する標幟の〔法〕類と，通常の成就に関する四字の〔法〕類と，〔そしてこの〕二種の成就に関するジャガタ（Dza ga ta）の〔法〕類と，〔修法の〕座の〔法〕類とである。〔さて〕標幟の〔法〕類には，ヘールカ（He ru ka）の標幟の〔法〕類と，善逝の標幟の〔法〕類と，ヴァジュラガンタ（rDo rje dril bu pa）[42]の標幟の〔法〕類と，タムパの雑多の標幟とがある。【4b】通常の成就には，赤ヴァーラーヒーの口の成就〔法〕と，黒ヴァーラーヒーの意の成就法がある。それにはヴァーラーヒーの法身の成就法と報身の成就法と化身の成就法がある。ジャガタの〔法〕類とは旃陀羅女（gTum mo）の一法輪である。座の〔法〕類は威儀の実践を護持する方法である。

これらの〔法の〕根本の心髄となっているのは，タントラと術語が一致するマウェーセンゲ sMra baḥi seṅ ge[43] の義伝と，〔タントラと〕術語が一致しない第四の伝統で広くは知られていない義伝と，欠けた章の要約と，ソ〔チュン〕の心を真直にさせる口伝などの四つがあるのである。

＜1・4・2・3＞ カム・イェシェゲルツェンの教誡

カム派 sKam lugs[44] に関して〔いえば〕，カム・イェシェゲルツェンはタムパの教誡通りに『現観荘厳論』mṄon rtogs[45] の八主要項目[46]を説き，『仏説仏母宝徳蔵般若波羅蜜多経』sDod pa[47] のほかにも，広中の『般若経』をも引用して説明したので，弟子は「上の伝統」（Yas brgyud）と「下の伝統」（Mas brgyud）の二〔伝統〕が現われたが，「上の伝統」に関して〔いえば〕，クン・ワンチュグドジェ ḥKuṅ dBaṅ phyug rdo rje とギャム・シェラップラマ rGyams Çes rab bla ma の二人より伝えられた。この両人ははじめ病気であったためにカムは病気を通じて〔真理を〕伝授し，根本聖典〔として『現観荘厳論』の〕「第一章」（sKabs daṅ po）[48]を，教誡〔として〕四諦を雑多な実践方法ともどもお説きになった。その後，ギャトゥン・シュンヌセンゲ rGya ston gShon nu seṅ ge がカム派の教誡の書で『般若波羅蜜多の心伝の実践・口伝【5a】の宝石の首飾り・因明の魔法の錠』Çer phyin thugs brgyud lag len sñan brgyud rin cheṅ phreṅ ba gtan tshigs ḥphrul gyi lde mig といわれるものを著わした。

「下の伝統」に関して〔いえば〕，ド・チュツゥン sGro chos brtson[49]にカムが漸悟と頓悟の人の区別により，本質の意味と現観〔を説明するという〕二方法をもって〔真理を〕伝授してから，すべての経を縁起の四種のあり方によって解説した。すなわち「下の伝統」は瞑想を通じて展開された教誡である。

＜1・4・2・4＞ 中期の小伝統とその教誡

また中期に興起した小伝統[50]にダバ Grva pa とチェ lCe とジャン lJaṅ の三派がある。

すなわち善知識ダバ[51]にタムパは〔苦を〕鎮める九種の燈の教誡をお与えになった。すなわち『優波提舎身燈』Man ṅag skuḥi sgron ma[52]と『乗語〔燈〕』Theg pa gsuṅ gi〔sgron ma〕[53]と『秘密心〔燈〕』gSaṅ ba thugs kyi〔sgron ma〕[54]と『正見〔燈〕』Yaṅ dag lta baḥi〔sgron ma〕[55]と『宝修習〔燈〕』Rin po che sgom paḥi〔sgron ma〕[56]と『菩提行〔燈〕』Byaṅ chub spyod paḥi〔sgron ma〕[57]と『平等事〔燈〕』mÑam ñid gshiḥi〔sgron ma〕[58]と『瑜伽道〔燈〕』rNal ḥbyor lam gyi〔sgron ma〕[59]と『究竟果燈』dÑos grub ḥbras buḥi sgron ma[60]などである。

チェ・チャンドラキルティ lCe Tsandra ki rti[61]にタムパはスートラとタントラとを取り合わせた教誡をお与えになった。すなわちスートラの『仏説仏母宝徳蔵般若波羅蜜多経』sDud paとタントラの『聖妙吉祥真実名経』mTshan brjod[62]とを合わせて波羅蜜多（到彼岸）の教義としたものと，呪（sṅags）に関する男女五十八人の成就者の教誡などである。

ジャン・カーダムパ lJaṅ bKaḥ gdams pa に〔タムパは〕般若波羅蜜多の書かれざる教誡をお与えになった。〔これは〕面授の完全なものではないが，これ一つ以外には無いといわれる。

＜1・4・2・5＞ 中期の雑多の伝統とその教誡

雑多の伝統[63]に関して〔いえば〕，〔タムパは〕ドゴム ḥBro sgom には『名等誦金匙』mTshan brjod gser gyi thur ma[64]をお与えになった。【5b】クゴム Gu sgom には業印（las rgya）の教誡を，チュゴム Chu sgom には散文の要訳（sñiṅ gtam lhug pa）の教誡を，ゴムパ・マルゴム sGom pa dmar sgom には「一時に三が切れる」（chig chod gsum）の教誡を，ニャ・ローツァーワ gÑags lo tsā ba には無類の勇士ヘールカ（bDe mchog dpaḥ bo gcig pa）の教誡を，チェモ・ペルドゥン lCe mo dpal sgron には成就者の実践に関する十六部の法を，ニェルトゥー gÑal stod のコルジェ・ゴムパ Ṅor rje sgom pa には俱生修習（lhan cig skyes sbyor）を，チュバル Chu bar のネーテン・チュンダッグ gNas brtan ḥbyuṅ grags には『般若波羅蜜多心経』Çes rab sñiṅ po[65]の教誡を，カクシェー・シェラップゲルツェン sÑags bçad Çes rab rgyal mtshan には時輪（dus ḥkhor）の教誡を，シャンパ・ウデップ Çaṅs pa dBu sdebs には四字（yi ge bshi）の教誡を，ニェモ sÑe mo のギャトゥン・キツェッグ rGya ston skyi rtsegs には『喜金剛怛特羅』dGyes pa rdo rje[66]の教誡を，シャンサグ・チュンワ Shaṅ sag chuṅ ba にはバーラーヒーの秘密成就（phag moḥi gsaṅ sgrub）を，尊師グンカルワ dGon dkar ba には金剛手尊（phyag na rdo rje）の教誡を，キシュー sKyid çod のベングンゲル ḥBan guṅ rgyal にはヘールカの口伝（bde mchog sñan brgyud）を，マチグ・ラブドゥン Ma gcig Lab sgron には「断」（gCod）の教誡をお与えになった。これらが中期の伝統の〔法〕類である。

＜1・4・3＞ 後期の伝統の教誡

後期の伝統の諸法[67]は「無垢なる大印契の滴の実践の〔法〕類」（Phyag rgya chen po dri med thig pa phyag bshes kyi skor）と名付けられる[68]。すなわち「大印契」とはタムパ・サンゲがマイトリパ Mai tri pa の直接の弟子であったから，マイトリパの〔説かれた〕大印契そのものである。「無垢」とはタムパのおっしゃったことなどについていわれ，「実践」とは他の教えなど【6a】と幾分異なった成就の素直さがあることに対していわれる。

さて〔この教誡の〕本質は密呪（gsaṅ sṅags）と相応する（＝矛盾しない）般若波羅蜜多であるといわれる[69]。また，〔これは〕マイトリパの『真性十』De kho na ñid bcu pa[70]の注釈にも，般若波羅蜜多であるが密呪と相応する実践の仕方〔すなわち〕『喜金剛怛特羅』Kyeḥi rdo rje に説かれるのと似た形式のものがあり，〔それを〕神の禅定（lhaḥi rnal ḥbyor）に依るものでなく四印契（phyag rgya bshi）[71]に従うものではないから密呪（gsaṅ sṅags）ではないとおっしゃったが，このことと一致するように思われる。

〔ただ〕これも一般に知られているものなどに関して説明したのであるが，タムパはチャルチェン Phyar chen とベングンゲル ḥBan gun rgyal に時輪（dus kyi ḥkhor lo）業印（las rgya）の教誡についても大勢に与えられたのであるから，タムパの「ドゥッゲル・シチェ（苦を鎮める）」の法に密呪〔の法〕が全くないことはないのである。

〔さて〕密呪（gsaṅ sṅags）と相応すると説くこと自体によれば，アーリカーリの加持なども密呪と相応するものであるが，〔これは密呪〕そのものではないから，これに関して誤っ

て理解してはいけない。すなわち〔これは〕『般若経』自体から四十二文字の陀羅尼門を説明することと似ているからである。

〔さて〕この法類には一般【6b】と特別との二つの教義部分がある。

＜1・4・3・1＞ 一般の教義部分

そのうち一般〔の教義部分〕には，実践をともなうスートラとタントラと，口伝をともなう専門（bkaḥ babs）と，『タティッグ』Phra tig をともなう「ディメー（無垢）」Dri med と，『シェブム（十万説）』bÇad ḥbum をともなう『ダルツァッグ』とがある。

第一〔の実践をともなうスートラとタントラ〕に関して〔いえば〕，スートラについては一般には『チュルン・ゴンパルロルペードー』Chu kluṅ mṅon par rol paḥi mdo，特別には『般若波羅蜜多心経』Çes rab sñiṅ po であり，タントラについては一般には『デヌーセルチェ』sDe snod gsal byed，特別には『チュルンチェンポ』Chu kluṅ chen po であり，実践とは大中のワンコル dBaṅ ḥkhor と大〔中〕小の三〔種〕の「道次第」Lam rim である。

口伝〔をともなう〕専門に関して〔いえば〕，四〔種〕の専門とその四〔種〕の口伝の実践道である。

『タティッグ』〔をともなう〕「ディメー（無垢）」に関して〔いえば〕，「ディメー（無垢）」には教法が打ち立てられる根本の〔法〕類など六〔種〕があり，『タティッグ』[72]とはパツァップがクンガーに尋ねた種々の有害な障碍についての〔クンガーの〕教誡である。

『シェブム（十万説）』〔をともなう〕『ダルツァッグ』に関して〔いえば〕，『ダルツァッグ』[73]〔には〕甘露の教誡の〔法〕類など八〔種〕があり，それはパツァップの即席の説法をテネーが文字にしたものである。『シェブム』[74]とはテネーやシグボやニェドーワ sÑe mdo ba などによって著わされた数々の解説である。

＜1・4・3・2＞ 特別の教義部分

特別の教義部分には要約をともなうタントラと，導論をともなう灌頂と〔修行〕道と，「三つの隠された宝」と，八種の小冊子とがある。

「三つの隠された宝」とは，『尊師の隠された宝』bLa ma gsaṅ mdzod と【7a】『加持神の隠された宝』Yi dam gsaṅ mdzod と『ダーキニーの隠された宝』mKhaḥ ḥgro gsaṅ mdzod である。

五種の道に関する〔法〕類とは，ビルパ Bi ru pa の方便道の四門の道に関する〔法〕類と，サラハ Sa ra ha の方便道の四境に関する〔法〕類と，ダルマキールティ gSer gliṅ pa の八種の道に関する〔法〕類と，アーリヤデーヴァ Ārya de ba の八種の道に関する〔法〕類と，ナーローパ Nā ro pa の四結合の道に関する〔法〕類とである。

八種の小冊子とは，甚深なる灌頂の小冊子，開悟の根本の小冊子，口伝による導論の小冊子，四門の要点の小冊子，数々の神通の小冊子，甚深なるマントラの小冊子，教誡の保護者ダーキニーの小冊子，主要な教誡の三部の小冊子などである。これらが秘密の経論をもつ特別の教義部分である。

＜1・5＞ シチェ派の教誡の本質

シチェ派の教理の真髄となるものは，広中略三種の『般若波羅蜜多経』の一切の本義を実践する教誡[75]で，一般には知られていない特別の教法，すなわち般若波羅蜜多の道次第 Çes rab kyi pha rol tu phyin paḥi lam gyi rim pa いわれるものである。

ところで一般にタムパ・サンゲには般若波羅蜜多の伝承があり，〔特にタムパに〕固有のものが六ある。すなわち兜率天から伝えたるもの，竜の国から伝えたるもの，ウッディヤーナ U rgyan（Uḍḍiyāna）から伝えたるもの，東インドのバンガラ Bhaṁ ga la から伝えたるもの，南〔インド〕のベタラ Bhe ta la から伝えたるもの，南〔インド〕・ビショーコータ Bhi ço ko ta〔地方？〕の【7b】チャンダナドゥビーパ Tsan dan gyi gliṅ（Candanadvīpa）から伝えたるものである。〔そしてこの〕六つの固有のものの中心となる意義の本質を纏めて示されたところの般若波羅蜜多の道を実践する教誡は，燃灯仏が釈迦牟尼に〔伝え〕，彼（釈迦牟尼）が阿難に伝え，〔さらに〕彼（阿難）から比丘のセンゲー Seṅ ge へと三十六人の伝承を経た時に，凶悪な国王により伝承が断ち切られたのである。そこで無着菩薩は，釈迦牟尼に〔法を〕直接にお聴きになったのは弥勒菩薩であるとお考えになり，弥勒菩薩を観想したところ〔弥勒菩薩に〕お目に掛って般若波羅蜜多の教誡を直接にお聴きになり〔それを〕弟の世親菩薩にお与えになった。彼（世親菩薩）は〔その教誡を〕タムパの叔父アーリヤデーヴァ Ārya de ba に，〔そして〕彼（アーリヤデーヴァ）がタムパに教授したのであると説明される[76]。

この教誡は『現観荘厳論』の如く〔『般若経』の意義を〕実践するよう要約して説明した希有なるものであるが，その理趣は僅かな言葉でもっては示すことが出来ず，詳細に説明するとなると甚だ多大となるからここでは述べない。解釈の伝統はまた後代にも現われているけれども，現在は絶えているようである。

シチェの見解の根源は般若経関係の経典に由来するものであり，教誡の典籍としてはナーガールジュナ〔のもの〕を標準とするのであり，〔タムパの〕『ディンリ・ギェチュパ』[77] Diṅ ri brgyad cu pa にも「空の境界【8 a】において智慧の槍を振り回すべし，そうすれば見解に障碍はないのである。ディンリの人よ。」という〔自分の〕見解が極端を離れたものであると説かれているから，中観の見解より外れるものではないと考えられるのである。しかし後代の伝統に属する典籍の中には，ña（魚）とñuṅ ma（蕪）とを混同した〔ような〕ものがたくさんあることも確かである。シチェのこの宗義に関して，初期の時代に成就を得た人が無数に出現したのであり，評判の高い寺院に関して〔いえば〕大丈夫（skyes mchog）サムテンペル bSam gtan dpal[78] が建立した「ヤップ・チュディン」Yab chos sdiṅs と「ゴモ・チュディン」sGo mo chos sdiṅs の二〔寺〕[79] である。そして大丈夫（サムテンペル）の後にはチャンセムパ Byaṅ sems pa と尊者クンシュン dKon gshon が住持となった。大丈夫（サムテンペル）には，ツォンカパ rje rin po che[80] の先生であった法尊（chos rje）トゥンリンパ Don rin pa[81] も教誡を承ったらしい。

〔しかし〕今日ではシチェの教誡は『母音子音』dbYaṅs gsal と『聖縁起心』rTen sñiṅ[82] の加持と大天アムゴーラ Amghora の実践法と秘伝などの雑多な教誡のほかは，重要な教誡のうちで書物になったもの以外には一切の宗教的伝統は崩壊したようである。

＜2＞ その一支派であるチュ派の〔宗義の〕形成過程

＜2・1＞ 支派名の由来

その（シチェ派の）一支分であるチュ派 gCod lugs に関して，〔まず〕チュ（gCod・断）といわれる語義[83]は，教誡の実践方法により名付けられたのである。すなわち慈悲心と【8 b】菩提心により自利の作意を断ち，空の見解により輪廻の根源を断ち，〔菩薩と〕同様〔の善巧と勇猛〕により四魔[84]を断つから，そのように名付けられたのである。

しかしそれはまたチュ（sPyod・行）ともいわれるが，それは菩薩の実践すべき方便と智慧の道を行ずるのであるから，そのようにいわれるのである。

＜2・2＞ チュ派の教誡の伝統

この教誡もまた最初はタムパ・サンゲに起源するものである。すなわちタムパが三度目の入蔵[85]の際，ツァン gTsaṅ でキョトゥン・ソナムラ sKyo ston bSod nams bla ma と

ヤルルンの人（Yar luṅ ba）である マラ・セルポ sMa ra ser po の二人に「断」の教誡を与えられた。マラ・セルポは自分の弟子ニェンパ・ペロ sMyon pa Pe ro〔に〕，彼はツェトゥン Tse ston とスムトゥン Sum ston の二人〔に与えられた〕。〔さらに〕ツェトゥンがニェントゥン gÑan ston〔に〕，スムトゥンがケルデン・セモ sKal ldan Sras mo〔に与えられた〕。〔そして〕彼（ケルデン）がツァントゥン gTsaṅ ston に，彼（ツァントゥン）がニェントゥンなどに〔「断」の教誡を〕与えられた。これらの人々より拡ったものを「男の断」[86]（Pho gcod）という。

〔一方〕キョトゥン・ソナムラマはラブドゥン Lab sgron に〔「断」の教誡を〕与えられた。そしてラブドゥンより伝承されたものは「女の断」（Mo gcod）と呼称されるのである。

＜2・3＞ マチグ・ラブドゥンマとその弟子

マチグ・ラブドゥンマ Ma cig Lab sgron ma[87] は世尊によって『聖，文殊師利根本怛特羅』[88]などを通じて予言されており，智慧のダーキニーが人間の女性の姿をとって現われたものである。そして「断」の教誡によりチベット全土を覆い尽されたのである。

マチグには幾人かの子息・子女がいたという事が種々の伝承【9 a】のうちに，いろいろに引用されているようであるが[89]，〔その子供達のうち〕トゥニュン・サムドゥップ[90] Thod smyon bSam ḥgrub に関して，あるものはマチグの息子である〔と説き〕，またあるものは〔マチグの〕孫・曾孫であると説くけれども，よりオリジナルな伝承では大部分息子であると言っているようである。ともかく〔トゥニュン・サムドゥップは〕大成就者となったため，弟子の成就者男女二十一人，娘の成就者十八人等が現われ，それらの人々からこの教誡は大いに発展することになったのである。

ラブドゥンには四人の優秀な弟子がいたといわれるが，教誡の伝統はクゴム・チュセン[91] Khu sgom Chos seṅ より伝えられて発展し，今日に至るまで衰退せずにいるのである。

後には埋蔵されていたもの（gter）[92]から取り出した「断」の教誡もいくつか現われており，〔また〕ゲルタンの人（rGyal thaṅ ba）であるサムテン・ウーセル bSam gtan Ḥod zer が瞑想でマチグと会って与えられたゲルタン流のものや，タントリスト（rtogs ldan）のナツォッグ・ランドゥル sNa tshogs Raṅ grol に与えられた口伝の甚深なる道など多くのものが広まったのである。

〔また〕勝者（rgyal ba）ツォンカパ・チェンポ Tsoṅ kha pa chen po に至尊（rje btsun）文殊師利がお与えになった文殊師利の法類の中に，黒忿怒尊の加持と「断」の教誡があり，〔それが〕ゲルワ・ウェンサパ rGyal ba dbEn sa pa から順次に伝承

され，今日我が派（ゲールク派）で大いに発展しているのはこれである。

＜2・4＞「断」（gCod）の教誡の本質

「断」の【9b】教誡の本質は，般若波羅蜜多を呪（sṅags）に相応して行ずることであり，教誡の根本は広中略の三種の『般若波羅蜜多経』と，特に『仏説仏母宝徳蔵般若波羅蜜多経』であると全ての学者が意見を同じくしている。そして特に『仏説仏母宝徳蔵般若波羅蜜多経』に

「四種の因により
善巧と勇猛とを具えた菩薩は
四魔により危害をうけ難く
動揺させられることがない。
〔すなわち〕空に住することと
有情を捨棄しないことと
そのように言われる通りに行うことと
善逝により加持されること〔とである〕[93]」

と説かれている。

ここに四種の因とは，空に住すること，有情を捨棄しないこと，そのように言われる通りに行うこと，善逝により加持されることの四種である。第一〔の空に住すること〕とは空性の見解を瞑想することであり，第二〔の有情を捨棄しないこと〕とは慈悲心と菩提心を瞑想することであり，〔以上の〕二がシ〔チェ派〕の「断」〔の教誡〕を実践する中核（dṅos gshi）である。第三〔のそのように言われる通りに行うこと〕とは道の根本である善知識に依止することであり，第四〔の善逝により加持されること〕とは帰依を重ね七支や曼荼羅を捧げることなどであり，〔以上の〕二が〔シチェ派の「断」の教誡を〕実践する準備（sṅon ḥgro）である。[94]

四魔により危害をうけ難いというのは，究竟の成果である。

善巧と勇猛とを具えた菩薩【10a】というのは，菩薩が善巧方便を実践し，輪廻と涅槃の連続を克服する勇猛を具えていることであると示されているのである。

〔さて〕呪（sṅags）といかに相応するかといえば『二儀軌』[95]に，

「一樹〔の下〕や墓場や鬼女の棲家や夜間に，或いは寂静なる郊外で瞑想することは良いことだと讃えられるべきである[96]」

と説かれていることと，

「身体の布施をして，その後にこの上なき清浄な行為が行われる[97]」

といわれることと，

「実際に眼前に，インドラのごとき阿修羅が現われたとしても，それを恐れることなく獅子のように遊行する[98]」

と説かれていることなどと相応するのである。すなわちこれらの仏説（『二儀軌』）により，〔修行を〕どこで実践するかという場所と，どのように実践するかという方法と，それを実践することによる〔異変の〕勃発（sloṅ・「起」）[99]と〔その〕退治の成果（chod tshad・「断」）などが順々に示されているからである。

〔「断」の〕見解に関して〔いえば〕，この教誡の根源が広中略三種の『般若波羅蜜多経』と『仏説仏母宝徳蔵般若波羅蜜多経』に至ることをもってするならば，中観帰謬論証派（dBu ma thal ḥgyur pa）を外れるものではなく，ラブドゥンの所説であることが確実であるものの中にもそのように説かれている。

中期【10b】において教誡を保持していた人たちはそのような解釈を知らずに種々なる付加の説を混入せしめている。またこの「断」の宗義は宗派の別なく発展したため，各宗派の宗義の傾向により見解であれ修行方法であれいろいろな説明が生じたようである。

〔結　　語〕

いかなるものに対してもいかなる分別をも有せず
あらゆるものを教化すべくあらゆる所へ遊化することにより
〔また〕あらゆるものにそれぞれに成じた無限の行をなされたことにより
あらゆるものにそれぞれが求める成就をお与えになった方，
〔すなわち〕老翁，タムパ・サンゲと称される方が
般若波羅蜜多の道の本質と
父タントラ・母タントラの究竟の教誡と
限りなき〔教え〕をチベット人にお説きになった。

あらゆる成就者たちの思想の精要
あらゆるものを集めたこの最良の薬である正法は，
生きとし生けるものすべての苦を鎮める（ドゥッゲ°ル・シチェ sDug bsṅal Shi byed）と
あらゆる学者が口を一つにして讃える。

〔またシチェの教誡は〕アティーシャ Atīça の規矩と相応するものであり
阿字に不生〔の理〕を観想する最良の教誡である。

アマ・ラブキドゥンマ A ma Lab kyi sgron ma のこの「断」（gCod）〔の教誡〕もああ，大乗教法の真髄と思われる。

数ある宗義の林の中で【11 a】
シチェ派の興起を述べたこの話を
杜鵑の鳴き声の音楽により
大いに耳の滋養とされんことを。

『一切の宗義の根元と主張とを示す正説水晶鏡』の中，シチェ派の宗義の形成を述べ終った。

〔奥　書　き〕

この版はドメーのグンルン大寺院のトゥカン Thuḥu bkvan 学舎であるタシウーパル bKra çis ḥod ḥbar より資材を出して製作された，この清らかな善の力により，勝者仏陀の教法の真髄が十方に広がらんことを。

訳　　註

1) タムパ・サンゲDam pa Saṅs rgyasの異名。SCR, 12b, 2.

2) DTNによれば，タムパ・サンゲは五度入蔵したとする。そのうち二度目と四度目と五度目の入蔵において，それぞれシチェ派の「初期の伝統」と「中期の伝統」と「後期の伝統」を伝えたことをいうものと思われる。

3) このシチェ派の章は『一切宗義』全体では第五番目の章であるが，チベット仏教に関する章としては四番目にあたるため，トゥカンは「第四章」としたのであろう。

4) (? —1117) DTN, Na, 1b, 1—22b, 7 (BA, pp.867—915); PSJZ, pp.374—375; SCR, 11a, 6—15a, 3; 83b, 5—88a, 1.

5) BA, p.868.

6) BA, p.868.

7) タムパ・サンゲの出生に関するPSJZとSCRの記述を挙げれば，次の通りである。

PSJZ, p.374: rgya gar lho phyogs be ta laḥi yul gyi tsa ra siṅ gaḥi bye brag khron paḥi gliṅ du yab nor bu len mkhan gyi brgyud pa brtson ḥgrus go chaḥi sras su ḥkhruṅs te ...

南インドのベタラBe ta la 国・チャラシンがTsa ra siṅ ga地方のクーパ・ドヴィーパKhron pahi gliṅで宝石を取りにゆくのを業とするものの子孫である父・ツゥンドゥ・ゴーチャbrTsn ḥgrus go cha の子としてお生まれになり ...

SCR, 83b, 5—84a, 1: rgya gar lho phyogs be da liḥi yul ḥkhor du gyur pa tsa ra siṅ ga / deḥi bye brag khron paḥi gliṅ shes pa skye bo dad pa can maṅ po gnas paḥi dbus su / yab nor bu rin po che len paḥi rigs can brtson ḥgrus go cha daṅ / yum dkon mchog mchog mchod pa la brtson shiṅ spos sbyor la mkhas paḥi rigs pa ba ra sa ha shes bya ba gñis kyi sras su ṅo mtshar ltas bzaṅ po daṅ bcas te ḥkhruṅs /

南インドのベダリBe da li 国・チャラシンガ地方の信心深い人々が多いクーパ・ドヴィーパで，ツゥンドゥ・ゴーチャという宝石を取りに行くカーストに属する父と，バラサハBa ra sa haという三宝を供養するに熱心で香をつくるにたけたカーストに属する母の子として，不可思議なすばらしい瑞兆とともにお生まれになった。

8) BA, p.868.

9) BA, p.868.

10) DTN, Na, 2a, 5 (BA, pp.868－9)によれば, kLu grub (Nāgārjuna), Çes rab bzaṅ po (Prajñābhadra), Yon tan ḥod (Guṇaprabha), Chos grags (Dharmakīrti), Ā ka ra si ddhi (Ākarasiddhi), Çaṅka ra (Śaṅkara), Ye çes sñiṅ po (Jñānagarbha), Thogs med (Asaṅga), Ā rya de ba (Āryadeva), Shi ba lha (Śāntideva), gSer gliṅ pa (Dharmakīrti)の十一人。cf. SCR, 84a, 1.

11) 後世のインド密教では, タントラを方便・父タントラと, 般若・母タントラに二分する。方便・父タントラは方便空を重視し, 法身が現実世界へ展開する過程を観法として組織し, 般若・母タントラは般若大楽を強調し, 行者が法身へ融合することを目的とするという(松長有慶『密教の歴史』サーラ叢書19, 平楽寺書店, 1969, pp.84－5)。

12) DTN, Na, 2a, 6 (BA, p.869)によれば, Ṅag gi dbaṅ phyug (Vāgīśvara), Bu ddha gu pta (Buddhagupta), Go dha ri, Karma ba dzra (Karmavajra), Dza ba ri pa (Javari), Ye çes shabs (Jñānapāda), KLu byaṅ (Nāgabodhi), Ā na nda (Ānanda), Kṛṣṇa pa (Kṛṣṇapāda), Ba su dha ri (Vasudhari), Padma ba dzra (Padmavajra)の十一人。cf. SCR, 84a, 6－84b, 1.

13) DTN, Na, 2a, 7 (BA, pp.869)によれば, mTsho skyes rdo rje (Saroruhavajra), I ndra bhū ti (Indrabhūti), Ḍo mbhī pa (Dombhī-pa), rDo rje dril bu pa (Vajraghaṇṭa), Ti lli pa (Tillipa), Nag poḥi shabs (Kṛṣṇapāda), sGeg pa rdo rje (Līlāvajra), Lū yi pa, Bi rū pa (Vi-rū-pa), Kun dgaḥ sñiṅ po (Ānandagarbha), Ku ku ri pa の十一人。cf. SCR, 84b, 1.

14) DTN, Na, 2a, 7－2b, 1 (BA, p.869)によれば, Sa ra ha (Saraha), Tsā rya pa (Cārya-pa), Gu ṇa ri, Tog tse pa (Koṭali), Ko ṣa pa, Ça ba ri pa (Śa-ba-ri-pa), Mai tri pa (Maitri-pa), Sā-ga-ra-si ddhi (Sāgarasiddhi), Ñi ma sbas pa (Ravigupta), Ā ka ra si ddhi (Ākarasiddhi), Ra tna ba dzra (Ratanavajra)の十一人。cf. SCR, 84b, 1.

15) DTN, Na, 2b, 1－2 (BA, p.869)によれば, Ri khrod ma (Sabarī), Dri med ma (Vimalā), Padmo shabs (Padmapādā), Ku mu da, bDe baḥi ḥbyuṅ gnas (Sukhākarā), Gaṅga bzaṅ mo (Gaṅgabhadrī), Tsi to ma (Cintā), Lakṣmī, Çiṅ lo ma (Vṛkṣaparṇī), Su kha si ddhi (Sukhasiddhi)の十一人。cf. SCR, 84b, 1－2.

16) 註13)に示したように, インドラブーティは母タントラの尊師十一人の一人に数えられており, その生存年代は9世紀と考えられる(羽田野伯猷「Tāntric Buddhismにおける人間存在」『東北大学文学部研究年報』第9, pp.320－322参照)。

17) ナーガールジュナには二人説がある。すなわち7世紀中葉に活躍した密教者と, それより500年前に存在した中観派の始祖とである (A.Govinda, Foundation of Tibetan Mysticism, E.P.Dutton & Co., Inc., 1960. p.55ff.; 寺本婉雅『ターラナータ印度仏教史』丙午出版社, 1928, p.117参照)。ここにいうナーガールジュナは註10) に示したうに, 顕教と文法学の尊師十一人の一人に教えられているところから, 後者に属するものと思われる。

18) タムパが極めて長い生涯を過したことを述べたものとして, 次の二資料の記述がある。

DTN, Ka, 19b, 4－5 (BA, p.36): brgyud pa phyi ma pa rnams kyi yi ge las / dam pas sku tshe lṅa brgya daṅ bcu bdun bshes pa na diṅ rir shi bar gçegs par ḥchad de /

後期の伝承に属する人々の記録には, タムパは御年517歳のとき, ディンリでお亡くなりになったと説いており,

SCR, 87a, 4－5: dam pa rin po che rgya bod gñis bsdoms par lo lṅa brgya daṅ sum cu bshugs te /

タムパ・リンポチェはインドとチベット両国に合わせて530年間おられ,

19) トゥカンの師であるチャンキャ・ロルペードルジェ lCaṅ kya Rol paḥi rdo rje (1717－1786)は, その著Grub paḥi mthaḥi rnam par bshag paḥi thub bstan lhun poḥi mdzes rgyan (『東大目録』№86－88), Kha, 18a, 4－5において「いずれにしても, 〔タムパが〕尊者ナーガールジュナの直弟子であることに関して〔いえば〕, 中国のある史書とも一致するようであるから本当らしい」(gaṅ ltar mgon po klu sgrub kyi dṅos slob yin pa ni rgya nag gi lo rgyus ḥgaḥ shig daṅ yaṅ mthun par snaṅ bas bden pa ḥdraḥo /)と述べている。

20) DTN, Na, 2b, 2－4 (BA, pp.869－870)によれば, 東方のセンゲーゾン Seṅ ge rolzoṅで6年, ヴァジュラーサナ rDo rje gdan (Vajrāsana)で15年, スヴァヤムブフー・チャイトヤ Raṅ byuṅ gi mchod rten (Svayambhūcaitya)で4年, クルクラ山 ri Ku ru ku lla で5年, ガンジス河畔 chu bo Gaṅgaḥi ḥgram で5年, 東インドの森で5年, 南インドの墓場で5年, シータヴァナ bSil baḥi

tshal（Śītavana）の墓場で7年，再びヴァジュラーサナで3年，アービーラmNon par dgaḥ ba（Ābhīra）の国で10年。

21) DTN, Na, 2b, 4－5（BA, p. 870）によれば，ḥJam dbyaṅs（Mañjughoṣa），sPyan ras gzigs（Avalokiteśvara），rDo rje ḥdzin（Vajradhara），sGrol ma（Tārā），Kha-sa-rpa-ṇa（Khasarpaṇa），gÇin rje gçed（Yamāntaka），Raṅ byuṅ rgyal mo（Ekajatī），sGrib sel（Sarvanīraṇa-viśkambhī），ḥOd zer can（Mārīci），Kun bzaṅs（Samantabhadra），Bā rā hī（Vārāhī），Mi g-yo ba（Acala）の十二神。

22) 以下に述べられる超能力は，原文ではmig sman（眼薬），rkaṅ mgyogs（俊足），ril bu（丸薬），sa ḥog（地下），gnod spyin mo（ヤクシー），ral gri（刀），mkhaḥ spyod（空行）という単語が羅列されているが，ルーリッヒの英訳（BA, p.870）を参考にして補って訳した。cf. C. Das, Tibetan English Dictionary, Calcutta, 1902, pp. 359－360.

23) SCR, 84b, 4－5に「〔地下の宝を捜し出す〕眼薬や，〔一日に百由旬を駆けることの出来る〕俊足などの通常の成就，すなわち空を駆けることと，最高の成就である大智慧の境地を得た様子を示して・・・」（mig sman daṅ rkaṅ mgyogs sogs thun moṅ gi dṅos grub mkhaḥ spyod daṅ／mchog gi dṅos grub ye çes chen poḥi sa brñes paḥi tshul bstan te／）と述べられている。すなわちタムパは俊足や空行といった通俗的な「通常の成就」と，大智慧の地を得た「最高の成就」の二種の成就を得たのである。cf. PSJZ, p. 374.

24) 本書においても，タムパ（3a, 1 etc.），タムパ・サンゲ（8b, 2），パ・タムパ・サンゲ（2b, 1－2），タムパ・ギャガル（1b, 1）などの呼称が使われており，これ以外にもタムパ・リンポチェ Dam pa Rin po che（SCR, 11a, 6 etc.）ともいわれる。またインドではカマラシーラKamalaçīlaとも呼ばれた（SCR, 12b, 2）。

25) 序論Ⅲ，1参照。cf. DTN, Na, 2b, 7－3a, 4（BA, pp. 870－871）；SCR, 84b, 6－85a, 5.
なおタムパ・サンゲの入蔵については，七度説もあったらしく，gShon nu dpal はDTN, Ka, 18b, 3－4（BA, pp. 35－6）において「幾人かの虚偽好きなもの〔の説明〕によれば，タムパ・サンゲはチベットに七度来られ，最初〔のとき〕はチベットは水で一杯であった。二度目のときには水はひき，果樹や林があり，またわずかの牡鹿と野生馬がいたなどといわれているが，・・・」（de la bcos ma la dgaḥ ba kha cig gis dam pa saṅs rgyas kyis bod du lan bdun byon paḥi daṅ po bod chu yis gaṅ／gñis pa la chu ḥbriṅ shiṅ rtsi çiṅ nags tshal daṅ ça rkyaṅ tho re ba yod zer ba la sogs yod mod kyi／・・・）と述べたあと，それを虚構であるとしている。またSun pa mkhan poは七度説に疑念を呈したのち，三度説を唱えている（PSJZ, p. 375）。

26) RM, p. 12によれば1101年。DNT, Na, 21b, 3－5（BA, p. 912）によれば，タムパは12年間の中国滞在ののち1097年にディンリDiṅ riに着いたとされていることから，タムパがチベットから中国に行ったのは1086年となる。

27) DTN, Na, 3a, 2（BA, p. 871）に「二度目はカシミールを発ってガリーに来られ・・・」（gñis pa ni kha che nas ḥthon te mṅaḥ ris su byon nas…）とあることから，「初期の伝統」とは，タムパの二度目の入蔵の際に伝えられたものと考えられる。
なお「初期の伝統」については，DTN, Na, 3a, 7－3b, 3（BA, pp. 871－872）；PSJZ, p. 377；SCR, 85b, 2参照。

28) DTN, Na, 3a, 3－4（BA, p. 871）に「四度目はシャウ・タッグゴーに来られニェルに滞在され，そこで母の罪を清めてからウ地方へ行かれ，マやソなどを利益された」（bshi pa ni ça ḥug stag sgo la bgon nas gñal du bshugs te／yum gyi sgrib pa sbyaṅs nas phyis dbus kyi phyogs su phebs nas rma so la sogs paḥi don mdzad do／）とあることから，「中期の伝統」は，タムパの四度目の入蔵の際に伝えられたものと考えられる。
なお「中期の伝統」については，DTN, Na, 3b, 3－18b, 2（BA, pp. 872－905）；PSJZ, pp. 377－378；SCR, 85b, 2－86a, 4参照。

29) （1055－？，1073年タムパに会う）DTN, Na, 3b, 5－4b, 3（BA, pp. 872－874）；SCR, 85b, 3－4.

30) （1062－1128）DTN, Na, 5b, 2－7b, 7（BA, pp. 872－874）；SCR, 85b, 4－6.

31) （？－1119）DTN, Na, 14a, 7－17b, 5（BA, pp. 896－904）；SCR, 85b, 6－86a, 4.

32) DTN, Na, 3a, 4（BA, p. 871）に「五度目は，それから中国へ行かれ，当地に十二年間滞在してからディンリに来られたのである」（lṅa pa ni／de nas rgya nag du byon nas der lo bcu gñis bshugs nas slad kyis diṅ rir phebs plḥo／）とあり，またDTN, Na, 21b, 6－7（BA, p. 912）に「そ

のように今回のディンリ訪問は五度目であるといわれている。これ以後に〔タムパが〕説かれた諸法に関して後期の伝統といわれるのである」(de ltar diṅ rir phebs pa ḥdi lan lṅa ba shes bya ste / ḥdi man chad du gsuṅs paḥi chos rnams la brgyud pa phyi ma shes byaḥo //)とあることから，「後期の伝統」とは，タムパの五度目の入蔵の際にディンリにおいて伝えられたものである。

なおタムパのディンリ訪問の年は，DTNによれば１０９７年であり，RM，p．１２によれば１１１３年である。

33) DTN，Na，２２a，５－２３a，２(BA，pp．９１３－９１５)；SCR，８６a，５－６．

34) (１０６２－１１２４，なお１１００年から１１１７年までタムパに師事) DTN，Na，２５a，６－２６b，６(BA，pp．９２０－９２３)；SCR，86b，1－87a，1．

35) (１０７７－１１５８) DTN，Na，２６b，６－２９a，７(BA，pp．９２３－９２９)．

36) (１１２７－１２１７) DTN，Na，２９b，１－３２b，６(BA，pp．９２９－９３８)．

37) DTN，Na，３３b，１－３７a，６(BA，pp．９３９－９４８)；SCR，８７a，２－４；PSJZ p．３７８はいずれもクンガーの法の伝承者として，ログ・シェラップウ－Rog Çes rab ḥod (１１６６－１２４４)を挙げている。ここにいうログ・シェラップセンゲと同一人物かどうかは不明。

38) (１１７１－１２４５) DTN，Na，３７a，６－３９b，２(BA，pp．９４９－９５４)．

39) 註 27) 参照。

40) Cf．DTN，Na，５b，１－２(BA，p．８７６)；PSJZ，p．３７８

41) Cf．DTN，Na，９b，６－１０b，１(BA，pp．８８６－８８８)；PSJZ p．378．

42) タムパの母タントラの十一人の尊師のうちの一人。註 13) 参照。

43) (１１８６－１２４７) DTN，４０a，２－４１b，1(BA，pp．９５５－９５８)．

44) Cf．DTN，Na，１５b，４－１６a，６(BA，pp．８９９－９０１)；PSJZ，p．３７８．

45) Tōhoku，№３７８６；TTP，№５１８４．

46) 『現観荘厳論』は，さとりの段階に応じて八種の現観を八章に配して説いたものである。すなわち(1)一切相智性，(2)道智性，(3)一切智性，(4)一切相現等覚，(5)頂現観，(6)次第現観，(7)一刹那現観，(8)法身である(水野弘元監修『新・仏典解題事典』春秋社，１９６６，p．１５６)。八主要項目とは上記の八種の現観を指すものと思われる。

47) Tōhoku，№１３；TTP，№７３５．

48) 『現観荘厳論』においては，その第一章と第四章とが最も難解であり，かつ最も重要な箇所であるとされる(長尾雅人『蒙古学問寺』全国書房，１９４７，p．７１)。

49) (１０７８－１１５２) DTN，Na，１６a，５－１７b，６(BA，pp.901－904)．

50) Cf．DTN，Na，１８b，２－２１a，３(BA，pp．９０５－９１０)；PSJZ，p.378．

51) (１０１２－１０９０)詳しくはダパ・クンシェチェン Grva pa nṄon ces canという。DTN，Kha，１４b，１－１５a，５(BA，pp．９４－９７)；SCR，３７a，５－４２b，５．

52) Tōhoku，№２３１５ ； TTP，№３１５４．

53) Tōhoku，№２３１６ ； TTP，№３１５５．

54) Tōhoku，№２３２３ ； TTP，№３１６２．

55) Tōhoku，№２３１７ ； TTP，№３１５６．

56) Tōhoku，№２３１８ ； TTP，№３１５７．

57) Tōhoku，№２３２１ ； TTP，№３１６０．

58) Tōhoku，№２３１９ ； TTP，№３１５８．

59) Tōhoku，№２３２２ ； TTP，№３１６１．

60) Tōhoku，№２３２０ ； TTP，№３１５９．

61) (１０４６－ ?)DTN，Na，１８b，７－２１a，１(BA，pp．９０６－９１０)．

62) Tōhoku，№３６０，TTP，№２．

63) Cf．DTN，Na，２１a，３－７(BA．p．９１１)；PSJZ，p．３７８．

64) 『聖妙吉祥真実名経』の注訳書と思われる。

65) Tōhoku，№２１，５３１；TTP，№１６０．

66) Tōhoku，№４１７；TTP，№１０．Hevajratantraのことである。

67) Cf．DTN，Na，４９a，５－５０a，４(BA，pp．９７６－９７９)；PSJZ，p．３７９．

68) SCR，９１b，２－４には，この後期の諸法が「無垢なる大印契の滴の実践」と名付けられる由来を，次のように述べている。

gnas lṅa rig paḥi paṇḍi ta dha rmma çrīs spyir bkaḥ gter gyi chos thams cad la phyag bshes bsam gyis mi khyab pa daṅ / shi byed gcod yul gyi bstan pa la ḥaṅ da ltaḥi bar du dbaṅ luṅ gi zam ma chad pas bkaḥ drin che ba yin ciṅ / shi byed sṅa phyi bar gsum phyogs gcig tu bsgrigs paḥi dbaṅ chog bklags grub pa las / shi byed kyi bkaḥ babs phyi ma dri med thig paḥi phyag bshes shes byaṅ chub sems dpaḥ kun dgaḥi lugs la /

五学問に通じた学者ダルマ・シュリーは一般の仏説・埋蔵経すべての法を，考えられない程実践し，またシチェや「断境」の教法に関しても，今日まで灌頂や許可を断絶させずに伝え,大へんな恩恵を施している。そしてシチェの前・中・後の三期の流れを一つにまとめたdBaṅ chog bklags grub pa において，シチェ派の後期〔の伝統〕に特有なものは「無垢なる大印契の滴の実践」といわれる菩薩クンガーの流派であり・・・

69) タムパがマイトリパの直接の弟子であったとすれば，タントリストであったのが当然であり，シチェ派の教義はタントラそのものを内容としていたと思われる。にもかかわらず後期の伝統の教誡の本質を，「断」説と同じように密呪と「相応する」般若波羅蜜多であるとするのは不自然である。序論Ⅲ，2で述べたように，マチグ・ラブドゥンに由来する「断」説の正統性の拠りどころとしてシチェ派の教義が利用され，事情が定まったのちにこのような表現が取られるようになったものと考えられる。

70) Tōhoku, №2236；TTP, №3080. 著者はgÑis su med paḥi rdo rje。

71) F.D. Lessing & A. Wayman, Mkhas Grub Rje's Fundamentals of the Buddhist Tantras, Mouton, 1968, p. 228 ff.；北村太計夫「金剛頂経に於ける「印」の一考察」『密教学研究』第2，3号参照。

72) DTN, Na, 28a, 7－28b, 1（BA, pp. 927）には「それから一年間〔パッァップはクンガーより〕「黒い教え」をうけたまわった。そして質問により仔細〔な疑問〕を断ち，それを文字にしたものなどを『タティッグ』と名づけた」(de nas lo gcig gi bar du nag khrid rnams shus ／ dris bas ḥphra bcad de yi ge la btab pa rnams la ḥphra tig tu btags ／）とある。

73) DTN, Na, 31a, 5－6（BA, p. 934）には「一年の間〔テネーは〕五道の教えを守り，数々の灌頂をうけた。その間〔テネーは〕尊師（パッァップ）のお言葉すべてを筆記して，それを『シブモ・ダルツァッグ』と名づけた」（lo gcig tu lam lṅaḥi khrid bskyaṅs ／ dbaṅ rnams shus ／ deḥi bar du bla maḥi gsuṅ thams cad zin bris su byas te shib mo dar tshags su btags ／）とある。

74) DTN, Na, 32a, 4（BA, p. 936）には「〔テネーは〕その生涯の大部分を隠遁生活で過され，タムパのお言葉（説法）に関する多くの『シェブム』を書いた」（phal cher sku mtshams mdzad de dam paḥi gsuṅ la bcad ḥbum maṅ du brtsams ／）とあり，またDTN, Na, 39b, 1（BA, p. 954）には「〔シグポは〕弟子たちに法の雨を降らせ，大小の『道次第』や『シェブム』などの著作も数多くなされた」（slob ma ruams la chos kyi char bab ／ lam rim che chuṅ daṅ bçad ḥbum la sogs paḥi rtsom pa yaṅ maṅ du mdzad ／）とある。

75) SCR, 33a, 3－4には「般若波羅蜜多の本義を実践する方便，すなわちこの正法・魔の断境説を・・・」（çes rab kyi pha rol tu phyin paḥi don ñams su len paḥi thabs ／ dam chos bdud kyi gcod yul ḥdi la・・・）とあり，ここにシチェ派の教理の真髄として示されているものは，断境説の内容そのものであることが判る。シチェ派の教義が断境説の正統性の拠りどころとして利用された結果，このように表現されたのであろう。

76) ここに般若波羅蜜多の道を実践する教誡の伝承として示された釈迦ー弥勒ー無着ー世親ーアーリヤデーヴァという系譜は，『パクサムジョンサン』（p. 376）によれば，断境説に関する四伝統の一つである「子伝」（sras brgyud）に相当する。序論Ⅲ，2参照。

77) SCR, 87a, 4－87b, 4によれば，タムパが臨終の際ディンリの人々に説いた教誡である。すなわち，

・・・gshan yaṅ bu slob so sos sñun dris paḥi tshe bu brgyad cu sogs kun la shal gdams re re gsuṅ shiṅ ／ diṅ ri ba rnams la diṅ ri brgyad cuḥi shal gdams gsuṅs paḥi mthar ／ gnas yul shiṅ skyoṅ gi ḍā kki nī du maḥi bsu ba daṅ bcas te dag pa mkhaḥ spyod du gçegs par gyur to //

また弟子たちがそれぞれ見舞いに訪れた際には，八十人の弟子たちすべてに，口述の教誡をそれぞれにお話しになり，ディンリの人たちには『ディンリ・ギェチュ』の口述の教誡をお説きになったのちに，土地神であるたくさんのダーキニーの迎えをうけて清浄なる天に赴かれたのである。

78) （1291－1366）DTN, Na, 9a, 1－9b, 6（BA, pp. 884－886）.

79) DTN, Na, 9a, 6（BA, p. 885）.

80) rje rin po che（尊者宝）はツォンカパ（1357－1419）に対する最も一般的な尊称である（長尾雅人『西蔵仏教研究』岩波書店，1954。p. 48）。

81) 詳しくはトゥンドゥプ・リンチェンパDon grub rin chen pa という。長尾雅人『西蔵仏教研究』p. 46，49によれば，トゥンドゥプはツォンカパを両親よりもらいうけ，六歳頃から秘密金剛乗を教えた。ツォンカパの比丘としての実名であるローサン・タクパbLo bzaṅ grags pa もトゥンドゥプの命名になるもので，ツォンカパにとっては大恩あるラマであり，後年になっても種々の著作をなすに当って，このラマに敬礼をなしているという。

なおDTN, Ba, 6b, 1（BA, p. 1073）には「〔ツォンカパは〕幼い時に大

善知識のトゥンドゥブ・リンチェンという方により，波羅提木叉と密呪の門において熟達なされて・・・」（gshon paḥi dus su dge baḥi gçes gñen chen po don grub rin chen shes bya bas so so thar pa daṅ snags kyi sgor smin par mdzad nas ／）とある。

82) Tōhoku, №521；TTP, №222.

83) Cf. DTN, Pa, 1b, 1－2a, 4（BA, pp. 980－981）；SCR, 2b, 2－4a, 3.

84) YPT, 38b, 5－41a, 5によって四魔の内容を述べると次の通りである。第一は有碍の魔（thogs bcas bdud）であり，眼・耳・鼻・舌・身の対象である色・声・香・味・触に関して，好悪等の妄分別をなすこと。第二は無碍の魔（thogs med bdud）であり，五官の対象にはならないが意の対象となる神（lha）と魔（ḥdre）に対して，それぞれ好悪の妄分別をなすこと。第三は喜楽の魔（dgaḥ brod kyi bdud）であり，世間的な富や名誉を得ること，加持神の姿を見ること，鬼魔や病痛を鎮めること，神通力を得ること等に対して喜び（dgaḥ）楽しんで（brod）慢心をおこすこと。第四は執着の魔（sñems byed kyi bdud）である。前述の三種の魔の根本であり，一切の対象にして好悪・善悪等の妄分別をおこす我執（bdag ḥdzin）をいう。

85) DTN, Na, 2b, 2－3（BA, p. 871）に「三度目はネパールから商人とつれ立って来られた際，ヤルルンのマンラ・セルポと会い，彼と共にツァンに〔行き，当地で〕キョ・ソナムラマとマンラ・セルポに「断」の教誡を多く与えられたのである」（gsum pa ni ／ bal po nas tshoṅ pa daṅ ḥgrogs te byon pa na yar kluṅs kyi rmaṅ ra ser po daṅ mjal te de daṅ ḥgrogs nas gtsaṅ du skyo bsod nams bla ma daṅ rmaṅ ra ser po la gcod kyi gdams pa maṅ du gnaṅ no／）とある。cf. DTN, Pa, 8a, 5－9b, 6（BA, pp. 996－999）；SCR, 12a, 2－14a, 4.

86) 「男の断」説と「女の断」説については，序論Ⅲ，2参照。

87) マチグ・ラブドゥンマの生没年については，序論Ⅱ参照。DTN, Pa, 2b, 2－3a, 2（BA, pp. 983－984）；SCR, 21a, 3－37a, 4.

88) Tōhoku, №543；TTP, №162. cf. SDY, 3b, 3－4；9a, 6－9b, 2.

89) DTN, Pa, 2b, 5－6（BA, p. 983）では，息子としてニンポ・ドゥブパsÑiṅ po grub paとドゥブチュンGrub chuṅとヤンドゥブYaṅ grubの三人を，娘としてコンチャムKoṅ lcamとラチャムLa lcamの二人を挙げる。
PSJZ, pp. 375では，長男をニンポ・ドゥブチェsÑiṅ po grub cheとする以外はDTNと同じ。
SCR, 27a, 5－27b, 4では，一応息子としてドゥブペーGrub be とドゥブチュンGrub chuṅとヤンドゥブ，娘としてコンチャムKoṅ lcamとラチャム La lcamを挙げたのち，確かなものはゲルワ・トゥンドゥブrGyal ba don grubとトゥニュン・サムドゥブThod smyon bsam grubとチャムモ・ラドゥlCam mo la ḥdusの三人であるとする。

90) トゥニュン・サムドゥブは，DTN, Pa, 3b, 5－4a, 5（BA, pp. 986－987）およびPSJZ, p. 376ではマチグの曾孫であるとされ，SCR, 34a, 4－36b, 6によればマチグの息子であるとされる。

91) DTN, Pa, 5a, 1－5（BA, pp. 988－989）；SCR, 50a, 1－52b, 6.

92) 序論Ⅲ，2参照。cf. SDY, 3b, 4－6a, 3.

93) TTP, №735, Vol. 21, 193. 2. 7－8；Prajñā-pāramitā-ratna-guṇa-saṃcaya-gāthā, Ed, by E. Obermiller, Leningrad, 1937（Bibliotheca Buddhica XXIX）, p. 99；大正新脩大蔵経№229，法賢訳『仏説仏母宝徳蔵般若波羅蜜多経』8巻683頁上。

94) 第二部Ⅱ註 11）参照。

95) Hevajratantraのことである。

96) TTP, №10, Vol. 1, 212. 3. 6－7；D. L. Snellgrove, The Hevajratantra, London, 1959, Vol. Ⅱ, pp. 18－19；大正新脩大蔵経№892，法護訳『大悲空智金剛大教王儀軌経』18巻591頁上。

97) TTP, №10, Vol. 1, 212. 4. 7；The Hevajrantra, Vol. Ⅱ, pp. 20－21；大正蔵18巻591頁下。

98) TTP, №10, Vol. 1, 212. 5. 3；The Hevajratantra, Vol. Ⅱ, pp. 20－21；大正蔵18巻592頁上。

99) 序論Ⅳ，3参照。cf. YPT, 78a, 3－79b, 2.

Ⅱ 『般若波羅蜜多の行境における獅子の遊戯』訳

〔 序 〕[1]

【1b】見解の上弦の月の森において
瞑想の獣（兎）を縛るために
実践の白光の矢を
果しなき空の彼方に射たり。
かくの如き狩人を世に出現させる
文殊 ḥJam dbyaṅs，提婆 ḥPhags pa lha あるいは竜〔樹〕kLu の
領悟〔から〕生まれた正しきものの印 Dam paḥi rGya の中に
象は群れ集りて舞う gar。
彼が説いた Lab 区画を出て
欲神の遊戯によりて暗まされた燈 sgron〔にもかかわらず〕
のりこえた幻の舞者 rgyu maḥi gar mkhan は
大自在天の手の頂に取られたり。
かの般若の日の光を飲んで
喜ぶ白蓮華 Padma dkar po の友である
ハルメンダ Ha lu man da？の風の如き修習力〔により〕
無智の空の雲を払う。
『般若波羅蜜多の行境における獅子の遊戯』と名づけられる
本書の起源と真髄である。

＜1＞ 「断」の教誡の伝統

仏陀 sTon pa が文珠 ḥJam dbyaṅs に，文珠がアーリヤデーヴァ Āryadeva に，アーリヤデーヴァがタムパ・ギャガルワ Dam pa rGya gar ba に，タムパ・ギャガルワがラブキドゥンマ Lab kyi sgron ma に〔「断」の教誡をお与えになった〕。

さてこの中央チベットの南にあたる地方にタシーパ・トンツェームンパ bKra çis pa mthoṅ tshad smon pa[2] という不思議な僧院が山腹に建っており，その山頂で加持を行ったところ，ドジェ・ツゥンモ rDo rje btsun mo[3] が蓮華の器に化けてやって来た。〔そして〕誓詞 dam tshig の飲みものに満ちたこの聚輪〔供養会〕gaṇackra[4] に印度の成就者八十四人が〔現われるのを〕優れた人々は実際に〔見た〕。〔一方〕一般の人々もそれと同数の鷲が集って喜び騒ぐのを目の当たりに見たことにより「霊鷲山」と後にいわれるようになった禅房において，私の尊者である「幻の舞者」rgyu maḥi gar mkhan すなわちアヴァドゥーティー Avadhūtī が行を護持していた。 その前に，〔ラブドゥンが〕完成したすばらしき絵〔に見られるような〕心を満足させるすべてのものの中でも最高であるとされる娘になってやって来た。〔そして〕私はラブキドゥンマですと仰るのを〔私の尊者が〕お聞きになり不壊【2a】の信心を〔起して〕陶酔したとき，ラブドゥンマは次のようにいわれた。[5]

「善男子よ。般若波羅蜜多の甚深なる行を実践しようと欲するなら，次のように学ぶべきである。

〔すなわち〕界 dbyiṅs と知 rig pa を融合するならば金剛の如くなる。

蘊 phuṅ po を食物として布施するならば虚幻の界において清浄となる。

能取所取 gzuṅ ḥdzin の執着 sñems の縄を断つならば勇者の如く進み行く。

タムパ・ギャガルワが私に説かれたことはこの三句[6]だけである。この〔三句に〕よって私は一切如来の行境にすっかり入ったのである」

と仰ったはてに禅定に加持せられて無二に没入したのである。

そして尊者（アヴァドゥーティー）も私を〔この教誡を実践する〕器として相応しい者であるとお考えになり，誠に秘密のやり方によって詳細に示し，後に〔この教誡を〕文字の類にしなさいという許可も与えられたのである。

＜2＞ 「断」の教誡の真髄

〔「断」の教誡の真髄は〕界と知を融合する〔すなわち〕金剛の如き禅定（金剛禅定）rdo rje lta buḥi tiṅ ṅe ḥdzin により見解の波浪を滅すること。

蘊を食物として布施する〔すなわち〕虚幻の如き禅定（虚幻禅定）sgyu ma buḥi tiṅ ṅe ḥdzin により瞑想の旗幟を挙げること。

能取所取の執着の縄を断つ〔すなわち〕勇者の如く行く禅定（勇行禅定）dpaḥ bar ḥgro baḥi tiṅ ṅe ḥdzin により行の彼方に渡ることの三である。

＜2・1＞ 金剛禅定

第一〔の金剛禅定〕[7] に関していえば次の通りである。

煩悩の垢魔 dri ma bdud といわれるものに関して〔いえば〕，それも我と法とに執着することにより増大するものである。それ（垢魔）を断つのは我と法を本性は空であると見ることによってである。何によって〔このように〕説くかといえば，界と知を融合するならば金剛の如くになるといわれるこのことによってであり，それを了解するものは諸仏の行境において獅子が遊戯する〔が如くである〕からである。

〔さて〕これに関して「魔の行境」[8] bdud kyi sPyod yul といわれる教誡をあなた方に示すのであると，最初に尊師が伝授（ṅo sprod）の時に仰った。〔そこで〕弟子〔たち〕は立ち上って胸元で合掌し，指先に眼を留めて一心に三宝に帰依する。〔すると〕二種の菩提心[9]が生じ，〔自分の〕尊師の頭頂と〔歴代の〕尊師方〔の頭頂〕がちょうど真珠の環が重なり【2b】つつ日光に輝けるが如くに連なっている〔中に〕自分の頭頂も結びつけられるのである。そして三輪無分別[10]の精神で七支[11]をもって供養し〔次のように祈願する〕。

「過失なく功徳を円満しておられるから第二の帰依の対象を求めはしません。あなた唯一人。慈悲によりお捉え下さい，釈迦牟尼よ。加持して下さい，浄飯王の子よ。

一切諸仏の智身であられるから第二の尊師を求めはしません。あなた唯一人。慈悲によりお捉え下さい，神中の神たる語自在よ。加持して下さい，尊者・妙音よ。

すべての秘密の埋蔵物を開くのはあなたであられるから第二の親属を求めはしません。あなた唯一人。慈悲によりお捉え下さい，バラモンのトゥトップグン mThu stob mgon よ。加持して下さい，高貴なる提婆よ。

この（「断」の）教えに関しては釈迦と全く同じであられるから第二の救主を求めはしません。あなた唯一人。慈悲によりお捉え下さい，カマラシーラ Kamalaçīla[12] よ。加持して下さい，タムパ・ギャガルワ Dam pa rGya gar ba よ。

三世の一切諸仏の母であられるから第二の母を求めはしません。あなた唯一人。慈悲によりお捉え下さい，智慧のダーキマ Ye çes Ḍākima よ。加持して下さい，〔ダーキマの〕[13]変化身たるラブドゥン Lab sgron よ。

無尽の荘厳をめぐらしたる倉であられるから第二の倉を求めはしません。あなた唯一人。慈悲によりお捉え下さい，アヴァドゥーティーパ Avadhūtīpa よ。加持して下さい，ドゥプチェン・ツンモチェン Grub chen btsun mo can よ。

一切を慈眼[14]により視られる方であられるから第二の先生を求めはしません。あなた唯一人。慈悲によりお捉え下さい，パドマカルポ Padma dkar po 様。加持して下さい，大学者よ。

一切法を知る主はあなたであられるから第二の学者を求めはしません。あなた唯一人。慈悲によりお捉え下さい，ハワン・ロドゥー Lha dbaṅ blo gros 様。加持して下さい，スムデン・ドジェジン gSum ldan rDo rje hdzin よ。

一切諸仏の力の魂はあなたであられるから第二の大力者を求めはしません。あなた唯一人。慈悲によりお捉え下さい，ガクワン・ナムゲル Ṅag dbaṅ rnam rgyal[15] 様。加持して下さい，ドゥジョム・ドジェ bDud ḥjoms rdo rje 様」

と祈願したことにより尊師方が白い甘露として〔自分の体内に〕ドロッと溶け込んで，身体の内外すべてに遍満し，身口意の一切の罪悪・障碍・疾病・魔碍を清浄ならしめることにより，身体は磨き上げられた水晶玉の如くになったと思念（bsam）するのである。

それから上の「息」（rluṅ）を押しさげ下の「息」を引き上げることにより，身体全体にあたかも白芥子における脂肪油の如く遍満している「知」（rig pa）あるいは「心」（sems）といわれるものが，鏡に呼気が付く如くに集まり[16]，頭頂の穴から上方に空寂のうちに昇華して出る。そこでパッ（phaṭaḥ）[17]〔という呪句を唱えることにより，心を〕空界と全く差別なく融合した界において，ゆったりと寛ぎ重荷を下した状態でおくのである。

〔一方〕[18]身体を，三宝〔をはじめとする〕敬うべきすべての客の御前ではこの上なき供物〔と思念し〕，恩人としての有徳の客の御前では〔その身体を〕普賢菩薩の雲の如き供養物〔と思念し〕，災難を受け憎むべき客である八部鬼衆の前では〔その身体を〕肉・骨・感覚器官・臓腑の山と，いかに飲みいかに食べても尽きることのない血・脂肪・脳髄の海〔と思念し〕，また慈しむべき六道の客の前では〔その身体を〕家・衣服・蒲団・食物など享受される一切のものとなったものと思念して〔献じ〕[19]その善行により菩提に至るのである。すなわち前者は智慧〔資糧〕を，後者は福徳資糧[20]を成就するのである。

＜2・2＞ 虚幻禅定

第二〔の虚幻禅定〕に関して言えば次の通りである。

蘊を食物として供するならば虚幻の界において清浄となる。常に前〔述〕の如く帰依し発心し加持を願うの三をなすことから，身と心を切り離す。〔そして心を〕すべての見解の因と瞑想の因から切り離し，思索の因と作意一切から遠離した界において，常にゆったりと重荷を下した状態におくのである。

その時には無分別の知を空に遣ったのであるから，無我の蘊は地上に捨てられたことになる。それゆえこの時から身体の心配は心によってなされず，心の所依は身体に託されない。〔そこで〕無我の身体を土や石の如く捨ておき，心を空無なる虚空の如く所依なくありのままに置くのである。〔それゆえ〕三世【3b】の分別あるいは作意という念別〔など〕何が起ろうともそれに従うことなく，パッと〔いう呪句を〕唱えて〔分別・作意を〕一刹那に砕き自然に放棄することにより，一切の現象はぼんやりと暗い幻ほど〔のもの〕になってしまうのである。

＜2・3＞ 勇行禅定

第三〔の勇行禅定〕[21]については，断（gcod）と勃発（lhoṅs・「起」）と退治の成果（tshar tshad・「終」）と退転の克服（log gnon）の四〔によって述べよう〕。

＜2・3・1＞ 断

能取所取の執着の縄を断つならば勇者の如く行くようになるというこれ（勇行禅定）は，瞑想において功徳を引き出すために修行に入ることであり[22]，非常に危険な土地に赴いて「天の扉を開く」[23]（nam mkhaḥ sgo ḥbyed）実践に従事することである。

＜2・3・2＞ 勃 発（「起」）

第二〔の勃発〕[24]とは夢の勃発（rmi lam lhoṅs pa）と異変の勃発（cho ḥphrul lhoṅs pa）と病の勃発（na tsha lhoṅs pa）とである。これらは何も起らなければ鬼魔の威力は小さいから，別の危険な土地へ移らなければならないのである。異変が現われれば〔鬼魔が〕起っているのであるから，まさにその場所に止って〔「天の扉を開く」〕実践に励まなければならないのである。〔異変などが〕起っている限りは別の危険な土地に移ってはならない。勃発した異変に恐れをなして他〔の土地〕に移るならば，〔それは〕鬼魔の手にわたったも同然である。

＜2・3・3＞ 退治の成果（「終」）

第三〔の退治の成果〕[25]とは，前〔述〕のかの勃発せる異変を眠り[26]（ñal）により鎮めるならば〔鬼魔は〕退治されたのであるから，別の危険な土地に移ることが許されるのである。

＜2・3・4＞ 退転の克服

第四〔の退転の克服〕とは，疾病を断つこと（nad gcod），鬼魔を断つこと（gdon gcod），恐怖を断つこと（gñan gcod），死体〔に対する恐怖〕を断つこと（ro gcod），不浄なるものを断つこと（mi gtsaṅ baḥi gcod），執着を断つこと（sñems gcod）である。

＜2・3・4・1＞ 疾病を断つこと

第一の疾病を断つこと[27]とは，伝染病の〔流行している〕土地に行き，パッという〔呪句を唱える〕ことにより身と心を二つに分け，病の前へしり込みせずに進み出る。そして対面の病を自分の鼻孔から体内に吹い込む。そしてその病を自分の中央動脈（rtsa dbu ma）の中に入れたことにより，病を空寂のうちに昇華してしまったと思念し，病に対する逃避も恐怖もなくなるのである。

＜2・3・4・2＞ 鬼魔を断つこと

第二の鬼魔を断つこととは，鬼魔が群っている土地の真只中に行き，「あなたが〔こちらへ〕来ることはお疲れでしょうから，私が〔そちらへ〕行ってもいい」と言い，〔更に〕「私の心はあなたは無論のこと私自身でさえも見ることは出来ない。〔だから〕肉と血の皮袋であるこの色身をあなたに布施してもいい。肉を欲するなら肉を持って行きなさい。血を欲するなら血を【4a】持って行きなさい。急ぐなら生で食べなさい。急がないなら煮て食べなさい。満腹するまで食べなさい。持てるだけ持って行きなさい」と言って，何も執着することなく重荷を下すが如くに〔身体を鬼魔に〕与えるのである。〔もしも食物として与える蘊が〕粗ければ，〔自分の〕心を智慧の火に変えることにより，それ（身体）を焼き灰ほどに〔して〕残らず〔鬼魔に〕与えるのである。

＜2・3・4・3＞ 恐怖を断つこと

第三の恐怖を断つこととは，〔まず〕非常に危険な所へ行く。そして〔そこに住む神鬼を〕上から押え付けることが重要である。すなわち湖であるなら〔その〕高い場所へ行き，沼である場合も〔その〕高い場所へ行き，大岩〔であれば〕その上で，泉〔であれば〕石板で蓋をしたその上で，樹〔であれば〕その枝を折り〔自分の〕下に入れその上で，前述の如く身と心を切り離す。切り離された身体は朽ちて腐り，〔その〕腐臭は有毒にして強烈であることにより，そこに住む神鬼は制圧されてしまうと思念する。

＜2・3・4・4＞ 死体〔に対する恐怖〕を断つこと

第四の死体〔に対する恐怖〕を断つこととは，いかなる種類の死体であろうともしり込みせず，身と心を二つに切り離し，〔死体と〕出くわして妄分別が少なければ〔その〕肉の一片を

切り取って食べる〔ことも出来る〕。また頭髪を少しばかり抜き取って懐に入れる〔ことも出来る〕。それから〔死体を〕気楽に担いですきな所に運ぶ〔ことが出来る〕のである。

＜2・3・4・5＞　不浄なるものを断つこと

第五の不浄なるものを断つこととは[28]，不浄なるものがいかなるものであろうとも，身と心を切り離してしり込みしないのである。〔そして〕何であろうがその不浄なるものを〔自分の〕下に入れるのである。かつて不浄なるものに害を受けたとしても，再びその土地に行き，身と心を切り離して〔その不浄なるものを自分の〕下に入れて眠るのである。

＜2・3・4・6＞　執着を断つこと

第六の執着を断つこととは，対象が何であろうとも〔それに対して〕躊躇したり出来ないと執着するのは，自ら〔自分の〕上に恐怖を背負っているのであるから，魔碍に脅かされれば再び恐怖の土地に行き，伝染病に脅かされれば再び病の土地に行くなどのこと〔により解決されるのである〕。もし〔そのようなものに〕危惧を抱かなければ，執着を起さず正しい道に入っていることになるのである。

〔　結　　語　〕

〔本書は〕行の手引たるすべての乳の海の精華たる熟酥として，ここに造られたのである。〔また本書は〕二執の風に傷つけられた者を癒す甘露そのものとして生まれたのである。以上パドマ・カルポ Padma dkar po が成就者のお言葉通りに編集したものである。幸あらんことを。

訳　　註

1)　序文中に文珠 ― 提婆 ― 竜樹 ― タムパ・ギャガル ― ラブドゥン ―「幻の舞者」（アヴァドゥーティー）― パドマ・カルポという断境説の伝承の系譜が示されている。

2)　ドゥク派の第三代目化身ラマであったジャムヤン・チューキダクパ（hJam-dbyaṅs-chos-kyi-grags-pa，1478－1523）のために，Bya氏の王妃であった母により建立された寺（TCP，Foreword，pp.2－3）。

3)　ZMN，1b，1には，「一切諸仏の秘密の大きな蔵であり，本来清浄なる法界であり，輪廻と涅槃に普く遍満せる「母」であるドジェ・ツゥンモに敬礼せん」（rgyal ba kun gyi gsaṅ chen mdzod／gdod nas rnam dag chos kyi dbyiṅs／ḫkhor hdas yoṅs khyab kun gyi yum／rDo rje btsun mo la phyag ḫtshal //）と述べられている。

4)　多勢の男女の瞑想者たちを集め，大饗宴のかたちで行われる一種の儀式（スタン『チベットの文化』（山口・定方訳）岩波書店，1972，p.150；M. Lalou，PRÉLIMINAIRES D'UNE ÉTUDE DES GAṆACAKRA，『密教学密教史論文集』高野山大学編，昭和40年，pp.41－46）。

5)　マチグ・ラブドゥン（RMによれば1055－1143年）とパドマ・カルポ（1527－1592年）の師であるアヴァドゥーティーが実際に会うことはありえない。従ってアヴァドゥーティーが瞑想においてマチグとまみえて（dgoṅs gter）以下の言葉を授けられたものと思われる。

6)　『テブテルグンボ』（DTN，Pa，2a，5－6；BA，p.982）に「タムパ・サンゲが仰っしゃるのに，ヤルルンのログバサで供養僧のマジョ（＝マチグ）に誠意ある三句の助言を与えたところ，女はそれによって解脱した」と述べられている三句はこの三句をいうものと思われる。

7)　Cf. CTZ，2b，5－3a，3；KLG，46b，2－47b，6；YPT，99b，3－101a，3.

8)　「魔の断境」説には，『ヘーヴァジェラタントラ』に述べられたマントラと相応する実践（行）があるため「魔の行境」説ともいわれる（DTN，Pa，1b，1；BA，p.980）。

9)　ZMN，7a，3－4 に「左右の足の底に本質は菩提心で，姿としては雀の卵程の白と赤の「滴」が〔あると思念する〕」（rkaṅ mthil g-yas g-yon ṅo bo byaṅ chub sems／rnam pa thig le dkar dmar byiḫu sgoṅ tsam／）と述べられ，また CDP，6a，4－5 に「両足の底に白と赤の二種の「滴」をはっきり配置しなさい。その上で「断境」〔の法〕を伝承してきた尊師とマチグに祈願をささげ・・・」（rkaṅ mthil gñis

su thig le dkar dmar gñis gsal thob la ／ gcod yul brgyud paḥi bla ma daṅ ma cig la gsol ba ḥdebs pa・・・）と説かれていることから，ここに「二種の菩提心が生じ」というのは，尊師に祈願をなす前に，両足の底に白と赤の「滴」が生じたと思念することであると考えられる。

10） 三輪すなわち施者，受者，施物の三者を意識することなく，「空」の精神で供養を施すことである。

11） CDP，5b，4－6によれば，七支とは供養を行う際の次のような七要素である。
① 三宝に帰依・敬礼すること。 ② 三宝に供物をささげること。 ③ 悪業を懺悔すること。 ④ 衆生の善に随喜すること。 ⑤ 法輪が輪ぜられるように鼓舞すること。 ⑥ 涅槃に入らず現世におられるよう願うこと。 ⑦ 大菩提のために廻向することである。

12） タムパ・ギャガルワのインドにおける呼称（SCR，12b，2）。

13） 『一切宗義』（8b，5－6）にはマチグ・ラプドゥンは「智慧のダーキニーが人間の女性の姿をとって現われたものである。」と述べられている。

14） 本書はパドマ・カルポにより著わされたものであるから，これ以下の祈願文は後世に付加されたものと考えられる。

15） （1594－1651）（TCP，Foreword，p.4）。

16） 身体全体に遍満する「知」あるいは「心」が集ったのが註9）で述べた両足の底の二種の「滴」であると思われる（cf，CTZ，2b，6）。この「滴」が頭頂の穴から出るまでの過程をZMN，7a，3－6；CDP，7b，3－8a，2の記述を参考にして述べれば，次の通りである。中央動脈中へ「息」を送り込み，さらに「息」を上下させることにより，左右の足の底の白と赤の「滴」は上昇して下腹部で合体し，順次に腹部，胸部，喉部，頭部へと上昇し，頭頂部の穴から空寂として出る。

17） この呪句の唱え方については，YPT，58a，4－59a，3に詳しく述べられている。
cf. 酒井真典『チベット密教教理の研究』高野山遍照光院歴世全書刊行会，1956，pp.27－28.

18） 本書の2a，4に「蘊を食物として布施する，すなわち虚幻の如き禅定（虚幻禅定）により瞑想の旗幟を挙げること」とあり，これ以下は虚幻禅定の説明と考えるべきである。
cf. CTZ，3a，5－4b，6；KLG，48b，3－50a，4；YPT，101a，3－109b，1.

19） CTZ，3b，4－3b，6には動詞ḥbor が使われている。

20） KLG，46a，6－46b，2には「そこで菩提心を起こすことと，帰依をなすことと，身体を供物として献じることが因としての福徳資糧であり，そのあと〔心を〕造作しないあるがままの境界におくことが果としての智慧資糧であるから・・」（de la byaṅ chub mchog

tu sems bskyed pa daṅ ／ skyabs ḥgro byed pa daṅ ／ lus mchod par ḥbur ba rgyu bsod nams kyi tshogs yin ／ rjes la gnas lugs ma bcos paḥi ṅaṅ la ḥjog pa ḥbras bu ye çes kyi tshogs yin pas ／）とある。

21） Cf. CTZ，4b，6－5a，3；KLG，50a，4－51a，1.

22） ZMN，5b，1－4によれば，行の裏づけのない瞑想は，瞑想中と瞑想後の境地が一致せず，神に成就を望み，鬼魔などによる障碍を恐れるなど種々の願望と危惧のために瞑想の真の巧徳があらわれない。瞑想の本当の効果を引き出すために，危険な場所に赴いて「退去させる修法（zlog paḥi sgom）」を修するとする。

23） CDP，6a，1－8a，2には「天の扉を開く」行法が具体的にのべられているが，これによればその内容は本書の金剛禅定に説かれた身心分離の修法に等しい。

24） KLG，50a，3－6には，姿を現わす異変（gzugs ston paḥi cho ḥphrul）と，音をたてる異変（skad ḥdon paḥi cho ḥphrul）と，鬼魔に威圧される異変（ḥdres gnon paḥi chs ḥphrul）と夢の異変（rmi lam gyi cho ḥphrul）の四種の異変が説かれ，YPT，78b，5－79a，2には鬼魔そのもの（dṅos）と心的経験（ñams snaṅ）と威圧（gzi byiṅ）と夢（rmi lam）を通じての異変が述べられている。

25） Cf. YPT，79a，3－79b，1.

26） ZMN，5b，4－6b，1によれば，鬼魔のいる非常に危険な場所で眠り，鬼魔などによる異変の危害をうけなければそれが異変を退治したことになるとする。

27） Cf. YPT，135a，3－135b，1.

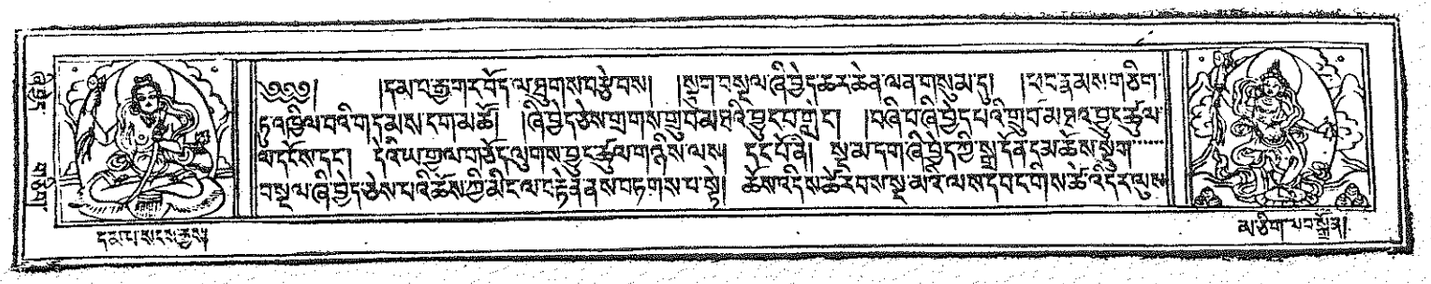
28） Cf. YPT，135b，1－136b，6；ZMN，5b，3－4.

第　三　部

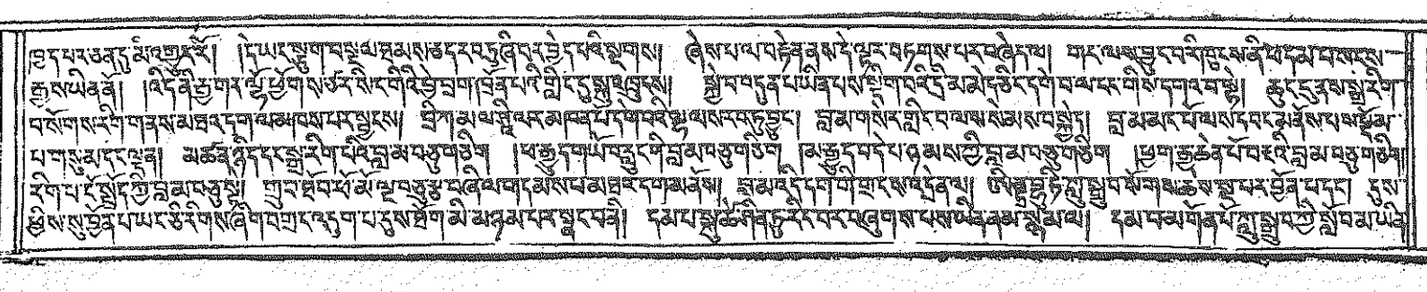
テキスト

I 『一切宗義』シチェ派の章テキスト

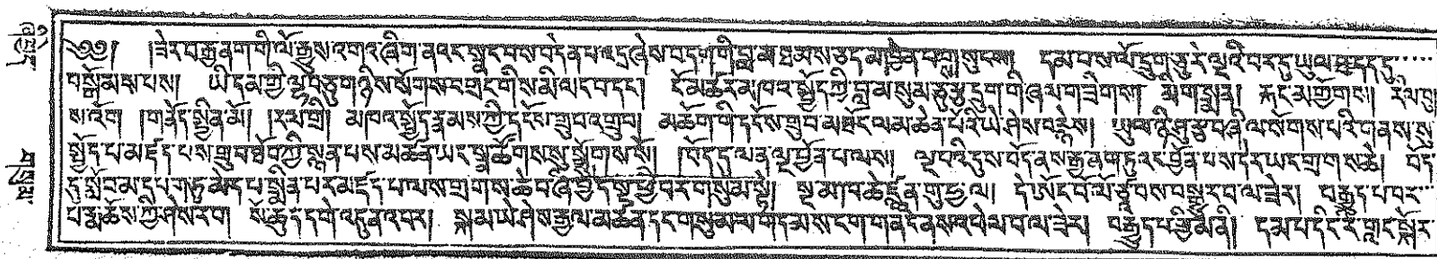
以下のテキストは東京大学蔵のグンルン寺版(『東大目録』№104)のリプリントである。なお Collected Works of Thu'u - bkwan Blo - bzang - chos - kyi - nyi - ma, Edited and Reproduced by Ngawang Gelek Demo, Delhi, 1969, Vol. 2, p. 177－193にはシュルShol版が収められており，グンルン寺版より勝れている。従ってグンルン寺版をシュル版によって訂正して読み，その箇所を各葉の下に示した。また『テプテルグンポ』による訂正箇所は略号DTNによって示した。



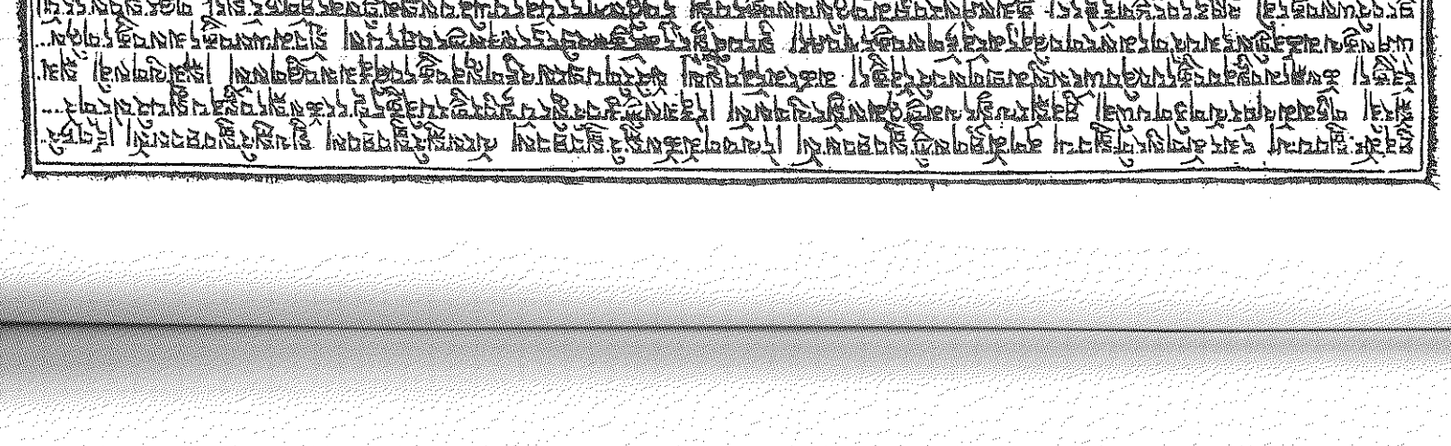
1. ནང་བྱ་ཅན་ → ནད་བྱ་ཅན་　　2. ཐྱོར་བཟོ་ལས་ → ཐྱོར་བཟོ་ལས་



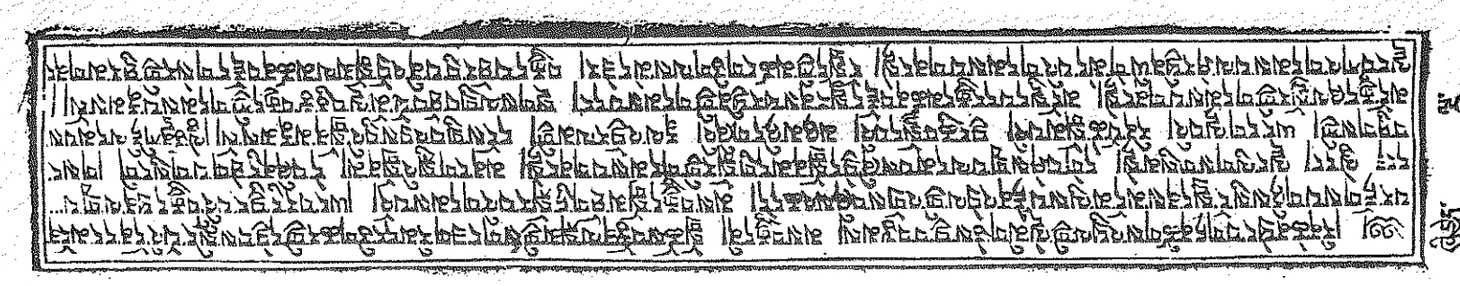
2. ཚ་ར་ཞིང་གི་ → ཚ་ར་ཞིང་གི་　　3. ཕ্ར་ཀ་མ་ཏ্ལ་ལར་ → ཕ་ཀ্ར་མ་ཏ্ལ་ལར་ (DTN, Na, 2a, 2–3)　　5. ཐ্ལ་ལར་ → ཐ্ལ་ལར་



3. ཀཱ་ཥ্ཊ་ཡ་མ་ → ཀཱ་ཥ্ཊ་ཡ་ཡ་　　6. ས་ཆུ་ར་ཀི་འདུ་ནས་ལར་ → ས་ཆུ་ར་ཀི་འདུ་ནས་ལར་

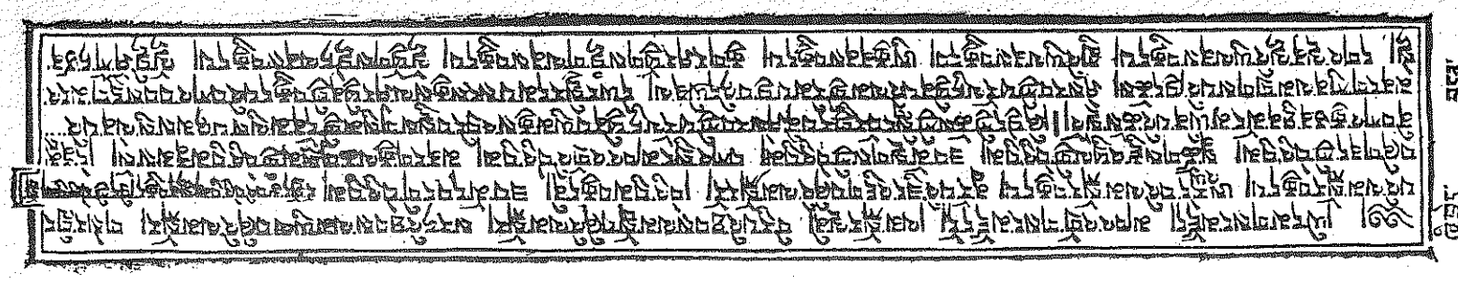


2. ཕྱག་ལན་ནས། → ཕྱག་ལན་ནས། 6. ལྷོད་ཁ་ལས། → ལྷོད་ཁ་ལས། (DTN, Na, 9b, 7)

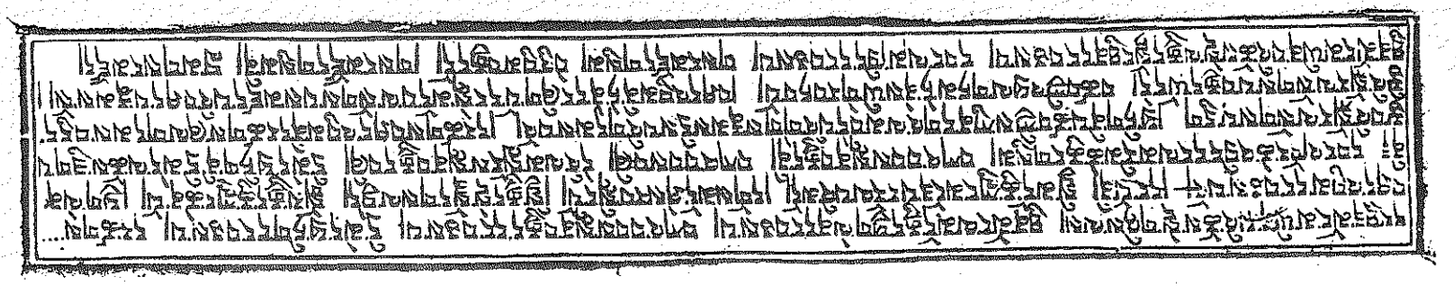


3. ཕ་ཁང་ལ་ལ། → ཕ་ཁང་ལ་ལ། 4. ལན་ཐམ་ལ། → ལན་ཐམ་ལ། 5. ལབ་ཅིང་ → ལབ་ཅིང་

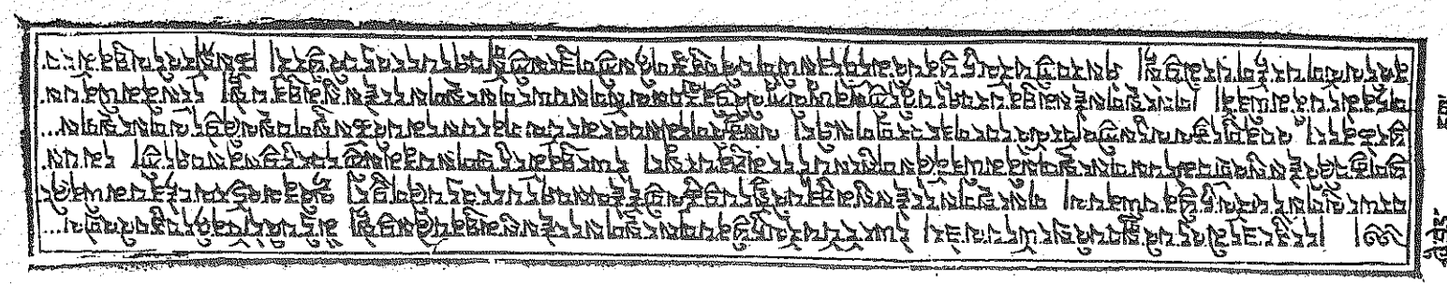
6. ཏ་ཐོག་ཏུ་ནམ་ལྷུང། → ཏ་ཐོག་ཏུ་ནམ་ལྷུང།



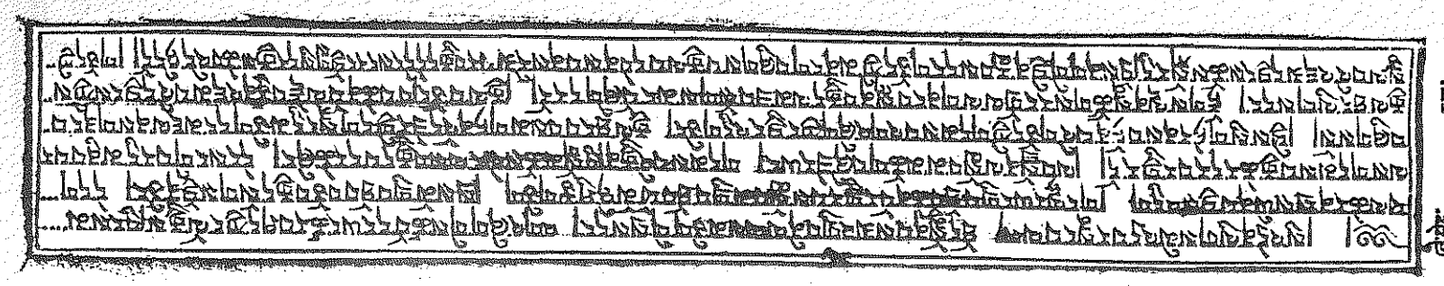
5. ཕ་ནདཱ་ཏ་ → ཕ་ནདཱ་ཏ་



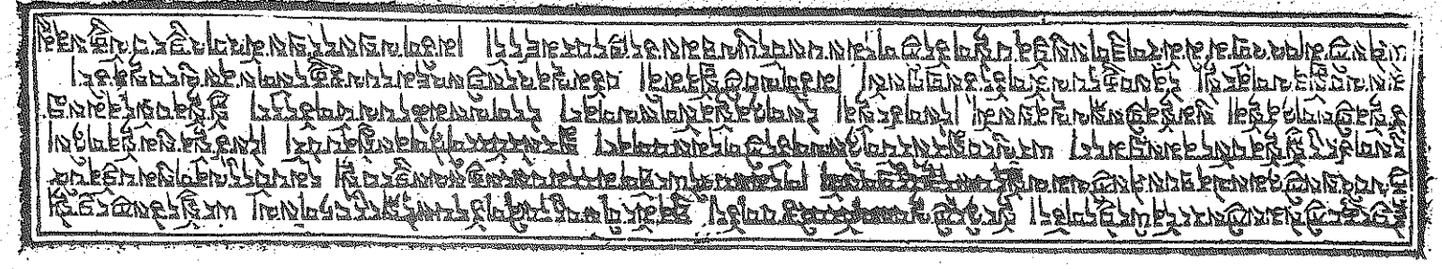
2. རང་ཐམས་ཅད་ → ཐམ་ཅད་ 4. ཏ་ལས་ཕྱིར་ → ཏ་ལས་ཕྱིར་ 6. ཤ་ཏ་ཧ → ཤ་ཏ་ཧ



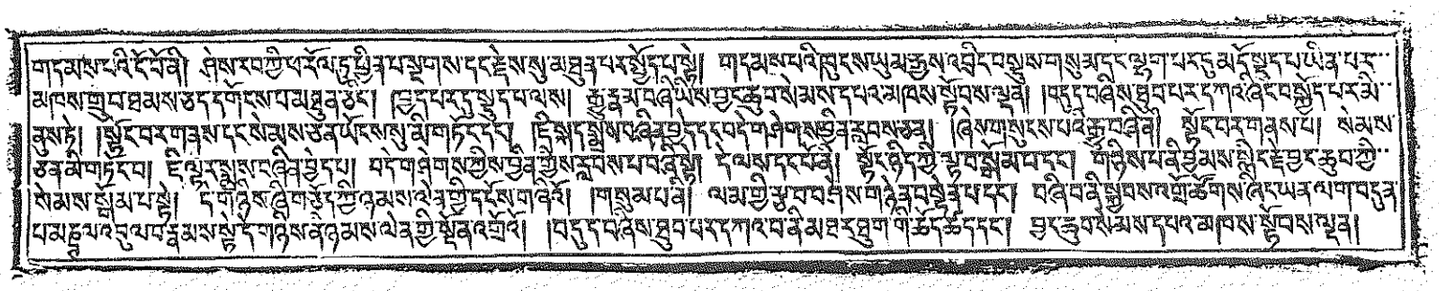
2. ཐ་ཏ་ཐ → ཐ་ཏ་ཐ (DTN, Na, 49b, 1) 4. ཧ་ཧ་ལ་ལ་ → ཧ་ཧ་ལ་ལ



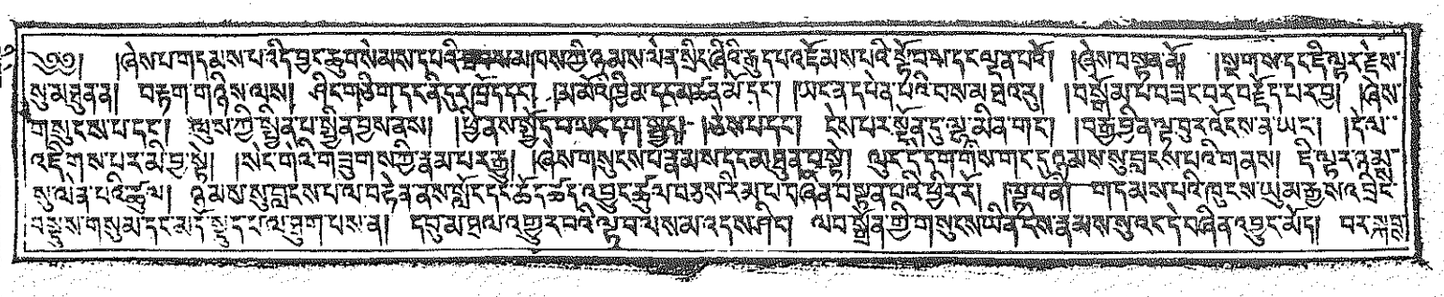
4. ཤ་ཟ་ཁ་ཏ་ → ཤ་ཟ་ཁ་ཏ་



6. ཤ་ཟ་ཁ་ཏ་ → ཤ་ཟ་ཁ་ཏ་



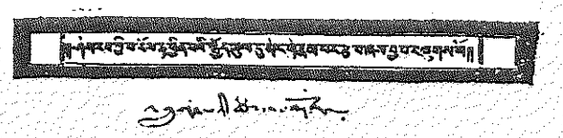
3. སྒོང་བར་ → སྒོང་བར། 4. ཕྱིན་ཀྱིས་བླངས་ → ཕྱིན་ཀྱིས་བཏབས།



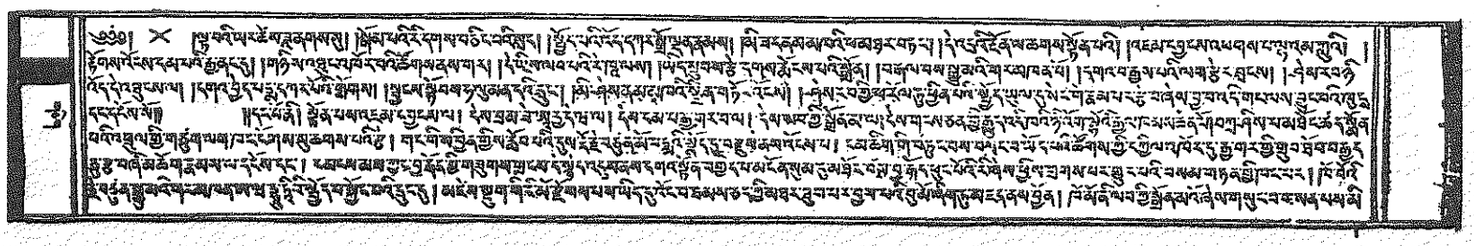
2. དགེ་བའི་བས་མཐའ་ → དགེ་བའི་བས་མཐའ། 3. ལུས་ཀྱི་སྒྲིན་པ་སྒྲིན་བྱས་ནས་ → ལུས་ཀྱི་སྒྲིན་པ་སྒྲིན་བྱས་ནས།

Ⅱ　『般若波羅蜜多の行境における獅子の遊戯』テキスト

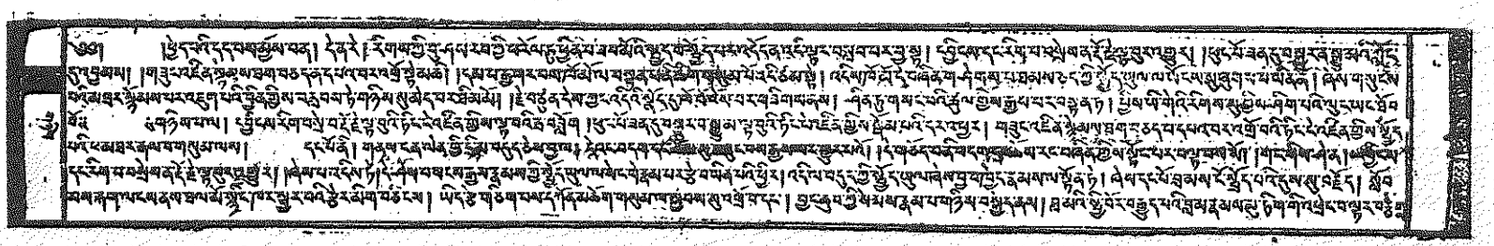
以下のテキストは東洋文庫西蔵蔵外文献№３４のリプリントである。なお明らかに誤りと思われる箇所および不明の箇所は，私見によって訂正して読み，その箇所を各葉の下に示した。



ནོམ་པར་ཀུ་བ་ → ནོམ་པར་ཆུ་བ་

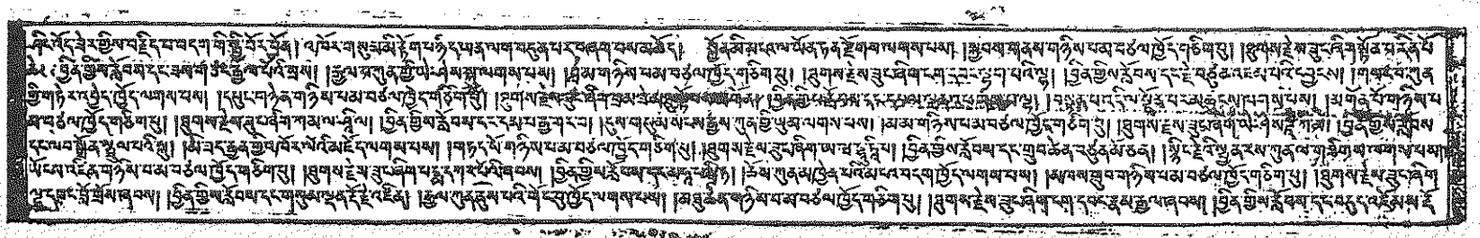


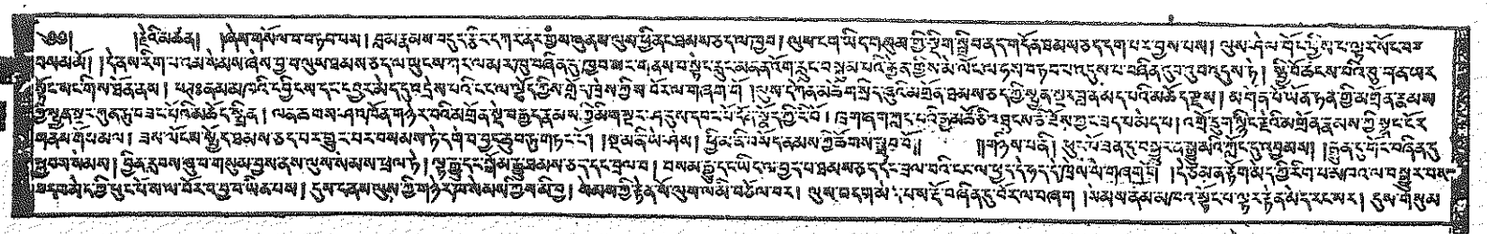
7. མཇུ་ནས་བྱོན་ → མཇུ་ནས་བྱོན་



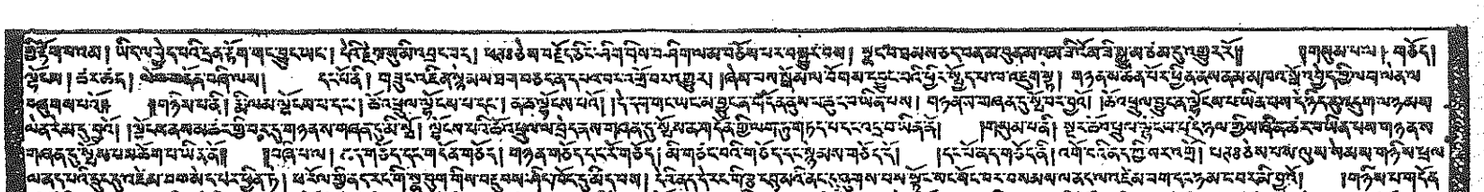
1. ཀས་རབ་ཀྱི་ → ཤེས་རབ་ཀྱི་　1. བསླབ་བྱ་སྟ་ → བསླབ་བྱ་སྟེ་　3. ཆུས་པར་བསྟན་ཏ → ཆུས་པར་བསྟན་ཏེ་　6. ཁྱོད་ནམས་ལ་སྟོན་ཏ → ཁྱོད་ནམས་ལ་སྟོན་ཏོ་

7. ཀུག་ལང་ནས་ནས་ → ཀང་ལང་ནས་ནས་ (cf. CDP, 6a, 4)

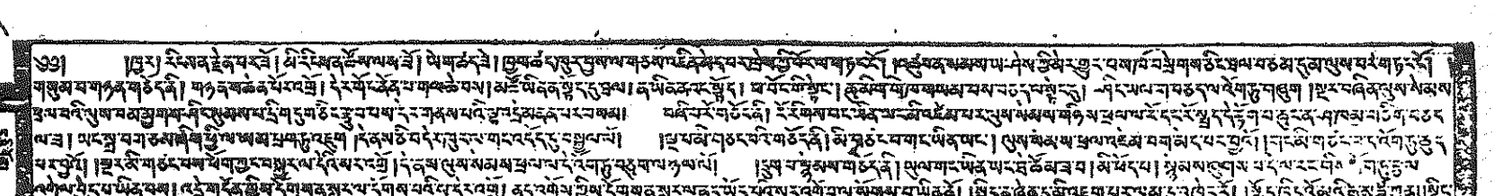




3. དབྱིངས་དང་དབྱར་མེད་དུ་ → དབྱིངས་དང་དབྱེར་མེད་དུ་ 3. ཟླ་ནས་བདེ → ཟླ་ནས་ཀྱི་ཐུ



3. ནམ་ལྟོངས་ → ནམ་ལྟོངས



1. ཁྱར → ཁྱོར 1. ཡེག་ཚད་ཟེ → ཡོག་ཚད་རྡོ 1. ཀཅས་འཇོན → ཀཅས་འཇོན 1. ས�ས་ཡ་ཅེས་ཀྱི → སེམས་ཡེ་ཅེས་ཀྱི

1. ཐལ་བ་ཅམ་དུ → ཐལ་བ་ཅམ་དུ 4. ཟླ་བག་ཅམ་ཞིག → ཟླ་བག་ཅམ་ཞིག 4. མི་ཀཅང་བདེ → མི་ཀཅང་བདེ 4. འཇམ་བག་ཀྱེད → འཇམ་བག་ཀྱེད

4. དཀོན་ཏु → དཀོན་ཏु 5. བང་ཀིས་?ག་ཏु → བང་ཀིས་ཐོག་ཏु

昭和53年3月20日　印刷　　非売品
昭和53年3月25日　発行

西蔵仏教宗義研究（第二巻）
—トゥカン『一切宗義』シチェ派の章—

著者　西岡祖秀
発行者　東京都文京区本駒込2丁目28番地21号
財団法人　東洋文庫
榎一雄
印刷者　有限会社　日本興業社
東京都板橋区高島平3—11—6—1108
発行者　東京都文京区本駒込2丁目28番地21号
財団法人　東洋文庫

本書は東洋文庫に対する昭和52年度文部省補助金の一部により刊行された。

『西蔵仏教宗義研究』第二巻索引

付正誤表

索　　引

ア

アヴァドゥーティー〔パ〕 A wa dhū tī〔pa〕 52, 53, 58

アティーシャ A ti ça 38

阿難 Kun dgaḥ bo 34

アマ・チョモ A ma Jo mo (Ma gcig Lab kyi sgron ma) 8, 9

アマ・ラブキドゥンマ A ma Lab kyi sgron ma (Ma gcig Lab kyi sgron ma) 38

アーリヤデーヴァ Ārya de ba, Ārya de wa 10, 11, 34, 41, 48, 51

イ

一切宗義 Grub mthaḥ thams cad kyi khuṅs daṅ ḥdod tshul ston pa legs bçad çel gyi me loṅ 1, 2, 3, 5, 6, 7, 8, 11, 17, 26, 39, 59

インド rGya gar 1, 5, 8, 9, 10, 11, 42

インドラブーティ Indra bhu ti 27, 41, 42

ウ

ウ dBus 6, 44

ヴァジュラガンタ rDo rje dril bu pa 30, 41

ヴァジュラクローダ Badzra kro dha 6, 28,

ヴァーラーヒー Phag mo 30, 32

ヴィクラマシーラ Bi kra ma çī la 5, 27

ウッディヤーナ U rgyan 34

優波提舎身燈 Man ṅag skuḥi sgron ma 31, 46

エ

遠伝 （riṅ brgyud） 8, 9, 10, 11

オ

男の断 （Pho gcod） 5, 6, 7, 9, 11, 20, 36
女の断 （Mo gcod） 5, 6, 7, 9, 11, 20, 36
オンボ・ローツァーワ Oṅ bo lo tsā ba 5, 28

カ

界 （dbyiṅs） 7, 14, 52, 53, 54
開眼の隠されたテキスト gShuṅ spas pa mig ḥbyed 29
ガクシェー・シェラップゲルツェン sṄags bçad Çes rab rgyal mtshan 32
ガクワン・ナムゲル Ṅag dbaṅ rnam rgyal 54, 59
加持神の隠された宝 Yi dam gsaṅ mdzod 33
カシミール Kha che 5, 28, 44
カーマ （bkaḥ ma） 9
カマラシーラ Ka ma la çī la（Pha Dam pa Saṅs rgyas） 43, 53
カム sKam（-Ye çes rgyal mtshan） 29
カム・イェシェゲルツェン sKam Ye çes rgyal mtshan 6, 28, 30, 44
カム派 sKam lugs 30
ガリー mṄaḥ ris 5, 44

キ

起 （sloṅ, lhoṅs） 15, 17, 19, 38, 55
喜金剛相特羅 dGyes pa rdo rje, Kyeḥi rdo rje（Hevajratantra） 32, 46
キシュー sKyid çod 32
ギャトゥン・キツェッグ rGya ston skyi rtsegs 32
ギャトゥン・シュンヌセンゲ rGya ston gShon nu seṅ ge 30
ギャム・シェラップラマ rGyams Çes rab bla ma 30
キュンチェン sKyon can 29

キュンメー sKyon med 29
キョ・シャーキャイェシェ sKyo Çākya ye çes 6, 20
キョチェン・イェシェラマ sKyo chen Ye çes bla ma（sKyo Çākya ye çes ?） 10
キョチュン・ソナムラマ sKyo chuṅ bSod nams bla ma（sKyo ston bSod nams bla ma ?） 10
キョトゥン・ソナムラマ sKyo ston bSod nams bla ma 5, 6, 7, 35, 36
近伝 （ñe brgyud） 8, 9, 10

ク

空 （stoṅ pa） 4, 12, 13, 14, 35, 37
空行母教誡 Ye çes mkhaḥ ḥgroḥi shal luṅ gsaṅ ba mṅon du phyuṅ ba spros pa ñer shi brtul shugs lam loṅs daṅ bcas pa 15, 16, 17, 19
空性 （stoṅ ñid） 12, 15, 37
究竟果燈 dṄos grub ḥbras buḥi sgron ma 31, 46
クゴム Gu sgom 31
クゴム・チェセン Khu sgom Chos seṅ 36, 50
クシェーマデーヴァ dGe baḥi lha 27
倶生修習 （lhan cig skyes sbyor） 32
クーパドヴィーパ Khron paḥi gliṅ 27, 40
クンガー Kun dgaḥ（Dam pa -） 6, 28, 33, 45, 47
グンカルワ dGon dkar ba 32
クンシュン dKon gshon 35
グンルン dGon luṅ 1, 39
クン・ワンチュグドルジェ ḥKhun dBaṅ phyug rdo rje 30

ケ

ゲルタン rGyal thaṅ 36
ケルデン sKal ldan 6
ケルデン・セモ sKal ldan Sras mo 36
ゲルワ・エンサパ rGyal ba dBen sa pa 36

ゲルワ・テネー　rGyal ba Te ne　28, 45
ゲルワ・トゥンドゥブ　rGyal ba don grub　10, 50
現観荘厳論　mÑon rtogs　30, 34, 45

コ

業印　（las rgya）　31, 32
黒忿怒尊　Khros nag　36
黒放捨　（nag ḥgyed）　16
虚幻禅定　（sgyu ma lta buḥi tiṅ ṅe ḥdzin）　7, 13, 14, 16, 52, 54, 59
ゴムパ・マルゴム　sGom pa dmar sgom　31
ゴモ・チュディン　sGo mo chos sdiṅs　35, 48
ゴルジェ・ゴムパ　Ṅor rje sgom pa　31
金剛手尊　phyag na rdo rje　32
金剛禅定　（rdo rje lta buḥi tiṅ ṅe ḥdzin）　7, 13, 14, 16, 52, 60
コンチャム　Koṅ lcam　49, 50
ゴンテル　（dgoṅs gter）　9, 58
コントゥル・ユンテンギャムツォ　Kon sprul Yon tan rgya mtsho　13

サ

サムテン・ウーセル　bSam gtan Ḥod zer　36
サムテンペル　bSam gtan dpal　35, 48
サラハ　Sa ra ha　34, 41
サンリ・カルマル　Zaṅs ri mkhar dmar　9
三輪無分別　（ḥkhor gsum mi rtog pa）　53, 59

シ

四印契　（phyag rgya bshi）　32, 47
シェブム　bÇad ḥbum　33, 47
シグポ　Shig po（-Ñi ma seṅ ge）　33, 47

シグポ・ニマセンゲー　Shig po Ñi ma seṅ ge　28, 45
四字　（yi ge bshi）　30, 32
獅子の遊戯　Çes rab kyi pha rol tu phyin paḥi spyod yul du seṅ ge rnam par rtse ba　7, 13, 14, 15, 17, 19, 51
シチェ派　Shi byed pa　1, 2, 3, 4, 5, 6, 8, 11, 26, 27, 28, 34, 37, 39, 40, 47, 48
シチェ派仏教史　Shi byed daṅ gcod yul gyi chos ḥbyuṅ rin po cheḥi phreṅ ba thar paḥi rgyan　8, 9, 10, 11
七支　（yan lag ldun pa）　12, 37, 53, 59
四魔　（bdud bshi）　12, 35, 37, 49
シャウ・タッグゴー　Ça ḥug stag sgo　44
釈迦（仏陀）　sTon pa　10, 11, 48, 51
ジャガタ　Dza ga ta　30
釈迦牟尼〔仏〕〔Saṅs rgyas〕Çākya thub pa, sTon pa rin po che　9, 10, 34, 53
シャムパ・ウデッブ　Çaṅs pa dBu sdebs　32
ジャムヤン・ケンツェワンポ　ḥJam dbyaṅs mkhyen brtseḥi dbaṅ po　21
ジャムヤン・チューキダクパ　ḥJam dbyaṅs chos kyi grags pa　58
ジャン　lJaṅ（-bKaḥ gdams pa）　31
ジャン・カーダムパ　lJaṅ bKaḥ gdams pa　6, 31
シャンサグ・チュンワ　Shaṅ sag chuṅ ba　32
呪　（sṅags）　26, 31, 37
終　（tshar tshad）　15, 17, 19, 55
種々放捨　（sna tshogs ḥgyad）　15, 16
殊勝の八章　Khyad par le lag brgyad pa　18, 19
ジュニャーナグフヤ　Dzñā na gu hya　5, 28
聖縁起心　rTen sñiṅ　35, 49
正見〔燈〕　Yaṅ dag lta baḥi〔sgron ma〕　31, 46
乗語〔燈〕　Theg pa gsuṅ gi〔sgron ma〕　31, 46
浄飯王　Zas gtsaṅ rgyal po　53
聖妙吉祥真実名経　mTshan brjod　31, 46
聖文殊師利根本担特羅　ḥJam dpal rtsa rgyud　36, 49

食物として布施する　(gzan bskyur)　4, 7, 14, 18, 19, 52
時輪　(dus ḥkhor)　32
真性十　De kho na ñid bcu pa　32, 47
甚深の熔液　gCod yul rgya mtshoḥi sñin po stan thog gcig tu ñams su leṇ paḥi tshul zab moḥi yaṅ shun　13, 14, 15, 16, 19

ス

スカシッディ　Su kha siddhi　10
スムデン・ドジェジン　gSum ldan rDo rje ḥdzin　53
スムトゥン　Sum ston　6, 36
スムトゥン・レーパ　Sum ston ras pa　6, 20

セ

赤放捨　(dmar ḥgyed, dmar ḥgyad)　14, 15, 16, 19
世親　dByig gñen　10, 34, 48
センゲー　Seṅ ge　34
禅定母　rnal ḥbyor ma　14

ソ

ソ　So (- chuṅ dGe ḥdun ḥbar)　29, 30, 44
息　(rluṅ)　14, 54, 59
ソチュン・ゲドゥンバル　So chuṅ dGe ḥdun ḥbar　6, 28, 44
ソナムラマ　bSod nams bla ma　6, 10
ソ派　So lugs　29
尊師の隠された宝　bLa ma gsaṅ mdzod　33

タ

大印契　(Phyag rgya chen po)　32, 47

大金剛持者　rDo rje ḥchaṅ chen po　10
提婆　ḥPhags pa lha (Āryadeva)　51, 53, 58
ダーキニー　mKhaḥ ḥgro ma　9, 11, 29, 30, 34, 36, 48
ダーキニーの隠された宝　mKhaḥ ḥgro gsaṅ mdzod　33
ダクパゲー　Grags pa brgyad　29
タシウーバル　bKra çis ḥod ḥbar　39
タシーパ・トンツェームンパ　bKra çis pa mthoṅ tshad smon pa　51, 58
タティッグ　Phra tig　33, 47
ダパ　Grva pa (- mÑon çes can)　7, 31, 46
ダパ・グンシェチェン　Grva pa mÑon çes can　4, 6, 8, 46
タムパ　Dam pa (Pha Dam pa Saṅs rgyas)　3, 4, 5, 6, 7, 8, 11, 20, 27, 28, 30, 31, 32, 34, 35, 43, 44, 45, 47, 48
タムパ・ギャガル〔ワ〕　Dam pa rGya gar〔ba〕(Pha Dam pa Saṅs rgyas)　7, 10, 26, 40, 43, 51, 52, 53, 58
タムパ・クンガー　Dam pa Kun dgaḥ　28, 45
タムパ・サンゲ　Dam pa Saṅs rgyas (Pha-)　3, 5, 6, 7, 10, 11, 20, 32, 34, 35, 38, 40, 43, 58
タムパ・チャルチェン　Dam pa Phyar chen　28
タムパ・リンポチェ　Dam pa Rin po che (Pha Dam pa Saṅs rgyas)　42, 43
ターラー　sGrol ma　10, 28, 43
ダルツァッグ　Dar tshags　33, 47
ダルマキールティ　gSer glin pa　27, 34, 41
断　(chod tshad)　17, 19, 38
断　(gCod)　2, 5, 6, 7, 8, 12, 32, 35, 36, 37, 38, 47, 49, 51
断境　(gCod yul)　2, 5, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 47, 48, 58

チ

知　(rig pa)　7, 14, 52, 53, 54
チェ　lCe (- Tsandra ki rti)　31
チェ・チャンドラキルティ　lCe Tsandra ki rti　6, 31, 46

チェモ・ペルドゥン　lCe mo dpal sgron　31
チベット　Bod　1, 3, 5, 6, 8, 9, 10, 11, 26, 27, 36, 42, 43, 44
チャムモ・ラドゥ　lCam mo la ḥdus　50
チャラシムハ　Tsa ra seṅ ge　27
チャルチェン　Phyar chen（Dam pa -）　6, 32
チャルチュン　Phyar chuṅ　6, 28
チャンキャ・ロルペードルジェ　lCan kya Rol paḥi rdo rje　42
チャンセムパ　Byaṅ sems pa　35
チャンダナドゥビーパ　Tsan dan gyi gliṅ　34
中央動脈　（rtsa dbu ma）　14, 56, 59
中観　dBu ma　35
中観帰謬論証派　dBu ma thal ḥgyur pa　38
中国　rGya nag　1, 27, 42, 44
チューキセンゲ　Chos kyi seṅ ge　8, 15, 21
チュゴム　Chu sgom　31
チュ派　gCod lugs　2, 26, 35
チュバル　Chu bar　32
チュルン・ゴンパルロルペードー　Chu Kluṅ mṅon par rol paḥi mdo　33
チュルン・チェンポ　Chu kluṅ chen po　33

ツ

ツァリ　Tsha ri　5
ツァン　gTsaṅ　5, 35, 49
ツァントゥン　gTsaṅ ston　36
ツゥンドゥ・ゴーチャ　brTson ḥgrus go cha　40
ツェトゥン　Tse ston　6, 36
ツォンカパ　Tsoṅ kha pa, rje rin po che　35, 36, 48

テ

ディンタン　ḥBrin thaṅ　5

ディンリ　Diṅ ri　3, 4, 6, 28, 35, 42, 44, 45, 48
ディンリ・ギェチュパ　Diṅ ri brgyad cu pa　35, 48
デウェグ°ドゥップ　bDe baḥi dṅos grub　10
滴　（thig le）　14, 58, 59
デヌーセルチェ　sDe snod gsal byed　33
テネー　Te ne（Gyal ba -）　33, 47
テブテルグ°ンポ　Deb ther sṅon po　2, 3, 5, 6, 7, 8, 11
テルマ　（gter ma）　9

ト

トゥカン・ロサンチューキニマ　Thuḥu bkvan bLo bzaṅ chos kyi ñi ma　1
ドゥジョム・ドルジェ　bDud ḥjoms rdo rje　54
トゥニュン　Thod smyon（- bSam ḥgrub）　10
トゥニュン・サムドゥップ　Thod smyon bSam ḥgrub　36, 50
ドゥプチェン・ツンモチェン　Grub chen btsun mo can　53
ドゥプチュン　Grub chuṅ　49, 50
ドゥプベー　Grub be　50
トゥンリンパ　Don rin pa（Don grub rin chen pa）　35, 48, 49
ドゴム　ḥBro sgom　6, 31
ドジェ・ツゥンモ　rDo rje btsun mo　51, 58
ド・チュツゥン　sGro chos brtson　31, 46
ドメー　mDo smad　39

ナ

ナーガールジュナ　kLu grub　27, 35, 41, 42, 58
ナツォッグ・ランドゥル　sNa tshogs Raṅ grol　36
ナーローパ　Nā ro pa　34

ニ

ニェドーワ　sÑe mdo ba　33
ニェモ　sÑe mo　32
ニェル　gÑal　44
ニェルトゥー　gÑal stod　31
ニェントゥン　gÑan ston　6, 20, 36
二儀軌　brTag gñis（Hevajratantra）　37, 50
ニャ・ローツァーワ　gÑags lo tsā ba　31
ニュンパ・ペレ　sMyon pa Be re　6
ニュンパ・ペロ　sMyon pa Pe ro　6, 36
ニンポ・ドゥブチェ　sÑiṅ po grub che　49
ニンポ・ドゥブパ　sNiṅ po grub pa　49

ネ

ネーテン・チュンダッグ　gNas brtan ḥbyuṅ grags　32
ネパール　Bal po　5, 49
燃灯仏　Saṅs rgyas mar me mdzad　34

ハ

パクサムジョンサン　Pag Sam Jon Zang　3, 6, 10, 11, 15, 16, 17, 19
パグハ　ḥPhags lha（Āryadeva）10
白放捨　（dkar ḥgyed, dkar ḥgyad）　14, 15, 16, 19
パ・タムパ・サンゲ　Pha Dam pa Saṅs rgyas　2, 4, 26, 40, 43
パッ　（phaṭaḥ）　14, 16, 54, 56, 59
パツァッブ　Pa tshab（- sgom pa）　33, 47
パツァッブ・ゴムパ　Pa tshab sgom pa　28, 45
パドマ・カルポ　Padma dkar po　7, 13, 53, 57, 58, 59
バラサハ　Ba ra sa ha　40
ハワン・ロドゥー　Lha dbaṅ blo gros　53
バンガラ　Bhaṁ ga la　34
般若波羅蜜多　（çer phyin, çes rab kyi pha rol tu phyin pa）　9, 26, 31, 32, 34, 37, 38, 47, 48
般若波羅蜜多経（般若経）　Çes rab kyi pha rol tu phyin paḥi mdo,〔Çes rab kyi pha rol tu phyin pa〕Yum　3, 7, 30, 33, 34, 38
般若波羅蜜多心経　Çes rab sñiṅ po　32, 33, 46
般若波羅蜜多の心伝の実践・口伝の宝石の首飾り・因明の魔法の錠　Çer phyin thugs brgyud lag len sñan brgyud rin chen phreṅ ba gtan tshigs ḥphrul gyi lde mig　30
斑放捨　（Khra ḥgyed）　16

ヒ

ビショーコータ　Bhi ço ko ta　34
秘密心〔燈〕　gSaṅ ba thugs kyi〔sgron ma〕　31, 46
平等事〔燈〕　mÑam ñid gshiḥi〔sgron ma〕　31, 46
ビルパ　Bi ru pa　34, 41

フ

ブグトゥン　Phug ston　6, 20
仏説仏母宝徳蔵般若波羅蜜多経（仏母宝徳蔵般若経）　sDud pa　4, 12, 13, 30, 31, 37, 38, 50
忿怒母　Khros ma　14, 16

ヘ

ヘーヴァジュラタントラ　Hevajratantra　12, 46, 50, 58
ベタラ　Bhe ta la　34, 40
ヘールカ　bDe mchog, He ru ka　30, 31, 32
ベロ・ニュンパ　Be ro sMyon pa　20
変　（cho ḥphrul）　15, 17, 19, 60
ベン・グンゲル　ḥBan guṅ rgyal　32

ホ

母音子音　dByaṅs gsal　35

宝修習〔燈〕　Rin po che sgom paḥi〔sgron ma〕　31, 46

菩提行〔燈〕　Byaṅ chub spyod paḥi〔sgron〕　31, 46

菩提心　(byaṅ chub kyi sems)　12, 37, 53, 58

マ

マ　rMa (= Chos kyi çes rab)　29, 44

マイトリパ　Mai tri pa　32, 41, 47

マウェーセンゲ　sMra baḥi seṅ ge　30, 45

マジョ　Ma jo (Ma gcig Lab kyi sgron ma)　7, 21, 58

マチグ　Ma cig (Ma gcig Lab kyi sgron ma)　3, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 17, 18, 19, 20, 36, 50, 58

マチグ・シャマ　Ma cig Sha ma　3, 4

マチグ・ラブキドゥンマ　Ma gcig Lab kyi sgron ma　3, 4, 5, 6, 7, 8, 10, 17

マチグ・ラブドゥン〔マ〕　Ma cig Lab sgron〔ma〕(Ma gcig Lab kyi sgron ma)　2, 9, 10, 11, 32, 36, 47, 49, 58, 59

マ・チューキンェラップ　rMa Chos kyi çes rab　6, 28, 44

魔の行境　(bDud kyi spyod yul)　18, 19, 53, 58

魔の断境　(bDud kyi gcod yul)4, 9, 10, 13, 16, 48, 58

マラ・セルポ　sMa ra ser po　5, 6, 20, 36

曼荼羅　(maṇḍa la)　12, 37

マンラ・セルポ　rMaṅ ra ser po (sMa ra ser po)　7, 49

ミ

密呪　(gsaṅ sṅags)　32, 47

名等誦金匙　mTsan brjod gser gyi thur ma　31, 46

弥勒　Byams pa　10, 34, 48

ム

無着　Thogs med　10, 34, 41, 48

モ

文殊〔師利〕(妙音)　ḥJam dpal smra baḥi seṅ ge, ḥJam dbyaṅs〔smra seṅ〕　10, 11, 36, 43, 51, 53, 58

ヤ

ヤップ・チュディン　Yab chos sdiṅs　35, 48

ヤマーンタカ　gÇin rje gçed　28, 43

ヤルルン　Yar luṅ, Yar kluṅs　7, 36, 49, 58

ヤンドゥップ　Yaṅ grub　49, 50

ユ

勇行禅定　(dpaḥ bar ḥgro baḥi tiṅ ṅe ḥdzin)　7, 13, 14, 15, 52, 55, 60

瑜伽道〔燈〕　rNal ḥbyor lam gyi〔sgron ma〕　31, 46

ラ

ラブキドゥンマ　Lab kyi sgron ma (Ma gcig Lab kyi sgron ma)　51, 52

ラブドゥン　Lab sgron (Ma gcig Lab kyi sgron ma)　36, 38, 53, 58

ラチャム　La lcam　49, 50

ラマ・ラ　bLa ma rMa　4

ランコル　gLaṅ skor　28

リ

リトゥ・シグポ　Ri khrod Shig po　20

ログ・シェラップウー　Rog Çes rab ḥod　6, 20, 45
ログ・シェラップセンゲー　Rog Çes rab seṅ ge　28, 45
ログパサ　Rog pa sa　7, 58

正　誤　表

ページ	行	誤	正
まえがき	1〜2	チチベットの言葉	チベットの言語
V	14	東大目録	『東大目録』
〃	〃	東京大学所蔵チベット文献目録	『東京大学所蔵チベット文献目録』
4	20	gzan hgyur	gzan ḥgyur
5	1	ィチュ派	ィチェ派
〃	4	うち	うちに
6	5	ソチュン・ゲドゥンバル	ソチェン・ゲドゥンバル
〃	6	カム・イュシェゲルツェン	カム・イェシェゲルツェン
〃	10	ḥBro Sgom	ḥBro sgom
〃	26	教教	教義
8	18	伝法	仏法
9	17	ダーキー	ダーキニー
11	21	アリヤデーヴァ	アーリヤデーヴァ
14	11	rtsa dba ma	rtsa dbu ma
〃	26	禅定女	禅定母
15	26	断境設	断境説
16	27	亨受	享受
18	5	phyiṅ	phyin
〃	7	phyui	phyin
20	21	byuṅ no	byuṅ ṅo
21	15	mkhen rtseḥi	mkhyen brtseḥi
〃	19	mkhah	mkhaḥ
22	7	PTS	TPS
〃	9	ni çu	ñi çu
〃	10	cin	ciṅ
24	30	khyad par par ro	khyad par ro
30	21	sDod pa	sDud pa
〃	23	ḥKuṅ	ḥKhun

ページ	行	誤	正
32	7	バーラーヒー	ヴァーラーヒー
〃	19,21	般若波羅蜜多	〔般若〕波羅蜜多
〃	26	時輪（dus kyi ḥkhor ro）	時輪（dus kyi ḥkhor ro）の灌頂を与えられたといわれており、〔また〕
〃	28	シチュ	シチェ
33	11	Chu kluṅ chen po	Chu kluṅ chen po
35	1	由来するものであり	由来するのであり
〃	14	dbYaṅs gsal	dByaṅs gsal
〃	〃	rTen sñiṅ	rTen sñiṅ
〃	27	キョトゥン・ソナムラ	キョトゥン・ソナムラマ
36	30	ゲルワ・ウェンサパ rGyal ba dbEen sa pa	ゲルワ・エンサパ rGyal ba dBen sa pa
38	17	成じた	応じた
40	17	チャラシンが	チャラシンガ
〃	19	brTsn	brTson
〃	24	mchog mchod pa	mchod pa
41	6	(Sāntideva)	(Śāntideva)
〃	19	(Dombhī-pa)	(Ḍombhī-pa)
〃	29	(Sabarī)	(Śabarī)
42	9	示したうに	示したように
〃	29	rolzoṅ	rdzoṅ
43	6	(Ekajatī)	(Ekajaṭī)
44	4	Sun pa	Sum pa
〃	17	bgon	byon
〃	32	plḥo	paḥo
46	4	nÑon ces	mÑon ces
47	28	bcad	bçad
〃	31	ruams	rnams

ページ	行	誤	正
49	23	gnaṅ no	gnaṅ ṅo
50	2	ドゥブペー	ドゥブペー
〃	4	ゲルワ・トゥンドブ	ゲルワ・トゥンドップ
52	8	ラブドゥンマ	ラブキドゥンマ
〃	23	sgyu ma buḥi	sgyu ma lta buḥi
53	32	hdzin	ḥdzin
54	1	魂	塊
58	4	hJam	ḥJam
〃	9	hdas	ḥdas
〃	25	『ヘーヴァジェラタントラ』	『ヘーヴァジュラタントラ』
60	13	gnon paḥi chs ḥphrul	gnon paḥi cho ḥphrul
〃	15	gzi byiṅ	gzi byin
奥付	11	発行者	発行所